

TAT

<http://tuat-dousokai.jp.org/>

農 工 通 信

NO.
79

Tokyo University of Agriculture and Technology



生物システム応用科学府本館

■ 寄稿文隨時募集中

目次

■ 同窓会長挨拶	3	ブラジルの同窓	
■ 新旧理事長挨拶	4	市川 忠雄 (獣医 S30)	27
■ 同窓会第45回通常総会・理事会開催さる	5	私が中学校の環境教育でやりたいこと	
■ 同窓会創立50周年記念事業の募金開始	10	福澤 徳穂 (植防 S55)	28
■ 叙勲者からの寄稿	11	わたしの長野五輪招致	
神社佛閣を中心とした自然保護		西田 和彦 (農学 S36)	29
山口 正信 (糸専 S23)	11	回り道の人生	
来し方を顧みて		畑島 剛 (養実 S23)	30
水口 衛 (獣医 S29)	12	卒業一年後の近況	
叙勲受章の栄に浴して		谷川 敦子 (地生院 H19)	30
関口 政雄 (養蚕 S30)	12	合成繊維と松山	
叙勲報告		鈴木 東義 (工化 S39)	31
阪田 剛一 (農工 S33)	13	谷津田におけるほ場整備	
創造する力		橋本 雅永子 (農工 H9)	32
衣山 陽三 (農化 S36)	14	松坂牛はなぜ高級ブランド®になったのか	
黄綬褒章を受章して		吉田 譲 (獣医 S45)	32
横山 隆一 (獣医 S46)	15	山形牛	
■ 同窓生からの寄稿	16	河野 誂 (獣医 S45)	33
サイボク笹崎会長渋沢栄一賞受賞の栄に輝く		過去のモノは不要か?	
比留間 康 (獣医 S28)	16	門屋 一臣 (農学 S33)	34
エイジレス・ライフ賞の受賞によせて		支部の同窓会	
中津 純 (農化 S28)	17	松丸 勝二 (農学 S37)	35
受賞の報告と近況		緑と花と彫刻の博物館の紹介	
宮崎 良文 (環保院 S54)	18	武永 順次 (元教員)	36
平成19年度日本獣医学会賞受賞によせて		■ 退職者のご挨拶	37
真瀬 昌司 (獣医 H2)	18	安部 浩 (応用生物科学科)	37
自信を持って「技術の炎に身をつつむ」心を養おう		渡邊 兼五 (地域生態システム学科)	37
渡辺 敦夫 (農化院 S43)	19	里深 文彦 (地域生態システム学科)	37
卒業生の活躍		久野 勝治 (環境資源科学科)	37
田谷 一善 (獣医 S46)	20	瀬戸 昌之 (植防院 S44) (環境資源科学科)	37
四半世紀前の思い出		堀尾 正韜 (生物システム応用科学府)	38
藤田 二 (農工 S58)	21	高橋 雄造 (電気電子工学科)	38
図書館の貸し出しクラシックCDと高橋延匡先生のこと		望月 貞成 (機械システム工学科)	38
佐渡 篤 (林産 S38)	22	吉田 豊明 (機械システム工学科)	38
知識の共有を通じた平和な世界-農工大とガール大学の国際協力		南塚 隆夫 (情報工学科)	39
Mohammad Mustafa Akbari (機込院 H19)	22	鈴木 健之 (応用分子化学科)	39
随想 1 輸入食品の農薬汚染から、2 地球と命と科学		岡田 利男 (物理システム工学科)	39
藤本 修身 (農化院 S46)	22	■ 平成19年度同窓会学生援助事業報告	40
フライフィッシングと私		■ 同窓会役員等体制	44
白銀 雄 (林学 S41)	24	■ 平成19年度卒業生・修了生	45
趣味のオートバイ		■ 部会・支部・クラス会だより	52
泉水 夏樹 (機械院 H2)	25	■ 掲示板	56
バンコク滞在の2年を振り返って(その1)		■ 事務局だより	60
竹原 孝一 (獣畜 S24)	25	■ 編集後記	

同窓会長 挨拶

記念事業の発足にあたって

同窓会長 畑中 孝晴 (農学 S31)

同窓生の皆さんにはそれぞれのお立場でお元気でご活躍のことと存じます。

さて、大学創基140周年・同窓会50周年記念事業がいよいよ本格的に始まります。

今回は同窓会単独ではなく大学と協調して記念事業を盛り上げることとなり、既に合同の実行委員会も設置され同窓会では創立50周年記念事業会のほか、常務理事会に松岡正邦元理事長を募金担当理事として加え、募金活動に万全を期すこととしております。大学側では特別に合同記念事業推進室を設け、小畑学長はじめ関係の皆さんが大変熱心に取り組んでおられます。

合同記念事業では記念ホールの新設・整備、産学交流会館の建設、学生支援のための基金創設、科学博物館（旧繊維博物館）の充実等を行なうこととしておりますが、同窓会としては記念ホールに重点をおいていきたいと考えております。

平成11年の大学創立50周年の際には府中キャンパスに同窓会室と記念ホールができ、いろいろな行事に活用されておりますが、小金井キャンパスにはこうした施設がありません。今回は小金井にホールを新設するとともに、府中のホールを拡充して同窓会の部会や懇親会などができる使い勝手のいいものにしていきたいと思っております。

さらに現在、同窓会から在校生に学会発表などの際にささやかな援助をしておりますが、恥ずかしいぐらい小額ですので、同窓会の存在を認識して頂くためにも、大学側とも協力してもう少しなんとかしたいと今回の募金目的に組み込みました。

また、この機会に同窓会独自の事業として「同窓会50年史」を纏めることとし、既に大石勇名誉教授を委員長に編纂委員会を発足させ作業に入っておりますので、これに対しても同窓生のご協力をお願い致します。

卒業生が4万人もいるので億単位のお金ですが、過去に集まりそうですが、過去の例から見てもなかなかそうは参りません。大多数の方は出せないとか出したくないとかと言うのではなく、つつい出しそびれてしまうというのが実態です。組織が大きくなればなるほど対人関係も希薄になりがちです。したがって今回は部会、支部、年次会、クラス会、学科や研究室、クラブOB会など出来るだけきめ細かく対応していきたいと思っておりますので、幹事さんには大変ご苦勞をお掛けしますがよろしくお願い致します。

また、一口5千円というのは少ないではないかとかのご意見もありましたが、この記念事業は多くの同窓生に参加して頂くことも目的の一つとしておりますので、最小の単位として決めさせて頂きました。勿論、青天井で上限はまったくありませんし、税金控除もセットしましたので、大口のご寄付は大歓迎です。

冒頭からお願いばかりになってしまいましたが、何とかこの記念事業を成功させたい思いからでありますので、お許し頂きたいと思っております。

同窓生各位のご事情は様々でしょうが、大学のため、同窓生のため、後輩のため出来る限りのご協力をお願い致します。

産学連携における同窓会の役割

新理事長 亀山 秀雄 (化工S48)

この度、20・21年度の理事長に就任することになり身の引き締まる思いでおります。7月から東京農工大学創基140周年・同窓会創立50周年記念事業がスタートしました。理事長として、任期中に同窓生の皆様からどれくらい寄付が頂けるかが最大の心配事であります。独立法人化後、大学と同窓会の結びつきはどの大学も強くなっております。部会活動や支部活動を活性化して同窓生の絆を強めるだけでなく、同窓生の社会的な基盤を生かして、大学に対して財政面、教育面、研究面で支援できる同窓会になることも重要な活動と思えます。今回の記念事業は、大学側に積極的に協力するため募金目的の中に学生支援のための基金の創設を取り入れました。また同窓生の社会貢献の

受け皿を同窓会が担うということと理解しております。従いまして、部会・支部活動の場に常務理事が積極的に参加して、記念事業に寄付することでどのような社会貢献を行えるのかを説明に伺います。常務理事の参加要請よろしくお願い致します。農工大学の同窓生の中にも大学への産学連携に強い関心をもつ有志がAT-Netzという組織を作って、産学連携センターの特許調査や学科の安全教育、MOTでのビジネス講演、農工大発ベンチャーへの人材支援など実質的な産学連携支援活動を行っております。このような活動をもっと活発に進めるために、同窓会が果たせる役割を考えて行きたいという思いを述べて、就任の挨拶にしたいと思います。

理事長退任の挨拶

前理事長 生原 喜久雄 (林学S41)

このたび平成18～19年度の理事長の任期を終え、亀山秀雄先生に引き継いでいただきました。会長、副会長、常務理事および事務局長のご協力で、無事任務を遂行することができました。教育研究の貴重な時間を割いてご協力いただいた理事の方々に深く感謝いたします。短い2年間でしたが、いくつかの課題については解決することができました。しかし、各種規則類の整理・統合についても、未整理の部分がまだあります。同窓会の法人化は今後の大きな課題です。また、同窓会と大学の協力体制の確立、同窓会創立50周年記念事

業、支部・部会の活性化等、早急に検討すべき課題も多く残されております。新執行部の皆様よろしく願いいたします。末筆ながら同窓会の一層の発展を祈っております。ご協力ありがとうございました。

同窓会第45回通常総会・理事会開催さる

■日時：平成20年5月24日（土）13：30～15：15 ■場所：府中キャンパス農学府講堂 ■出席者：166名（内委任状68名）



第45回通常総会・理事会は、5月24日（土）母校府中キャンパス農学府講堂で開催された。

通常総会に先だって理事会が開催され、畑中会長を議長として、常務理事の指名、理事、代議員の選任、監事の選出、特別会員の推薦、通常総会の議案が承認された。亀山副理事長から、出席者が成立定数を超え通常総会が成立した旨の報告があった。畑中会長から挨拶があり、「同窓会創立50周年記念事業会の発足、同窓会会員名簿の発行延期の検討、同窓会の財政状況が改善された等」の紹介があった。続いて、ご出席いただいた小畑学長をはじめ、来賓（竹本理事、有馬農学府長、國見連合農学研究科長、梶井東京農工大学教育研究振興財団理事長）の紹介があった後、小畑学長から同窓会からの支援に対する謝意があり、大学の予算（運営費交付金・授業料約100億円、競争的資金約40億円）、本年度の競争的資金の申請状況、同窓会との合同記念事業の協力実施等の大学の近況紹介があった。亀山副理事長から、通常総会について、会則第9条に基づき畑中会長が議長を務める旨の説明があった。

議事

1. 議事録署名人の選任

議事録署名人に岡山隆之氏、堀三計氏を選出した。

2. 平成19年度事業報告、決算報告及び監査報告

高橋総務部長より、資料に基づき平成19年度の実業報告【別記1】、堀経理部長より平成19年度決算報告【別記2】があった。続いて澤田監事より、決算報告書・帳簿・伝票等精査した結果いずれも適正に処理されており、事業・業務執行状況も適正であること、また個人情報保護に関する取扱いも適正に行われている旨の報告があり、いずれの報告も異議なく了承された。

3. 会則および細則等の改正

10年前納会費の削除及び部会・支部活動費の基本料1万円増額、並びに千葉共済の支部扱いの廃止等の理由による会則及び細則の改正案【別記3】に関し、高橋総務部長より提案があり、審議の結果、異議なく承認された。

4. 平成20年度事業計画、収支予算案

高橋総務部長より、例年の通常の実業計画に同窓会創立50周年記念事業の募金活動の開始、生物システム応用科学府に部会を設置、同窓会会員名簿の発行延期、母校援助費の増額等を加えた平成20年度事業計画【別記4】、堀経理部長より、平成20年度の収支予算案【別記5】の提案と説明があり、審議の結果、異議なく承認された。

5. 理事・代議員の選任、監事の選出、常務理事の指名

生原理事長より平成20～21年度理事会推薦理事（15名）、部会推薦理事（61名）、部会推薦代議員（39名）、支部推薦代議員（47名）の選任及び監事（3名）の選出について提案され、審議の結果、原案どおり承認された。続いて、畑中会長から、亀山新理事長及び常務理事の指名があり、新旧理事長から挨拶があった。

6. 特別会員の推薦

生原理事長より、理事会で推薦された特別会員の紹介があった。

7. 同窓会創立50周年記念事業

通常総会に先だって開催された第一回同窓会創立50周年記念事業会の議事内容について、高橋総務部長から【別記6】に基づき説明があり、審議の結果、8月下旬に発行予定の「農工通信79号」に同封して募金活動を開始することとして同窓会創立50周年記念事業を実施することが、異議なく承認された。

8. 同窓会50年史の発行

大石同窓会50年史編集委員長より、同窓会50年史の刊行企画書（案）【別記7】について説明があり、審議の結果、承認された。

9. 同窓会会員名簿の発行延期

生原理事長から、昨年の通常総会に引き続き、再度、同窓会会員名簿の発行延期について説明【別記8】があり、審議の結果、異議なく承認された。

10. 生物システム応用科学府に部会を設置

生原理事長より、生物システム応用科学府からBASE部会を設置することについて申請があり、部会長を含めて承認された。

通常総会終了後、福利厚生センターで懇親会が開催された。

【別記1】

平成19年度事業報告

1 第44回通常総会・理事会の開催

平成19年5月26日（土）、本学小金井キャンパスにて第44回通常総会・理事会を開催した。議事内容は、1）会長・副会長の選任（案）、2）平成18年度事業報告、決算報告、3）平成19年度事業計画（案）、予算（案）、4）同窓会創立50周年記念事業の推進、5）同窓会名簿の発行について諮られ承認された。

2 同窓会組織の強化、活性化および財務体質の健全化

部会・支部・職域組織の活動を支援するとともに、各組織との連携を進め、常務理事の積極的派遣を行った。技術経営研究科に部会を設置した。収入増を図るために、入学案内文等に工夫をして、入会金・賛助会費等の大幅な増収入をはかった。また、ペイオフ対策及び利息による増収入をはかるため、定期預金を順次国債に切替えた。

3 同窓会会員名簿発行に関する部会・支部へのアンケート調査の実施

回答率74%で、会員名簿発行延期について賛成78%、反対22%であった。

4 同窓会創立50周年記念事業の推進

同窓会創立50周年を記念して、大学との合同記念事業として、1）小金井記念ホールの設置、2）大学50周年記念ホール（府中）の増改修、3）同窓会50年史の刊行、4）学生援助の実施、5）祝賀会の挙行等を計画した。

5 「農工通信78号」の発行

従来の会報を大幅に刷新した「農工通信77号」が会員からの評価は大変好評であったので、「農工通信78号」も前号の編集方針を基本的に踏襲すると共に、新規に広告の掲載を行った。

6 同窓会PR活動の充実

同窓会紹介パンフレット及びHPの更なる充実を図り、PR活動に努めた。

7 会員動静整理の継続実施

農工通信の未着信会員について常時追跡調査を行うとともに、年度末に、さらに全会員に対して動静調査を行った。なお、回答者の50%超が非掲載希望者であった。

8 (財)東京農工大学教育研究振興財団への協力

本財団の事務に対する実質的支援を従来どおり継続して行った。

9 母校に対する援助、新入正会員歓迎行事の継続実施

学生の勉学・学生生活に関する援助、学会発表、コンテスト・コンクール等発表・入賞祝い、優秀卒論副賞等の援助、学園祭・課外活動の援助、同窓会推薦キャリア・アドバイザー支援等の予算を増額して行った。また、卒業・修了証書カバーの贈呈を継続して行った。

10 会員の慶弔

叙勲等11名に祝電、会員逝去13件に弔電を打電した。

11 新潟中越沖地震お見舞い

新潟県の中越沖被災者の賛助会員に見舞金を送付し、農工通信78号に見舞いを掲載した。

[別記2]

平成19年度決算報告 (平成19年4月1日～平成20年3月31日)

1 基本金決算

(1) 収入 (単位:円)

款 項 目	19年度予算額 (A)	19年度決算額 (B)	増減 (A) - (B)	備 考
前年度繰越金	310,090,159	310,090,159	0	
終身会費	2,200,000	1,835,000	365,000	延61名相当分
賛助会費	17,600,000	34,290,000	-16,690,000	延1,143名相当分
その他	0	0	0	
合 計	329,890,159	346,215,159	-16,325,000	

(2) 支出 (単位:円)

特別会計繰出	5,000,000	5,000,000	0	基本金より特別繰出
一般会計通常繰出	8,800,000	8,800,000	0	〃
特別繰出分	7,298,468	7,298,468	0	〃
合 計	21,098,468	21,098,468	0	

(3) 残高 (単位:円)

収入 - 支出	308,791,691	325,116,691	-16,325,000	
---------	-------------	-------------	-------------	--

2 一般会計決算

(1) 収入 (単位:円)

款 項 目	19年度予算額 (A)	19年度決算額 (B)	増減 (A) - (B)	備 考
前年度繰越金	3,441,532	3,441,532	0	
入会金	3,900,000	5,895,000	-1,995,000	1,179名
年会費	1,600,000	1,615,070	-15,070	延1,075余名相当分
10年前納会費	700,000	780,000	-80,000	52名
利 子	1,000,000	1,341,774	-341,774	
基本金より繰入	16,098,468	16,098,468	0	
その他	0	455,376	-455,376	広告料・寄附金・国債購入剩余金
合 計	26,740,000	29,627,220	-2,887,220	

(2) 支出 (単位:円)

款 項 目	19年度予算額 (A)	19年度決算額 (B)	増減 (A) - (B)	備 考	
事業費	15,720,000	14,094,538	1,625,462		
内 訳	会員名簿管理費	3,200,000	2,938,731	261,269	名簿データメンテナンス、動静はがき(人件費の抑制等)
	会報発行費	5,800,000	5,471,167	328,833	安価契約
	HP管理作成費	170,000	218,385	-48,385	HP新規掲載増加のため
	部会・支部活動費	2,900,000	2,436,370	463,630	8部会・13支部が未請求
	新入正会員歓迎費	1,000,000	747,630	252,370	卒業証書カバー・業者変更のために安価
	母校援助費	2,200,000	2,048,000	152,000	
	分取林管理費	50,000	0	50,000	
会 議 費	資料整備費	400,000	234,255	165,745	パンフレット作成等(安価契約)
	総会会議費	1,820,000	1,773,840	46,160	総会懇親会費・支部長・支部代議員旅費
	副会長懇談会	50,000	58,649	-8,649	副会長懇談会昼食代
	常務理事会議費	60,000	47,000	13,000	

事 務 費	7,690,000	7,359,124	330,876	
手 当	630,000	700,000	-70,000	夏季手当の積算が少なかった。
雑 給	3,860,000	3,594,264	265,736	人件費の抑制
備 品 費	100,000	98,437	1,563	
消 耗 品 費	900,000	846,123	53,877	
通 信 費	550,000	871,378	-321,378	賛助会費納入のための振込手数料増加のため
旅 費	970,000	732,490	237,510	支部総会派遣理事旅費等(13支部が支部総会未開催)
事務用品印刷費	250,000	175,455	74,545	封筒印刷(安価契約)
慶 弔 費	80,000	58,955	21,045	
光熱水費	100,000	96,952	3,048	
雑 費	250,000	185,070	64,930	保険料(什器備品、事務員、情報)
職員厚生積立金	100,000	100,000	0	
そ の 他	100,000	108,630	-8,630	会費重複納入分返戻金、入学辞退返戻金
予 備 費	1,200,000	50,000	1,150,000	新潟中越沖地震見舞金
支 出 合 計	26,740,000	23,591,781	3,148,219	

3 特別会計決算

(1) 収入 (単位:円)

款 項 目	会員名簿発行資金 (A)	職員厚生資金 (B)	合 計 (A) + (B)
前年度繰越金	4,718,918	602,837	5,321,755
繰 入 金	5,000,000	100,000	5,100,000
利 息	2,846	558	3,404
合 計	9,721,764	703,395	10,425,159

(2) 支出 (単位:円)

款 項 目	会員名簿発行資金 (A)	職員厚生資金 (B)	合 計 (A) + (B)
支 出 合 計	0	482,000	482,000

(3) 残高 (単位:円)

款 項 目	会員名簿発行資金 (A)	職員厚生資金 (B)	合 計 (A) + (B)
収入 - 支出	9,721,764	221,395	9,943,159

[別記3]

4. 東京農工大学同窓会会則の一部改正

改 正 前	改 正 後	改 正 理 由
第14条 本会の経費は、会費(年会費、10年前納会費、終身会費、賛助会費)、入会金、基本金利子、寄附金およびその他の収入によってまかなう。	第14条 本会の経費は、会費(終身会費、年会費、賛助会費)、入会金、基本金利子、寄附金およびその他の収入によってまかなう。	10年前納会費の削除及び終身会費の納入を建前とした。
第15条 正会員は年会費として1千500円を当該年度の始めに納めるものとする。 2 正会員は終身会費として3万円を一括して納めるか、年会費10年分として1万5千円を前納することもできる。	第15条 正会員は終身会費として3万円を納めるものとする。 2 正会員は年会費として1千500円を当該年度の始めに毎年納めることもできる。	同 上
第20条 一般会計は入会金、年会費、10年前納会費、基本金からの繰り出し金、基本金利子、その他の収入によってまかなう。 各款の金額の流用または、予備費の予算外支出は常務理事会の承認を経なければならない。	第20条 一般会計は入会金、年会費、基本金からの繰り出し金、基本金利子、その他の収入によってまかなう。 各款の金額の流用または、予備費の予算外支出は常務理事会の承認を経なければならない。	10年前納会費の削除

附則 この会則は平成20年5月24日より施行する。

4. 東京農工大学同窓会細則の一部改正

改 正 前	改 正 後	改 正 理 由
部会活動費は基本料2万円+会員数料、支部活動費は基本料1万円+会員数料を交付する。	同窓会会則第2条5に基づき、部会活動費として基本料3万円+会員数に応じた額、支部活動費として基本料2万円+会員数に応じた額を交付する。	基本料の増額及び字句の整理 会員数料を会員数に応じた額に変更
千葉共済と横浜会については、従来どおり支部扱いとする。	同窓会会則第7条に準じて、横浜会については従来どおり支部扱いとする。	千葉共済の削除及び字句の整理

附則 この会則は平成20年5月24日より施行する。

〔別記 4〕

平成20年度事業計画

1 第45回通常総会・理事会の開催

平成20年5月24日（土）、府中キャンパスにて第45回通常総会・理事会を開催する。議事内容は、1)会則・細則の改正（案）、2)平成19年度事業報告（案）、収支決算報告（案）、監査報告、3)平成20年度事業計画（案）、予算（案）、4)平成20～21年度常務理事指名（案）、5)平成20～21年度理事・代議員の選任（案）、6)平成20～21年度監事の選出（案）、7)特別会員の推薦（案）、8)同窓会創立50周年記念事業の募金活動開始、9)同窓会50年史発行、10)会員名簿発行延期、11)その他を予定する。

2 同窓会組織の強化、活性化および財務体質の健全化

部会・支部・職域組織の活動を支援するとともに、本年度から募金活動が開始されるため各組織との連携を強め、常務理事の積極的派遣を行う。生物システム応用科学府に部会を設置する。前年度に引き続き、入会金、賛助会費等の大幅な収入増をはかるための対策を推進する。また、ペイオフ対策及び更に利息による増収入をはかるため、定期預金を順次国債に切替えていく。

3 同窓会創立50周年記念事業の推進

同窓会創立50周年記念事業会を開催して、1) 小井記念ホールの設置、2) 大学50周年記念ホール（府中）の増改修、3) 同窓会50年史の刊行（同窓会予算より負担）、4) 学生援助の実施、5) 祝賀会の挙行（同窓会予算より負担）等の募金活動を開始する。同窓各位には「農工通信79号」に案内文、趣意書、要項、振込用紙を同封し、協力依頼をするとともに各部会・支部、各クラスに協力を要請する。

4 同窓会会員名簿の発行延期

個人情報保護法の施行以来、同窓各位からの苦情が頻繁にあること、動静調査による非掲載希望者が54%に達していること、部会・支部へのアンケート調査結果では78%が延期に賛成していること等を斟酌するとともに、代替サービスを従来どおり実施しつつ、名簿発行の在り方について検討するため、名簿発行を延期することを総会に上程する。

5 「農工通信79号」の発行

従来の会報を大幅に刷新した「農工通信77～78号」が、会員からの評価が大変好評であったので、「農工通信79号」も前号の編集方針を基本的に踏襲するとともに、新規に「退職のごあいさつ」のコラム欄を設置することにした。

6 同窓会PR活動の実施

同窓会紹介パンフレット及びHPの更なる充実を図り、PR活動に努める。

7 会員の動静整理の継続実施

農工通信の未着信会員について常時追跡調査を行うとともに、年度末に更に全会員に対して動静調査を行う。

8 (財)東京農工大学教育研究振興財団への協力

本財団の事務に対する実質的支援を従来どおり継続して行う。

9 母校に対する援助、新入正会員歓迎行事の継続実施

学生の勉学・学生生活に関して、学会発表、コンテスト・コンクール等発表・入賞祝い、優秀卒業論文賞等の援助、学園祭・課外活動の援助、同窓会推薦キャリア・アドバイザー支援等の予算を更に増額して行う。また、卒業・修了証書カバーの贈呈を継続して行う。

10 会員の慶弔

祝電、弔電を打電する。

〔別記 5〕

平成20年度収支予算 (平成20年4月1日～21年3月31日)

1 基本金予算

(単位:円)

款 項 目	(A) 平成20年度予算額	(B) 平成19年度予算額	(A) - (B) 増 減	備 考
前年度繰越金	325,116,691	310,090,159	15,026,532	
終身会費	1,470,000	2,200,000	-730,000	61名×0.8=49名相当分
賛助会費	27,420,000	17,600,000	9,820,000	1,143名×0.8=914名相当分
その他	0	0	0	
合 計	354,006,691	329,890,159	24,116,532	

(2) 支出

(単位:円)

特別会計繰出	5,000,000	0	0	名簿発行資金積立金
〃	7,135,000	0	7,135,000	創立50周年記念事業

一般会計通常繰出	13,710,000	8,800,000	4,910,000	賛助会費の1/2
一般会計特別繰出	1,445,561	7,298,468	-5,852,907	一般会計支出予算の不足分を繰り出す
合 計	27,290,561	21,098,468	6,192,093	

(3) 残高

(単位:円)

収入－支出	326,716,130	308,791,691	17,924,439	
-------	-------------	-------------	------------	--

2 一般会計予算

(1) 収入

(単位:円)

款 項 目	(A) 20年度予算額	(B) 19年度予算額	(A) - (B) 増 減	備 考
前年度繰越金	6,035,439	3,441,532	2,593,907	
入 会 金	4,715,000	3,900,000	815,000	1,179名×0.8=943名
年 会 費	1,290,000	1,600,000	-310,000	1,075名×0.8=860名
10年前納会費	0	700,000	-700,000	会則改正
利 子	1,540,000	1,000,000	540,000	前年度実績(1,340,000円)+ 国債の追加購入(200,000円)
基本金より繰入	15,155,561	16,098,468	-942,907	
そ の 他	364,000	0	364,000	広告収入 前年度実績額 (455,000円)×0.8
合 計	29,100,000	26,740,000	2,360,000	

(2) 支出

(単位:円)

款 項 目	(A) 平成20年度 予算額	(B) 平成19年度 予算額	(A) - (B) 増 減	備 考	
事 業 費	17,190,000	15,720,000	1,470,000		
内 訳	会員名簿管理費	3,150,000	3,200,000	-50,000	前年度実績
	会報発行費	5,950,000	5,800,000	150,000	前年度実績、50周年 案内文発送費
	HP管理作成費	270,000	170,000	100,000	前年度実績、新規掲 載分
	部会・支部活動費	3,570,000	2,900,000	670,000	前年度予算、基本料拡 充分
	新入正会員歓迎費	1,000,000	1,000,000	0	卒業証書カバーの素材をビ ニールからウールに変更予 定
	母校援助費	2,900,000	2,200,000	700,000	前年度実績+拡充分
	分収林管理費	50,000	50,000	0	
	資料整備費	300,000	400,000	-100,000	パンフレット作成 等（前年度実績）
会 議 費	1,990,000	1,930,000	60,000		
内 訳	総会会議費	1,820,000	1,820,000	0	
	副会長懇談会	60,000	50,000	10,000	前年度実績
	常務理事会議費	110,000	60,000	50,000	会議出席交通費
事 務 費	8,770,000	7,790,000	980,000		
内 訳	手 当	0	630,000	-630,000	職員退職
	雑 給	3,860,000	3,860,000	0	パート職員及びデータ 打込みアルバイト代等
	備 品 費	100,000	100,000	0	
	消 耗 品 費	900,000	900,000	0	
	通 信 費	900,000	550,000	350,000	賛助会費等の振込 手数料の増加
	旅 費	2,200,000	970,000	1,230,000	支部総会派遣理事旅費 等(50周年記念関係)
	事務用品印刷費	230,000	250,000	-20,000	前年度実績
	慶 弔 費	80,000	80,000	0	
	光 熱 水 費	100,000	100,000	0	
	雑 費	200,000	250,000	-50,000	前年度実績
そ の 他	200,000	100,000	100,000	入学辞退返戻金	
職員厚生積立金	200,000	100,000	100,000	積立金不足のため	
予 備 費	950,000	1,200,000	-250,000		
支 出 合 計	29,100,000	26,740,000	2,360,000		

3 特別会計予算

(1) 収入

(単位:円)

款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 会員名簿発行資金	(C) 職員厚生資金	(A)+(B)+(C) 合 計
前年度繰越金	9,721,764	221,395	0	9,943,159
繰 入 金	5,000,000	200,000	※17,135,000	12,335,000
利 息	3,000	400	1,000	4,400
合 計	14,724,764	421,795	7,136,000	22,282,559

(2) 支出		(単位：円)			
款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 会員名簿発行資金	(C) 職員厚生資金	(A)+(B)+(C) 合 計	
支 出 合 計	※2 500,000	100,000	2,000,000	2,600,000	

(3) 残高		(単位：円)			
款 項 目	(A) 会員名簿発行資金	(B) 会員名簿発行資金	(C) 職員厚生資金	(A)+(B)+(C) 合 計	
取 入 - 支 出	14,224,764	321,795	5,136,000	19,682,559	

※1 創立50周年記念事業積算内訳

- 1) 同窓生宛案内文印刷費175,000円, 2) 趣意書印刷費175,000円, 3) 募金及び事業概要印刷費175,000円, 4) 振込用紙印刷費245,000円, 5) 振込手数料1,260,000円 6) 事業会お弁当費70人×1,500円=105,000円, 7) 50年史発行積立金5,000,000円 8) その他雑費は前記に含む

※2

- 1) 保護者賛助会費から終身会費への切替者への名簿発送費300,000円
- 2) 名簿保管料200,000円

[別記 6]

平成20年5月24日

東京農工大学同窓各位

東京農工大学同窓会
会 長 畑中孝晴

東京農工大学創基140周年・同窓会創立50周年合同記念事業について

謹啓 同窓各位におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

本学同窓会は、農学部同窓会 駒場校友会および工学部(繊維学部)同窓会 西ヶ原同窓会を統一し、新同窓会として昭和37年(1962年)に設立されました。学科卒業生・専攻修了生を中心とした各部会の活動、都道府県単位の支部活動を通じて年々発展し、46,000名余の同窓を擁する組織となりました。平成24年(2012年)には、本会は、晴れて創立50周年を迎える運びとなりました。

そこで、これを機に、同窓会創立50周年記念事業を行うこととし、常務理事会、副会長懇談会、副会長・支部長懇談会および記念事業企画委員会で鋭意検討を続け、本年5月の総会で同窓各位に募金をお願いして同窓会創立50周年記念事業の実施を承認いただきました。大学と合同での記念事業目標額は5億円としましたが、同窓会としての記念事業は、本年総会において次の5件の事業とし、総額1億2,000万円を目途として行うこととしました。

- 1) 記念ホールの設置及び整備充実
 - ・小金井記念ホールの設置
 - ・大学50周年記念ホール(府中)の増改修
- 2) 同窓会50年史の刊行 *
- 3) 学生援助の実施
- 4) 祝賀会の挙行 *
- 5) 関係事業経費
 - * なお、2) および4) の事業は寄附金の減免税措置の対象外であるため、募金活動(寄附金)の対象とせず同窓会予算から負担することといたします。

大学は、明治7年(1874年)に内務省勸業寮内藤新宿出張所農事修学場および同出張所蚕業試験掛を創基として、平成26年(2014年)に創基140周年を迎えます。そこで、別紙にご案内のように、大学と合同で記念事業を実施することとしました。同窓各位には、本会および大学の一層の発展のために諸般厳しい時期ではありますが、格別のご支援をいただきますよう、衷心よりご協力をお願い申し上げます。

謹 白

東京農工大学創基140周年・同窓会創立50周年合同記念事業募金趣意書

東京農工大学は、明治7(1874)年、我が国最初の農学教育及び蚕業指導のために開設された、内務省勸業寮内藤新宿出張所農事修学場及び同出張所蚕業試験掛を創基とし、平成26(2014)年に創基140周年を迎えます。その後、幾多の変遷を経て、昭和24(1949)年に東京農林専門学校と東京繊維専門学校を包括した新制の東京農工大学が発足しました。

また、平成16(2004)年の国立大学法人化と同時に大学院重点化を達成し、これまで以上に研究重視型の大学として基盤整備を行いました。

発足当初、農学部と繊維学部の2学部であった教育研究組織は、年々拡充発展を遂げ、現在では、大学院の研究組織である共生科学技術研究院、大学院の教育組織である工学府、農学府、生物システム応用科学府、連合農学研究科及び技術経営研究科、農学部及び工学部の2学部のほか、大学教育センター、産官学連携・知的財産センター、国際センター、学術研究支援総合センター、科学博物館などの多数のセンター・施設を有し、学生数も大学院生約2,000人、学部学生約4,000人を数えるに至っており、新制大学以降13,000人を超える大学院修了生、36,000人を超える学部卒業生を社会に貢献する人材として送り出してきました。

東京農工大学は、現在の地球規模での課題である、環境破壊、エネルギー問題、人口急増による食糧不足問題などグローバルで深刻な問題に解決し、循環型社会を再構築するため、科学技術の発展や新たな学問分野での創造、それを担う人材育成の先頭に立つ実績と実力を持つことを自覚し、さらにその責任を果たしていくことを使命として、大学の基本理念「使命志向型教育研究－美しい地球持続のための全学的努力－」(MORE SENSE)のもと、創造性と国際性豊かな研究者・技術者を養成し、循環型社会の構築に貢献できる大学としての役割を担います。

東京農工大学同窓会は、昭和37(1962)年に同窓生及び母校の発展をはかることを目的に設立し、平成24(2012)年に創立50周年を迎えます。大学行事に対する援助、学園祭及び学生の学会発表や各種大会の出場等への援助、会員の相互情報通信及び大学の最新情報等を発信する農工通信の発行などを行っています。

このたび、今後の東京農工大学の更なる発展を期するため、「東京農工大学創基140周年・同窓会創立50周年合同記念事業」－地球をまわそう農工大記念プロジェクト－を実施することとし、以下の事業を企画しました。

事業概要

- ・産学連携活動の一層の促進のための産学交流会館建設
- ・学生の学習環境の向上を図るための東京農工大学基金の創設
- ・東京農工大学科学博物館の充実
- ・記念ホールの設置及び整備充実
- ・合同記念式典の開催
- ・同窓会50年史の刊行(別途、同窓会予算より負担)

つきましては、この記念事業を成功させるため、何卒この趣旨にご賛同いただきまして、卒業生各位はもとより、関係各位の絶大なご支援をお願い申し上げます。

平成20年5月

合同記念事業実行委員会

委員長 東京農工大学学長 小畑 秀文
副委員長 東京農工大学同窓会会長 畑中 孝晴

東京農工大学同窓会創立50周年記念事業委員会要覧

1. 委員会概要
 委員長：大塚正史 副委員長：佐藤孝典 事務局長：山本浩司

2. 委員の構成
 東京農工大学関係者
 大塚正史 山本浩司
 佐藤孝典 田中浩二
 東京農工大学関係者以外
 田中浩二 山本浩司
 佐藤孝典 田中浩二
 東京農工大学関係者以外
 田中浩二 山本浩司
 佐藤孝典 田中浩二

3. 委員会組織
 委員長：大塚正史

4. 委員の構成
 東京農工大学関係者
 大塚正史 山本浩司
 佐藤孝典 田中浩二

5. 委員会概要
 東京農工大学関係者以外
 田中浩二 山本浩司
 佐藤孝典 田中浩二

6. 委員会概要
 東京農工大学関係者以外
 田中浩二 山本浩司
 佐藤孝典 田中浩二

[別記 7]

目次

東京農工大学同窓会の歴史

1. 東京農工大学同窓会の歴史

2. 東京農工大学同窓会の歴史

3. 東京農工大学同窓会の歴史

4. 東京農工大学同窓会の歴史

5. 東京農工大学同窓会の歴史

6. 東京農工大学同窓会の歴史

7. 東京農工大学同窓会の歴史

8. 東京農工大学同窓会の歴史

9. 東京農工大学同窓会の歴史

10. 東京農工大学同窓会の歴史

目次

1. 東京農工大学同窓会の歴史

2. 東京農工大学同窓会の歴史

3. 東京農工大学同窓会の歴史

4. 東京農工大学同窓会の歴史

5. 東京農工大学同窓会の歴史

6. 東京農工大学同窓会の歴史

7. 東京農工大学同窓会の歴史

8. 東京農工大学同窓会の歴史

9. 東京農工大学同窓会の歴史

10. 東京農工大学同窓会の歴史

目次

1. 東京農工大学同窓会の歴史

2. 東京農工大学同窓会の歴史

3. 東京農工大学同窓会の歴史

4. 東京農工大学同窓会の歴史

5. 東京農工大学同窓会の歴史

6. 東京農工大学同窓会の歴史

7. 東京農工大学同窓会の歴史

8. 東京農工大学同窓会の歴史

9. 東京農工大学同窓会の歴史

10. 東京農工大学同窓会の歴史

[別記 8]

同窓会会員名簿の発行延期の件

平成17年に「個人情報保護法」が全面施行されて以来、同窓各位からの苦情が頻繁にある。また、動静調査による回答者の非掲載希望が54%にも達している。かつ、部会・支部へのアンケート調査による結果では78%が延期に賛成している。このことを踏まえて、延期することについて問題点があるか否かを多方面から検証し、次の方策を探るため、会員名簿の発行を延期させていただきます。

なお、延期の期間中は同窓各位にご迷惑がかからないよう、従来どおり部会・支部等からの依頼により、当該名簿や宛名ラベル等を代替サービスとして提供いたします。

同窓会創立50周年記念事業の 募金開始

本学同窓会は、農学部同窓会 駒場校友会および工学部(繊維学部)同窓会 西ヶ原同窓会を統一し、新同窓会として昭和37年(1962年)に設立されました。学科卒業生・専攻修了生を中心とした各部会の活動、都道府県単位の支部活動を通じて年々発展し、46,000名余の同窓を擁する組織となり、平成24年(2012年)には、晴れて創立50周年を迎える運びとなりました。

一方、東京農工大学は、明治7年(1874年)に内務省勸業寮内藤新宿出張所農事修学場および同出張所蚕業試験掛を創基として、平成26年(2014年)に創基140周年を迎えます。そこで、これを機に、同窓会創立50周年記念事業を行うこととし、同窓会では一昨年から副会長懇談会、副会長・支部長懇談会および記念事業企画委員会等で鋭意検討を続けて参りましたが、本年5月の総会において、本格実施のご承認をいただきました。

合同記念事業のうち、同窓会としては、総額1億2,000万円の募金をつのり次の5件の事業を行うことといたしました。

- 1) 記念ホールの設置及び整備充実
 - ・小金井記念ホールの設置
 - ・大学50周年記念ホール(府中)の増改修
- 2) 学生援助の実施
- 3) 同窓会50年史の刊行*
- 4) 祝賀会の挙行*
- 5) 関係事業経費

* なお、3) および4) の事業は寄附金の減免税措置の対象外であるため、募金活動(寄附金)の対象とせず同窓会予算から負担することといたします。

同窓各位には、本会および大学の一層の発展のために諸般厳しい時期ではありますが、格別のご支援をいただきますよう、衷心よりご協力をお願い申し上げます。

なお、募金に際しては、同封の関係用紙をご利用くださるよう併せてお願い申し上げます。

50th
Anniversary

叙勲者からの寄稿

神社佛閣を中心とした自然保護

山口 正信 (※専S23)

野生生物の観察や保護活動には、先ず、自分のホームグラウンドを持つことが重要である、とは山階芳麿博士からも、野鳥文化の草分け、中西悟堂先生からも教示を受けたことの一つである。

そこで、私はホームグラウンドとした地域に足繁く出向き生物相全体を把握し、そこを棲みかとする生物の分布図を作り、その場所の全体的な姿を読むことから始めようと思いついた。私の脳裏に描かれた場所、それは埼玉県新座市在の古刹、平林禅寺々域であった。

こゝには、サンコウチョウ、チゴモズ、アカモズ、オオルリ、キビタキ、ヤマシギ、アオバト、ミヤマホオジロ、イスカ等、首都圏では珍しい多様で貴重な野鳥が観察出来た。

ある日、日本学術会議の呼びかけで「日本の自然保護を考える」と言うシンポジウムが持たれ私も参加した。

その時、Drシュアーベトと言うドイツ人で東洋哲学の研究者が、日本の自然保護は神社、仏閣を中心に取り組むべきではないかと言う考えを述べておられることを知った。

私の平林寺への取り組みは間違っていないと確信した。

片道2時間余をかけて私は平林寺へ通い続け、この寺の自然環境を何とかありのまま、後世に残さなくてはいけない、と決意したのは間もなくのことであった。日本の自然保護はまだ黎明期の頃である。

私は平林寺のトップである白水敬山老師にあてて、自分の寺域の自然保護に対する考えを書面にして郵送した。

老師から早速、書院に訪ねて来て欲しい、お目にかかっていろいろお話ししたい旨の返事を戴いた。

当時の世相は、所得倍増計画と称する金儲けの為には手段を選ばないと言った風潮がはびこっていた。従って寺域を狙った開発業者など、町や県を巻き込んだの開発計画に寺はほとんど困りぬいていた。

平林禅寺は臨済禅のメッカであり、その修行は広大な森の中でこそ成就されると言う崇高な自然観と宗教観を持つ22代住職、敬山老師は正に気骨の人。戦時中、

「寺域の杉、檜を軍に供出されたし」と陸軍から申し入れがあった時「禅の修行に森は欠かせない、お断りします」ときっぱり拒否した逸話が残っている。

私の提言に敬山老師は「寺域の自然をこのまゝ、後世に伝えるが如き話を持って来られたのは貴殿唯お一人です。

ありがたい極みです。外護の菩薩とは貴殿のようなお方、暗闇に燈明を戴いた如くです」と合掌された。

私は喜びと同時に責任の重さに思わず身ぶるいした。この森をあらゆる開発の手から守る、それには行政の法の力を借りるより無いと考え、この時から、市、県、国への働きかけに奔走する日々が続いた。一方、寺の近隣の無理解とも戦いながら遂に昭和43年、寺域約55haが文化庁の審議委員会の賛意を得て国の天然記念物に指定された。

この間、私の保護運動に賛同された多くの文化人、学識経験者、平林寺にゆかりの深い方々をもって、「平林禅寺の自然と文化を守る会」が設立され、重要な古い歴史に包まれた書院で文化の薫り高い会合が度々持たれた。

又、寺の供養水である野火止用水が汚濁がひどく寺域内の流れを止めてあったが、多摩川、小平口より、ほとんど無勾配の凡そ20kmを、東京都、埼玉県関係五市の協力下共同プロジェクトが立ち上げられ、その結果、水生生物が棲める清流へと回復、寺域への流れも始まる平成20年3月には近隣にもたらず波及効果も大きく広がるであろう。

寺域には、植物、昆虫、鳥類に於て絶滅危惧種が多く存在し、その環境の豊かさが証明出来る。

現在、この森を保護、保存する為に、「平林禅寺の自然と文化を守る会」の会員による里山プロジェクトが生まれ、雑木林本来の役割を活かさんと、酷暑の折も、厳寒の中でも有志に依る作業が続けられている。

この平林寺域を中心とした長年の自然保護活動に対し、この度、思いがけなくも平成19年秋の叙勲に際して、旭日



単光章を戴くと言う栄誉に浴した。これは私にとって無限の喜び、名誉であると同時に、多くの支援者の草の根運動に与えられた具体的なお褒美であることに大きな意義を感じている。

ますます混迷する世相の中で、若い世代の人々がふと立ち止まって、生活の身近にある小さな自然に知らず知らず癒されている意味を考えて頂けることを期待している。

来し方を顧みて

水口 衛 (獣医S29)

昭和29年、食糧難など貧しい経済環境の中で、僅かな仕送りと東京競馬場でのアルバイトに奨学金で過ごした4年間の学生生活も終りに近づき、ふるさと静岡県の採用試験を受けることにした。

幸い、人事委員会の6級職(上級)試験に合格し採用候補者名簿に登録されたが、獣医職の場合には国家試験に合格しなければ失格となるため、4月末に獣医師免許証が農林大臣から交付された後、知事部局が実施した任用試験を経て、静岡県職員として採用された。

県での獣医師の職場は、畜産と食品・公衆衛生の2分野があるが、私は畜産志望の念願が叶って種畜場に配属された。

当時の静岡県種畜場は、御殿場市にあり、旧農林省静岡種畜牧場が、昭和25年に県に移管された施設で、耕地・放牧地など用地面積297ヘクタールに、乳用牛・豚・緬羊・山羊・採卵鶏の優良種畜、種鶏が飼育され、生産した種畜、種鶏を、市町村や農協を通じて畜産農家に払下げていて、場員47名を擁する全国有数の総合種畜場であった。

新米技術者の私には、先輩方のご好意で、各畜種の最も重要な作業を、飼料作物を含め季節性のある仕事とない仕事を組み合わせ、1年余の間に、全ての実習ができる様なカリキュラムが生まれ、それを順次実行した。

慣れない作業や重労働、加えて分娩介助や孵卵器管理など、深夜に及ぶ仕事もあったが、こうした現場での体験が、畜産農家の仕事について、熟練を要する作業、危険を伴う作業など、労働の質と量を知るうえで貴重な経験になった。

こうして1年余が過ぎた昭和30年の暮に、私は突然、本庁畜産課家畜衛生係に転勤を命ぜられた。

富士集約酪農地域に、ニュージーランド・オーストラリアから560頭のジャージー牛が国有貸付牛として導入されることになり、その購買立会いと船による輸送のために、技術職員が長期海外出張することに伴う補充であった。

家畜衛生係は、家畜伝染病予防法や薬事法に基づく動物医薬品取締規則などを所掌し、5名の獣医師が各家畜保健衛生所の獣医師35名と共に、家畜伝染病の発生予防・蔓延

防止等に当たっていたが、牛の結核病検査については、本庁直轄で実施していたため、私も県内限なく出張することになり、集落名や地勢、産物など普く知ることができ、その後25年に及んだ本庁畜産課での業務に大いに役立った。

畜産技術行政は、県政全般の中では、特殊な分野であるが、一般行政職では、大学卒に限らず高校卒でも努力して立派に業務を遂行し、責任ある地位に就く人がいる。

私は、高校卒のベースの上に獣医師と言う特別な技能を持っている職員であると考えて、処務規程、財務規則などに基づく事務についても、事務吏員なみに処理できる様に努め、条例・規則の立案や予算決算等にも積極的に取り組んだ。

昭和54年、静岡県は、東海地震対策の推進と併せて出先機関の縦割り行政を総合的に調整することを目的に、県下9か所に振興センターを新設した。

その要員が本庁各部局から集められた中に私も加わることになり、いずれも国際観光温泉文化都市である熱海市と伊東市を管轄する、熱海振興センター所長(兼)熱海財務事務所所長を命ぜられた。

振興センターでは、第2次ベビーブームに由来する高校生急増対策としての新設高校の立地調整、土木事務所・保健所など県の事務所を一か所に集める熱海合同庁舎の建設、発生した伊豆半島東方沖地震への対応など、県税を含め幅広い業務を推進した。

昭和57年には本庁に戻り、都道府県に唯一つの地震対策課の課長として、東海地震対策を担当したが、地震対策は社会全般に係わる命題で、市町村・警察・自衛隊・電気・ガス・水道・鉄道・道路・港湾・病院・企業・家庭などと協調して推進する総行政そのものであり、失敗の許されない文字通りの激務であった。

そして、昭和59年からは古巣の農業水産部長として、茶・みかん・温室メロン・いちご・花卉・養鶏・養豚・酪農・鱈・鮪・養鰻など、特色ある静岡県農業、水産業の振興に努め、35年間の県職員としての仕事に終止符を打った。

その後は、いくつかの団体や企業の代表理事、代表取締役を勤め、現在は、(協)沼津水産開発センターの理事長として、魚粉・魚油等を製造する施設の経営に当たっているが、22才から76才の今日に至るまで、休むことなく働き続けることができている健康に感謝しているところである。

(静岡県支部長、平成19年秋の叙勲で瑞宝小綬章を受章)

叙勲受章の栄に浴して

関口 政雄 (養蚕S30)

昨年秋の叙勲で、思いもよらない瑞宝双光章受章の栄に浴しました。この上ない光栄なことであります。11月6日、群馬県庁昭和庁舎正庁の間で、勲章と、勲記の伝達式典が

あり知事から伝達されました。11月9日には、皇居春秋の間において、天皇陛下の拝謁が行なわれ、すぐお近くで陛下からお言葉をいただき、全く感激の一言でありました。陛下からは、更に、精進を重ね、世のために、人のために一層努力して下さいとお言葉もありました。私は、かねてから年をとったら勝手に、気候きこうに、自分流に生きていこうと秘かに考えておりました。ところがこういうことになって、さて、どうしたものかと思案しているところであります。

もとよりこの勲章は、私だけがいただいたものではありませんで、先輩を始め同僚と一緒に努力と苦労を共に重ね合って来たことによるものであると思っております。

この受章理由は、地方自治功労によるものであります。私は、群馬の蚕種の村島村で生れ、カイコの中で育ち、中学、高校、大学そして勤めの大部分がカイコの中での生活でありました。現在の蚕糸業は、昔の面影は見当りませんが、この受章理由の一つが蚕糸振興によるものであるとすれば一寸はずかしい気もいたします。喜びと、戸惑いが交叉しています。少なくとも現在にあって、蚕糸業が産業として成り立っていなければならないものであろうと思えます。しかし、今そんなことを言ってもどうなるものでもなく、そのなかから救いになると思われるものを拾ってみると、昭和30年代の年間条桑育や稚蚕共同飼育の普及、昭和40年代の除草剤や耕耘機による桑園管理の省力化、昭和50年代前半の稚蚕人工飼料育の普及等々、農村現場の技術として普及につとめることが出来、群馬県農地の1/3に当る3万ヘクタールの桑園をバックに昭和43年には、戦後最高の生産量、27,440トンの繭がとれたことであります。「量は力」というかけ声のもと、がむしゃらに繭の増産を叫んだことが思い出されます。

その時、県の蚕糸課の一員として最前線で頑張ることができ思い出深い一時でありました。

又、その後、蚕業改良普及事業の維持・存続のため、全国組織であります全国蚕業技術指導所職員協議会（全指協）の代表として、同僚と一緒に大蔵省や、衆参議員会館をかけまわったことが鮮明に思い出されます。

今は亡き、富士野力先輩が先頭に立って頑張っておりました。

いま、群馬県では、8市町村10ヶ所で構成する絹産業遺産群が世界遺産を目指して活発に活動を展開しております。幸いにも群馬県には、養蚕、製糸、織物と川上から川下までの遺産が残っております。三者がほぼ完全な型で残っていることは珍しく、たゞ現役生産施設でないことが残念であります。しかし、200年前から連綿と続いている蚕糸業の資産が今に残っていて、これが世界遺産の仲間入りができるのであれば本当に素晴らしいことであります。この群馬の遺産群は、昨年1月富士山と一緒に世界遺産の暫定リストに登載されました。実は、私の村島村は、都合もあって、このリストには載っておりませんが、近くこの仲間入りを果たしたいと願っ

ております。

このため、昔カイコで栄えたこの小さな村が、このまゝ寒村として終わってしまうのはなんとしても避けなければという一念で、当時の蚕種業者の子弟が中心となって、2年半前に「ぐんま島村蚕種の会」を立ち上げました。会員は65名であります。先ず手がけたことは、村の人達に村の歴史を知ってもらうことから始め10数回にわたり学習会を開き熱心に学習することができました。講師は、全部会員がつとめました。次に、やぐらが残る養蚕家屋の調査や、見学者のガイド等々徐々に軌道に乗って来ました。来春には、少面積ながら桑を植え見学者にカイコを見てもらうことも計画しております。私は島小の3年生と一緒にカイコを飼って8年になります。糸を取り、繭人形づくりまでやっています。カイコの村で育った少年達が、カイコを知らずして、村から巣立っていくことは可愛そうだということから始めたことであります。カイコを見て、触って目を輝かせる子供達を見ていると、熱くなるのを感じます。

カイコが遺産であったり、懐かしむものとなってしまった今を思うと残念でなりません。島村は、頑張っていると思っております。「歴史遺産が地域を救う」と言います。私もこの受章の重みをかみしめながら、これから村づくりまちづくりに役立っていると思っております。

叙勲報告

阪田 剛一（農工S33）

昨春、因らずも瑞宝小綬章を拝授いたしました。

今回、本誌に叙勲報告を寄稿するよう依頼があったのですが、叙勲の対象は農林水産行政ということだけで具体的なことは分かりません。そのため、今日までの思い出と感じてきたことなどを書かせて頂きます。

私どもは農学科農業工学専攻で学び、同級生は9人で、これに対し先生は6人おられ、ある意味では大変恵まれた環境でした。卒業後も、同級生はもちろん先生、先輩、後輩に密度の濃いご交誼、ご鞭撻を頂いてきております。

卒業と同時に農林水産省に入り、退官後は富士通（株）や（社）農業土木学会などに勤めましたが、終始、農業農村整備事業に関わってきました。

この事業は農業および農村地域に関するもので、範囲は広く、関連分野も多岐に亘っており、例えば戦後の食糧難や高度成長期の他産業との格差の解消などに貢献してきましたが、その後、オイルショック、バブルや農産物の価格低迷などで、さまざまな問題が生じました。私が関係した事業の中にも大変難しいものがありましたが、幸い農家や関係者の理解を得て事業を円滑に推進することができました。問題解決に当たっては、権威主義とは程遠い母校の仲

びやかな雰囲気や、卒論で在籍した高木研究室の大胆にして緻密で独創的な研究手法などが役に立ったと思っています。

農業農村整備事業に携わって、多くの人々と出会い、農業と農村地域の振興に生き甲斐を感じてきました。

叙勲は偏に良い職場に恵まれ、良い方々でご交誼、ご薫陶を頂いたお蔭であると深く感謝しております。

また、「農は国の本なり」という思いを強く持つようになりましたが、残念なのは相対的に低下した農の地位が容易に復活しないことです。最大の理由は農産物の国内価格が輸入価格より高いということですが、これを解消し農を復活するための一つの考えを述べてみたいと思います。

輸入食料の多くは農薬や化学肥料に依存したいわゆる近代農法によるものです。農薬などが健康に悪影響を与えているのは社会通念となっており、これに食品添加物なども加わって人間の心身の健康を悪化させ、徐々にエスカレートしている感があります。例えば、イライラの状態から、キレル、人を殺傷するというように…。

これに対し医は、病人がどんどん増えていることから分かるように無力で、「医学が進歩したのはまやかしに過ぎない」「医学が病人をつくる」「結核などは減ったがガンなどが増えており病気は単に形を変えたにすぎない」など、ノーベル賞受賞者を始め、多くの著名な医師などによって医の問題が指摘されています。

わが農の方はといえば、有機農法（動物性堆肥には問題もあるようですが）や自然農法（これらを以下「農」と表します）の作物をみれば、一般に食味も良いが、何よりも人間の健康改善への寄与が大きく、健康改善の事例は『ハウードの有機農法』（農文協刊）などに数多く挙げられています。

このように医より「農」のほうが人間にとってもっとも大切な生存と健康に寄与していると考えられます。なお、健康改善により、労働や学業の意欲向上やトラブルの減少などの効果もあるということで、人類福利の向上にもなります。まさに、「農は国の本なり」です。

「農」が健康に大きく寄与していることが明示されれば、「農」の重要性が強く認識されることとなり、「農」の復活のために様々な方策が行われましょう。例えば、「農」によって軽減される医療費相当額を価格差解消に振り向けることも可能となるのではないのでしょうか（ちなみに農業生産額8兆円弱、医療費34兆円超でその差はますます拡大しつつありますが、「農」と医のそれぞれの生存や健康への貢献度を考えれば非条理に思えてなりません）。このほか、価格差を減らすためには、農地の基盤整備や営農面からの改善努力なども当然必要でしょう。

なお、「農」は、残留農薬や身土不二の観点などから国際競争力は格段に強まることになります。

「農」の復活のため、人類福利のために、説得力ある機関（できれば母校が中心になった）で、「農」が健康に大きく貢献していることが明らかにされることを願っています。

創造する力

衣山 陽三（農化S36）

クラシックといわれる西洋音楽の分野で、わが国から、世界的に高い評価を得た演奏家や指揮者が出ている。まことに素晴らしいことで、テレビなどでそのような音楽家のすばらしい演奏を聞くと、わが民族の誇りのようなものを感じて、ジンと来ることがある。

子供の頃、音楽の時間にモーツァルトやベートーベンといった偉大な作曲家の名前を知り、その後数多くの素晴らしい演奏を聞いてきた。いずれその内、優秀なわが民族からもそのような世界的な作曲家も現われるだろうと想っていたが、そのような話が中々聴こえてこない。そこでそのことを、身近なクラシック音楽の関係者に確かめたら大層立腹された。多分わが音楽界を侮辱されたと思われたのだろうが、そんな積りはない。日本人と同様に器用にクラシック音楽を演奏し、地球上で圧倒的な数を誇っている、中国をはじめとするアジアの諸民族の中からもやはり著名な作曲家は出ていないのである。

若い頃に、優れた文化に接し、学習し、努力することによって必ず花が開くものと教えられてきたが、実際のところ創造的な文化によっては、どうしても超えられない高いハードルがあるということを知らされたことになる。天性が足りないのか、努力不足か、出来ないものは出来ないのである。

私共が卒業の時期を迎えた昭和35年頃は、戦後の占領政策からようやく脱却し、経済全般に何となく明るい見透視のようなものが感じられていた。その点では運がよかったといえる。おまけに、その後の国民の地道な努力と幸運によって、全くの焼け野原から目覚ましい経済発展を遂げ、気が付いたら世界の経済大国の一つといわれるまでになっていた。

戦後我々の親達は、お腹をすかしながらも実によく働いていた。いろいろと問題もあったが、比較的寛容なアメリカの傘の下、先ず軽工業で足元を固め、その後積極的に平和産業としての工業化の道を目指した。同じく、荒廃した国土からの西ドイツの発展も世界の注目を浴びたが、わが国と共通して考えられることは戦前の軍需産業である。

あの頃は、一部の戦勝国や資源の豊富な国を除いてどこも貧しく、どこも真剣に働いていたはずであるが、そういう幸運には恵まれていない。

しかしながら、わが民族は創意工夫を凝らしてこつこつと物を作ることは得意であるが、経済とか経営とか、そういう分野のことはどうも苦手のように思えてならない。

そのことは、冒頭に申し上げたクラシック音楽の作曲を試みようとして努力をしているが、中々上手くいかないのと似ている。そのせいでわが国の政府は、国家予算の10倍を超える借金があり、今や日銀の総裁が誰になろうと、経済の舵取りなどをできるような状況ではない。

中国の事情も同様でないかと思われる。しかしながら、最近

起こった冷凍餃子の農薬混入問題では、日本と中国の対応の違いが浮き彫りになっている。顔やかたちがよく似ているし、資質も高い民族だと思われるが、微妙な国民性の違いが感じられる。

さらに今、各地で貧富の格差という重大な社会問題を抱え、力で押さえつけようとしているが、社会主義を標榜する国家として、苦手ということでは済まされないような事態である。

話は替わるが、大学を卒業後早々と化粧品会社を辞めて、スペインのアウトサイドアートで活躍している同級生や、遅れ馳せながらもビール会社を退職後、陶芸作家として活躍している後輩を知っているが、わが大学の学問とはおよそかけ離れた分野ではあるが、たぐい稀なる人材が身近にいたことになる。人間の能力には、記憶力、理解力、発表力及び創造力等があり、またどの能力も重要で甲乙つけ難いものであるが、学問の分野を問わず創造する力を大事にする大学であって欲しい。

東京農工大学の学生は、どちらかという受験が苦手である。私もざっくばらんに申して、とりわけ受験での得点率の高い語学が苦手であった。入学後3年が経ち、卒業する前に国家公務員の試験を受けることになった。その頃、国家公務員には外語学が要らないと思われていたのか、語学の試験がなかったため、はなはだ都合がよかった。

黄綬褒章を受章して

横山 隆一（獣医S46）

1994年に〔社〕兵庫県獣医師会の理事になり、1997年から去年まで県獣の副会長・開業部会の会長として自分の病院の診療をしながらしてきた事といえば、「マイクロチップの普及」「県獣医師会運営の夜間病院の立ち上げ」「獣医師会運営費の狂犬病予防注射からの脱却」「狂犬病予防注射で発生した注射事故の保障制度の制定」「一般診療で発生した医療事故の相互扶助制度の制定」「盲導犬などの人間の役に立つ動物に対する診療費助成券発行制度の制定」「行政が収容した動物の新しい飼主に対しての不妊手術費の助成制度の制定」などです。

「マイクロチップ」は、個体識別を目的としたものですが、阪神淡路大震災を経験し、一時的な預かりの動物や、飼主からはぐれてしまった動物などを収容して、飼えなくなったりした動物を新たに飼ってもらおう人を探したときの苦労を、今後しないためにも全国に先駆けて普及させなくてはと思い、実施しました。2006年末で1万頭を超えて、その時点では兵庫県が実施頭数、日本でトップでした。

「夜間救急病院」は、公益法人の運営としては日本で初めてのもので、人と動物の距離が近くなっている昨今、飼主と開業獣医師双方から必要とされ、現在順調に運営できています。

法律で義務つけられた狂犬病予防注射を、法律を守ろうとした飼主・予備問診をして、法律に基づいて狂犬病予防注射

を実施した獣医師。どちらも悪くないのに起こってしまった狂犬病予防注射事故や飼い主が狂犬病予防注射のせいで弱ったと信じている事例に対して、法律を作った国も実施を奨励している行政も、注射液を作っている薬品会社も責任を取らない現状で、1頭に対して5円を集めてプールし、注射を実施した獣医師と飼主に対して治療費などを補償するようにしています。

「獣医療事故の補償制度」は、今までの日獣の勧めていた補償が、獣医師がミスった・失敗した事例にのみ補償をして、獣医師がミスってないがトラぶってしまった事例に何の力も發揮しないものだったので、今まで支払っていた金額を集めてプールして、独自で保障していく制度です。これにより獣医師会に入っているメリットにしようと思って作りました。

私が兵庫県獣医師会でやってきたことはこういった事柄でしたが、あまりにも長期間の副会長・開業部会長を勤めたため、そろそろ引退されてはという含みもあったのでしょうか、2006年に兵庫県から「県功労者賞」を頂きました。その後2007年2月の終わりごろ、往診中に携帯電話が鳴り、県の秘書課から「黄綬褒章が決まったから、必要な書類を送ります。井戸県知事から早く知らせるようにといわれて携帯に電話した。」とのことで、びっくりしたしだいです。

4月にはいと、沢山の褒章・叙勲の記念品を扱っている会社から分厚いカタログが送られてきて、「これは以外に大変かな。」と思いましたが、当たりでした。静かに夫婦で上京し、叙勲のお祝いは家族で祝おうと思っていましたが、周りの方々から「受章記念パーティーを開きましょう」ということになり、結局獣医師会中心の祝賀会が開かれました。

毎年春と秋に褒章や叙勲の受章がありますが、ほとんどが決まった職種の人が受けています。小動物開業で受章するのは、兵庫県では私が初めてということでしたので、「農水省に小動物の係りが出来たからかな。これで後輩に道が出来たのでは・・・。」と思って喜んでいます。





「ひつじと少年」 63.0×39.6cm 木版画 恩田 秋夫

恩田 秋夫

1924-2001

恩田 秋夫 (防織 S22卒)
(1924-2001)

略歴 (おんだ あきお)

東京農工大学工学部紡織学科を卒業。

武蔵野美術大学本科西洋画科を修了後、油絵・木版画の制作に専念し、個展により作品を発表、また棟方志功の助手も務める。平成19年5月19日他界。

今回奥様のご好意により作品を掲載させて頂きました。

同窓生からの寄稿

サイボク笹崎会長渋沢栄一賞受賞の栄に輝く

比留間 康 (獣医S28)

2007年2月5日、吾が東京農工大学の先輩で現(株)サイボクハム笹崎龍雄会長は、さいたま市の埼玉会館において上田県知事から「第5回渋沢栄一賞」を受賞した。

渋沢栄一賞は「日本経済社会の礎を築いた埼玉県深谷市出身の渋沢栄一(1840~1931)を顕彰するために設けられた賞で、渋沢栄一の精神を今に受け継ぐ全国の企業経営者に贈られる名誉ある賞である。

5年前から埼玉県庁、深谷市役所、(財)渋沢栄一記念財団等が受賞候補を全国的に呼びかけて行っている。

笹崎会長は大正5年、長野県佐久郡畑入村(現、佐久市)で養蚕を中心とする水田、畑、山林、家畜飼養の農家に生まれた。

大正の末期から昭和の初めにかけては農村経済のパニックのどん底で農家は苦境にあえぎ、小学校卒業と同時に働きに出され、日常の食生活も麦飯は良い方で粟飯、芋飯、大根飯が多く、弁当には梅干一個をもって行く時代であった。兄弟は男4人、女4人の8人で彼は2男であったが幼少の頃から

豚に対する特別の想いがあった様である。

家庭では小学校3年生から2頭の豚の餌管理が任され、兄は馬、妹は鶏と云った具合にその当時から責任分担が決められていた様だ。起床と同時に豚の給餌、掃除、手入れが日課で日曜日毎に踏肥場に集積し、新しい稲わらを切って投入することが任務であった。

生後2ヶ月の愛らしい子豚は飼い主を主人と信頼し、小さな尾を振りながら寄り添って来る生命の鼓動に彼は心から愛着を感じていた。ある日登校する彼の後から2頭の子豚がチョコチョコとついて来て追っても離れず、とうとう学校の教室にまで入って来たと言うエピソードもあったようだ。

当時、家が苦境のどん底にあったと言う事で普通中学へは進めず県立南佐久農蚕学校(現、臼田高校)に入学し、卒業後は上田蚕糸専門学校又は松本高校へと心を決めていたがそれも成らず、県立養蚕試験場の講習生となり、後に助手として奉職した。当時養蚕業は日本の花形産業として脚光を浴び、とくに長野県は蚕業王国として有名であった。

当時における日本養豚界の偉大なる先達者で尊敬する立川養豚場長成松先生が教鞭をとっていた駒場の獣医学科を目標に受験勉強に傾注した。

半年後の昭和12年3月、東京高等農林学校獣医学科に合格したが、戦争中のこととて馬の需要は高く当時、獣医科の競争率は36倍と非常に厳しかったようである。

現農工大は、明治の年、駒場農学校として発足：明治の中頃から東京帝国大学農学部実科に継承され、昭和10年、東京高等農林学校と改称、独立、駒場から都下府中に移転したが伝統ある農業名門校であった様だ。

創立以来、農・林・獣医科の3科であったが戦後、東京農工大学となり9科に分れた。

「ミートピア実現の旗手として」…ミートピアとは会長の造語で、食肉の理想郷という意味である。つまりハイテクによって美味しい豚肉を生産する遺伝子の組合せを行い、作出した種豚から、経済的に、また食肉として期待できる肉豚を生産育成肥育し、消費者ニーズに応える食肉とハム・ソーセージに加工し、家庭の台所まで届ける直流パイプを創る産業がミートピア事業である。

要約すれば「緑の牧場から食卓へ」の完全一貫経営で他に比類のない異質な事業といえよう。

昭和25年、現在地の埼玉県日高市に株式会社「埼玉種畜牧場」、さらに昭和45年「サイボクハム」として新たにスタートを切った。

当時、日本の豚の種類の主流は、イギリス産のヨークシャー種（白色）とパークシャー種（黒色）であったが、1961年日本で初めて大型のランドレース種を導入、注目され美味しい豚肉の改良に着手した。その後もいい豚を求めて、イギリス、スウェーデン、デンマーク、西独へ一人で行き、手ぶり足ぶりで飛び回った様である。

美味しい豚肉は、DNA（遺伝子）が60%、飼料が30%、飼養環境が10%……と会長は長年の記録と経験上、確信している。

その結晶作が「サイボクゴールデンポーク」、「スーパーゴールデンポーク」である。

当時賞味したお客さんの声に「こんなに美味しいお肉は初めて」……と、お客の口から口へ、豚肉究極の美味しさは急激に広まり、サイボクへの来場者は急増して行った。

そして今日、農民に流通、製品の価格決定に関わることが出来ない仕組みについて疑問を抱き、生産者として初めて6坪の直売所を開設し、自ら価格決定を行った。

宣伝もなしにお客の口こみで年毎に来客は増え続け、宣伝費が計上されていない事には筆者も首をかしげていた。

この間も「サイボクハム」は美味で安全な食肉を追求して試行錯誤を続けた。

さらに、自身の製品を国内だけでなく世界でも評価してもらおうと、国際調理食品協議会への出品を決断した結果は、何と大量のメダルを獲得し、国内業界からは勿論のこと、ヨーロッパ他先進各国からも注目の的となった。

お客の声に耳を傾けるという方針は、品質が安全・安心な野菜・果物・米などさまざまな食品が店頭に並ぶようになった。これらは豚の自然醗酵堆肥を使用しているのも、何と言っても味と品質の持続が卓越している。

近隣の野菜出荷農家はその日の出荷数に限界があるので「あれ？ ○○さんの大根もうないの？」と言う様なお客さんの声に応え得る様、今日も生産者は汗を流している。

環境改善のため、豚舎の一角を移転した跡地に、45℃のアルカリ性単純温泉が湧出した。「皮膚がすべすべする」…と人気があり、東武東上線鶴ヶ島駅から定期バスが運行され連日賑わっている。

豚の恩がえし「まきばの湯」である。

「エイジレス・ライフ」を送ることが重要となってきました。そうした状況下内閣府として高齢者が地域社会への参加活動を積極的に行っている事例を広く紹介し、既に高齢期にあり又はこれから高齢期を迎えようとする世代の人々の生活の参考に供するため、活動事例紹介の募集がありました。全国からの応募の中から選出された75（うち東京都からは2）の事例の1つとして受賞したものです。

78才を迎えた現在、私の社会活動分野は大きく分けて以下の三つに大別されます。

①武蔵野市の緑化活動へのお手伝い

農工大学卒業後、35年間の税関勤務を終えてからの民間勤務12年間は多少時間的にも余裕ができたので、その間武蔵野市内の大木調査を行うため市から募集のあった「緑のまちづくりレポーター」に応募し、大木調査と併せて市内の花壇の設計、手入れ等々14年間、市の緑化活動に携わりました。

それがきっかけとなり、NPO法人武蔵野自然塾の設立に参画し、現在は副理事長として活動しています。その間にグリーンアドバイザー、グリーンセイバーの資格も取得し活動に生かしています。武蔵野自然塾の活動分野は市としては仲々手の出しにくい緑化事業例えば自然観察会の開催、地元小学校の出前授業への出張、学校ビオトープのメンテナンス等々広範囲に亘っています。私は奥多摩の二俣尾にある自然体験館という所で約500坪の島の管理を任せられ、無農薬農業の責任者として汗を流しています。

②地元の市立井之頭小学校とのかかわり

「開かれた学校づくり協議会」の委員の委嘱を受け校長との意見交換を行なっています。また、毎年3年生に授業の一環として今の子供達の知らない「昔の暮らし」というテーマで実体験を基に自作した紙芝居を使って話を聞かせたり、地元の高齢者の方達と、ペーゴマ、けん玉、羽根つき、綾とり、お手玉などを教えたりもしています。秋には市内の3ヶ所の小学校で落葉を集めて、各校の上級生に堆肥作りを通じて自然の循環について易しく教えています。

③市内の本町コミュニティセンターとのかかわり

副委員長として住民とのコミュニケーションに努めています。ここでは主に近隣住民を対象にした防災訓練、健康講座のウォーキング、高齢者を対象にした雛祭り、年末のクリスマス・チャリティ・ダンスパーティ、それに当センターの一大イベントであるセンター祭などを次々とこなしています。

なお、コミュニティセンターでの長年に亘る活動が認め

エイジレス・ライフ賞の受賞によせて

中津 純（農化S28）

私は昨年9月15日、内閣府岸田文雄特命担当大臣から、エイジレス・ライフ賞として記念の楯と賞状を頂きました。

我が国は今や世界で最も長寿の国となり、高齢者が年齢にとらわれず自らの責任と能力において社会とのかかわりを持ち続けながら自由に生き生きとした生活、即ち「エイ



られ、昨年11月3日市制施行60周年記念行事の中で、市長から市政功労賞も頂きました。

以上、受賞の対象となった社会活動のあらましについて述べましたが、その他に個人的な趣味活動として書道、社交ダンス、ストレッチ体操、俳句、尺八などにも手を広げており多忙な日々を送っています。

これからも実年齢にとらわれず気力、体力の続く限り、幅広い社会活動を続けていきたいと思っています。

受賞の報告と近況

宮崎 良文 (環保院S54)

思いがけず同窓会事務局から「受賞報告」に関する寄稿依頼を頂き驚きました。平成12年に受賞した農林水産大臣賞(「木材と森林浴の快適性増進効果の解明」と平成19年に頂いた日本生理人類学会賞に対して寄稿して欲しいとのことでした。どう書いて良いのか分かりませんが、これまでの道のりや近況を記させていただきます。

私は、昭和52年に植物防疫学科を卒業し、54年に環境保護学修士課程を修了しました。その後、東京医科歯科大学医学部衛生学研究室の助手に採用され、9年間、研究させて頂きました。ご存知のように医学部の助手は、研究室のよろず下請け処理係ですが、研究の進め方や論文の書き方等について



も多くの勉強をさせて頂きました。昭和63年には筑波にある国研・森林総合研究所(現・(独)森林総合研究所)に移り、19年間、お世話になりました。自然由来の刺激がもたらす生理的リラクセス効果に関する研究を好きにさせて頂き、この業績に対して大臣賞を授与されました。森林総研には心から感謝しております。昨年4月には、つくばエクスプレス「柏の葉キャンパス駅」にある千葉大学環境健康フィールドセンターに移りました。

学会は、日本生理人類学会を中心に活動しています。1000名程度の会員で構成されており、人と環境間の相互作用を脳機能や自律神経機能等の生理的視点ならびに人類学的視点から明らかにしようとする学問です。日本生理人類学会賞は、年次大会の開催、企画担当理事、国際大会実行委員長、副会長職ならびに学問の進展へのわずかながらの貢献等に対して授与されたものです。

本賞も大臣賞も多くの研究スタッフや仲間、上司、組織に支えられて受賞することが出来たわけで、ここに感謝の意を記したいと思います。

学生時代は、全くの劣等生で、修士課程の入学試験も10名が合格したのですが、私は10番目だったと指導教官から聞かされました。綱渡りの人生です。「卒業見込み証明書」なるものが出なかったことを覚えています。最終的には、84単位必要なところを85単位で卒業しました。今、丁度、長男が就職活動をしています。時代が変わったものだと実感するこの頃です。

東京農工大学は私にとって、「ふるさと」のようなものです。ありがたいことに非常勤講師をさせて頂いている関係で、ときどき大学を訪れますが、安らぎを覚えます。若いときに、自由に遊ばせてもらった場所であり、自由な雰囲気を感じさせてもらった場所です。農工大の6年間は私の人生にとっても大きな比重を占めています。とてもありがたいことです。たまたま、私の生涯の伴侶である妻も農工大の職員だったのですが、この間、銀婚式を迎えました。

最近、植物防疫学科のクラス会を2回行いました。今秋か来春には3回目を開催したいと思っています。30年ぶりに会っても、時間がスリップしたように学生時代に戻る感覚はとても新鮮です。平成19年に開かれたクラス会の写真を示します。

流れの赴くままに、学生時代にはとても難しいであろうと考えていた「研究」という職に就くことができ、50も半ばとなって、このような「寄稿」をさせて頂けることを幸せに感じております。これも東京農工大学の自由な校風が私を育てて下さった御蔭と心から感謝しております。

平成19年度日本獣医学会賞受賞によせて

真瀬 昌司 (獣医H2)

筆者は、「鳥インフルエンザウイルスの分子疫学および病原学的研究」の研究課題名で、平成19年度日本獣医学会賞を受賞しました(第102号、<http://www.soc.nii.ac.jp/jsvs/prize.html>参照)

この鳥インフルエンザがわが国で一般的に知られるようになったのは、やはり2004年のH5N1ウイルスによる発生以降でしょう。今でもよく覚えています。2004年1月11日、山口県の採卵養鶏場で鳥インフルエンザらしきウイルスが分離された、という連絡を受けました。材料搬入が夜7時くらいになる、との連絡を受け、夕食を早めにとって待機していました。実際には夜9時半過ぎに搬入され、それからウイルスの型を決める試験を開始し、日付が変わった頃H5型と判定されました。翌日の新聞、TV等のトップで報道され、以降3ヶ月くらいは何らかの形で報道が続いたように記憶しています。山口県の発生では幸いにも1つの養鶏場だけで周囲に拡がらず、封じ込めに成功した、と思っていた矢先に大分でペットとして飼われていた鶏で発生してしまいました。さらに京都の大型採卵養鶏場でも発生し、周辺の死亡カラスからウイルスが分離されるなど、この先どこまで拡がるのか、非常に不安感が募りました。

しかし、それ以降は発生がなかったことから撲滅に成功できたと考えられ、わが国の家畜衛生レベルがいかに優秀か、再認識しました。

その後、分離されたウイルスの性状解析を精力的に行い、その特徴を明らかにしました。その内容は後述する原著論文数報として公表することが出来ました。この時のH5N1ウイルス以外にも私はH9N2ウイルスの研究も以前から行っており、これらの一連の成果が今回の受賞対象となりました。その一部を紹介します。

2004年にわが国で分離されたH5N1亜型ウイルス株は、感染経路究明の一環として遺伝子解析を行った結果、韓国の分離株と高い相同性を示したことから、韓国と日本の流行は類似した株の流行に起因したと考えられました。山口県分離株の鶏に対する病原性を調べたところ、鶏では静脈内接種で1日以内に、経鼻接種では3日以内に全羽死亡するなど、極めて病原性の高いウイルスであることが分かりました。またH5N1亜型ウイルスは鳥のみならずヒトへも感染しうることから、マウスをモデルとして感染実験を行ったところ、馴化を必要とせずとも肺でウイルスはよく増殖しさらに脳へも拡散することが分かりました。興味深いことに、感染マウスから回収されたウイルス（マウス変異株）は元のウイルスに比べ、そのマウス致死性が著しく増強していることが分かりました。この元ウイルスとマウス変異株を遺伝子レベルで比較したところ、PB2タンパク質（ウイルスポリメラーゼの一つ）の627番目のアミノ酸1カ所の置換（グルタミン酸からリジン）が認められただけでした。つまり、強毒化にはこのアミノ酸の置換が極めて重要であり、たった1カ所の変異でウイルスはそのマウス病原性を容易に変異しうることが分かりました。その他の受賞関連の内容については以下の学術誌に原著論文として公表してありますので、興味がある方は参照していただければ幸いです。① J Virol 75, 3490-3494 (2001) ② 日本獣医師会雑誌 56, 333-339 (2003) ③ Virology 332, 167-176 (2005) ④ Virology 339, 101-109 (2005) ⑤ Microbiol Immunol 49, 871-874 (2005) ⑥ Emer Inf Dis 11, 1515-1521 (2005) ⑦ Avian Dis 49, 582-584 (2005) ⑧ Rev Sci Tech 24, 933-944 (2005) ⑨ J Gen Virol 87, 3655-3659 (2006) ⑩ Epid Inf 135, 386-391 (2007)

鳥インフルエンザは昨年(2007年)にも宮崎県と岡山県で発生しましたが、この時の原因ウイルスは2004年前のものとは異なっています。幸いにも2008年冬には鳥インフルエンザの発生がなく、平穏な日々でしたが、インドネシア等の海外では未だに流行が続いています。いつまたわが国に再発するか、わかりません。さらにトリではなくウマでもインフルエンザが2007年夏に36年ぶりに発生しています。まだまだインフルエンザで追われる日々が続くようです。

自信を持って『技術の炎に身をつつむ』 心を養おう

渡辺 敦夫（農化院S43）

私は、昭和40年に農学部を卒業して以来、大日本樹脂約1年、農工大修士2年、カゴメ研究所約4年、農水省食総研プロセス工学研究室長等約19年、東陶機器基礎研究所長等5年、新潟大学大学院教授11年と産官学の職場を経験し、昨年3月に新潟大学を定年退職しました。板前さんですと、『包丁一本さらしに巻いて』あちこちの板場を修行して歩くのですが、私の場合は、自分の専門とする『食品工学と膜分離工学の研究開発能力』を信じて、求められるままに各職場で修行を積んできたこととなります。ここで云う、研究開発能力には、自分で研究を進め研究報告を纏めさらに実用化・商品化していく能力はもち論として、グループを率いる統率力、社会情勢と技術動向を見極める先見性と予算を獲得する説得力、研究開発を遂行していくための実行力と強固な意志、多くの方々の協力を得られる良好な人間関係を築ける人間性そして全体を貫くマネジメント能力等が含まれます。私が持ち合わせている研究開発能力は上記のごく一部でしかありませんが、良好な人間関係と多くの方々の協力のもとに仕事をさせて戴いてきたことは事実で、協力を戴いた方々には、農工大学の先生・先輩・同僚・後輩や関係者が多くおられ、少人数だけに暖かみを持った良い大学を卒業させて貰ったと有り難く感じ、また誇りを持って生きてきました。

新潟大学に赴任したのが平成8年で、数年後から学生の就職難が始まり、勉学品行共に優秀な学生でもなかなか就職が決まらず、就職浪人もでる始末でした。最近の就職手順は、インターネットから入社希望会社に受験の応募をし、この段階で第1段の選考を受けます。いわゆる優良企業では、数100～数1000倍の応募があるので、実際に試験を受けさせて貰える学生は極少数だそうです。応募しただけでは、試験すら受けさせて貰えないことが多くあったので、入社を希望する会社にいる知人に『まずは試験だけでも受けさせてやって欲しい。そして、基準に合致すれば採用して頂きたい』とお願いして試験を受けさせて貰い、この方法で多くの学生を採用して戴きました。こうした時、TR社やAK社のような分離膜（私が専門としている研究分野です）を扱っている化学会社やK社やO社のような水処理会社には知人が多くいるので、受験させて貰ったらどうかと提案すると、『そのような会社にはT大学出身者が多いので、入

社しても私の能力ではついて行けません』と躊躇してしまう学生が複数名いました。

学生がどのように育ってきたのか推測するしかないのですが、小さい時から入学試験で良い点を取ることが社会で生きていくための最高の能力と思い続けてきたにも拘わらず希望した大学に入学できなかったという体験が大きく影響していて、大学4年になっても新しい価値観を持ってないと云うことなのだろうと思います。こういう学生には『社会で要求される人の能力は多岐に渡っており、各自にそれぞれよい面があるのだから自信を持って社会に出られるように今身につけるべきことに一生懸命打ち込み、社会に出ても一生懸命仕事をしなさい。入学試験で良い点を取る能力だけが社会で必要とされる能力ではないのだから』と指導することにより、奮起して巣立っていった学生もいます。

こうした状況の中で、本屋の店先で目に入ったのが『生協の白石さん』という本です。農工大学を有名にしてくれた本で結構なことですが、この本の終わり部分に、ブログの管理人の方（学生とのことです）が、長々と偏差値がらみで農工大学の紹介をしていて、そこに『農工大は受験偏差値のイメージ的には中の上と云ったところ』との記述がありました。この学生にとっては、よほど入学時の偏差値が気になっているのでしょうか。自分の感じるままを素直に表現したのですからブログの管理人を責める気は全くありませんし、キチンと自分の考えを纏めておられこれから社会に出て活躍していける十分な能力を持った優秀な学生と考えています。であればこそ、入学時の偏差値などにこだわらず胸を張って世間を広く見渡しながらか勉学に励み社会で活躍して頂きたいと考えます。野球においても『一流選手はドラフト1位の選手だけではない』のですから。

一方、農工大学には優秀で社会性豊かな先生方が多く居られるのですが、ある研究会の仲間とT大学の近くにある幼稚園の脇を歩いていた時、農工大学に勤務されている先生が『この幼稚園の上澄みはT大学に行き、落ちこぼれが農工大学に来る』と農工大学の卒業生である私の前で発言していました。

上記の二つの事実はたまたま起こったことかも知れませんが、農工大学の学生を落ちこぼれと云ってはばからない先生のもとでは、入学時の偏差値を気にし続ける学生が育ってもおかしくないと考えてしまいます。

農工大学には社会で活躍している多くの卒業生がおり、高い評価を受けていますので、学生・卒業生は入学時の偏差値などを気にすることなく、のびのびと勉学に打ち込み『技術の炎に身をつつんで戴きたい』と考えます。また、農工大学の先生方は世間に広く目を向け、『社会で必要とされる能力は多様であり、入学時の偏差値など気にせず正々堂々と社会で活躍できる能力を身につける』ように学生を指導して戴きたいと考えます。

卒業生の活躍

田谷 一善（獣医S46）

2007年12月23日、日本中央競馬会（JRA）中山競馬場で開催されたG1レース第52回有馬記念で蛭名正義騎手が騎乗したマツリダゴッホ号が優勝しました。有馬記念は、その年の一番強い馬を決めるレースといわれ年齢を問わず最強馬を目指して有名馬が出走し、競馬ファンが最も注目するレースです。このマツリダゴッホ号の調教師は、本学獣医学科昭和53年卒の国枝栄氏です。国枝氏は、学生時代は、獣医学科で学びながら馬術部に所属して選手としても活躍しました。本学卒業後は、日本中央競馬会美浦トレーニングセンターの山崎厩舎の調教助手を経て、平成元年に調教師免許を取得され、国枝厩舎を設立し、これまで着実に実績を重ねてこられました。G1レースとは、JRAが主催する重賞レースの中で最高レベルのレースのことで、年間22回ほど開催され、これらのG1レースの出走権を得るためには、それまでの獲得賞金額などの厳しい基準により選ばれます。一生の間に一度もG1レースで勝利できない調教師も多い中で、これまでに1999年のスプリンターズステークスと2001年の安田記念（いずれもG1レース）で国枝氏の調教馬「ブラックホーク号」が優勝しています。さらに、2007年5月6日のNHKマイルカップでは、国枝氏の調教馬で単勝17番人気のピンクカメオが見事に優勝し、JRA史上最高配当937万9870円（3連単）を出したことで注目されました。平成19年には、G1レース2勝を含む6勝、通算41勝をあげて、「東京競馬記者クラブ賞」を受賞されています。マツリダゴッホ号は、その後も日経賞を圧勝するなど2008年に入っても活躍を続けています。

JRAには、国枝氏以外に東京農工大学出身の小檜山悟氏（昭和52年蚕糸学科卒）と後藤由之氏（昭和52年林産学科卒）が調教師として活躍されています。

今後も3名の活躍に期待し馬券を購入したいと思います。



「蕪村の句」 木版画 恩田 秋夫

四半世紀前の思い出

藤田 二 (農工S58)

大学を卒業して北海道庁に入り25年が経ちました。現在は、帯広市に隣接する音更町というところにある、十勝支庁の北部耕地出張所というところに勤務しています。

卒業して25年ということは、入学してから29年というとても長い時間が経ったことになります。私が入学したときは、共通一次試験（今は何なのでしょう。）が始まった年で、前期・後期の区別もないので一発勝負でした。一次試験の点数をもとに受験校を決めるのですが、なにせ一回目なので、なんとなく大丈夫だろうということで農工大に決めたような気がします。卒業後は同級生が院にいることもあり何回か大学に行きましたが、しばらく（20年位？）行っていません。農工通信に色々と近況は書かれているのですが、本館は昔のままのようですが他はどうなっているのでしょうか。

大学では、高校でやっていたこともあり「グリーンクラブ」に入部しました。男声合唱をやりたいと思い入ったのですが、もれなく女子大（女子美術大学）がついていました。農工大は今では、女子も多いようですが、当時は少なく、特に農業工学科では同期の相川さんが一人目か二人目の女性だったと記憶しています。おかげで、多くの女子大生と知り合うことができました（多くの女子大生とお付き合いしたわけではありません）。夏2回や春の合宿を一緒にやるなど、決してもてることの無かった当時の農工大生としてはめぐまれた生活をしてたのかと思います。このため、合唱団で知り合い、あせって安易に結婚してしまった人を数多く知っています。当時は、混声合唱の演奏会しかなかったのですが、3年生の時に、工化の堀内君と農化の坂田君などと飲んだ勢いで男声合唱の演奏会をやるということになり、初めての農工大だけによる男声合唱の演奏会を行いました。これからも毎年続けていけるか自信がなかったので、「第一回定期演奏会」とはせず、「第一回演奏会」としましたが、これが現在まで続いているのは驚きです。数年前に、確か20回の記念演奏会ということで、OBも参加した演奏会を見に行き、旧友や恩師にも再会でき感激しました。現役も少ない人数ながら、素晴らしい演奏で、我々の時よりレベルが高くなっているなど感じました。第30回の演奏会にも是非行きたいと思っています。（現役の皆さん呼んでください。特にOBの上田君はまだやっているのか！）合唱団のHPを見ると、混声の演奏会は50回になったのですね！！1回目の方はもう70歳を過ぎたのでしょうか。歴史の重みを感じますね。現役当時、女子美の先輩の書いた文を思い出しました。「この団には、魔力がある！！」。今後とも、混声・単声ともに素晴らしい合唱を続けられるとともに、若い人のすばらしい出会いがあることをお祈り致します。

さて、仕事の方ですが、北海道は開発局を含め公務員となる農工大生が割合多かったのですが、最近では、どこの地方公共団体も火の車で人員を減らしており、道庁でも、農

業土木の分野では新規採用がほとんどなくなりました。道庁の農業土木部門には、現在6名の農工大出身者がおりますが、H4卒業の作山君（馬術部出身）以来採用が無く、毎年平均年齢が一歳ずつあがり高齢化してきております。農業土木というのは、字のとおり、農業（農家）と土木（建設会社）を相手に仕事をしているわけで、地方に行くところこれが2大産業ですが、特に土木は典型的な不況産業であり、農業も一時ほどは勢いがありませぬということで、地方は厳しい状況にあります。最近、地球温暖化の影響や食の安全・安心への関心の高まりということで、国内農産物を見直す機運が出てきているようですので、国内農業に対する世の中の支持の聲が大きくなることを期待したいと思います。ちなみに、北海道は気候が冷涼なため農薬などの量が少なくクリーンな農産物を生産していますので、北海道産の農産物を是非ご利用ください。

卒業してから数年は、同級生と会うこともありましたが、最近ではめっきり少なくなりました。私のクラスは、同窓会をやっていない（と思うが声がかかっていないだけか？）ので、誰か企画して招待してくれることを願って拙い文を終わらせて頂きます。



「二月の自画像」 木版画 恩田 秋夫

図書館の貸し出しクラシックCDと 高橋延匡先生のこと

佐渡 篤 (林産S38)

私が退官してから2,3年経ったころ、小金井キャンパスの図書館に入ったところ、懐かしい坂本図書館員から意外な事実を教えて戴いた。応用物理学科の元工学部長の高橋延匡先生が退官時に寄付されたクラシックCDが、工学部キャンパスで凄く利用されていると言うのである。このクラシックCDの選択に当たっては、図書館長を務めていた私と当時の安藤館員（後に東京大学に勤務）とでおこなった。

「どうか、学生さんにクラシック音楽を聴いて欲しい」との高橋延匡先生のお心が実っており、とても嬉しく思ったものであった。高橋延匡先生は生前からクラシック音楽を愛好されていたことは、オーケストラの顧問を長いこと務められていた本多庸悟先生からも伺っていたところである。ここに高橋延匡先生に厚く御礼を申し上げる次第である。

知識の共有を通じた平和な世界—農工大と カブール大学の国際協力

Mohammad Mustafa Akbari (機シス院H19)

Kabul University is located in Kabul, Afghanistan and was established in 1932. It has 14 faculties, comprising many disciplines. The attendance is more than 18,000 students studying in fields like Journalisms, Agriculture, Economics, Law, Literature, Science, Engineering, Pharmacy, Veterinary, fine Arts and so on. Before the Soviet invasion of Afghanistan in 1979, the Kabul University was really a gem, and was one of the renowned universities in the south Asia. During the Soviet invasion (1979-1982), the University lost several professors, doctors and higher education personnel. The majority of the University's faculty left during the period of unrest following the fall of the communist regime, civil war, and Taliban regime never to return.

With the Taliban ousted from power, Afghanistan's new government and international community have turned their attention to rebuild the country's devastated infrastructure, including its system of higher education. The university is in urgent need of professors, for many of the current instructors themselves only have Bachelors degrees from Kabul University.

Collaboration initiated between TUAT and Kabul University when a six-member team, from TUAT visited Kabul University to assess the conditions at Kabul University and concluded an agreement on 20 May 2002, to provide support for higher education in Afghanistan. With reviving Afghanistan's devastated civil infrastructure, its agricultural and animal production resources, which are vital for the present stage of rehabilitation in Afghanistan; TUAT

with its three core departments of Engineering, Agriculture and Veterinary science, served as a unique university in supporting Kabul University and in turn, contributed to Afghanistan's rebuilding in a very demanded time.

TUAT is actively engaged in reviving the faculties of Engineering, Agriculture and Veterinary Science at Kabul University. Since March 2003 when the first group of nine young researchers from Kabul University came to TUAT as the first government-sponsored exchange students, the TUAT has received a total number of 27 researchers for Masters and Doctoral programs and a total of 28 short term researchers. The outcome of the collaboration between TUAT and Kabul University was first realized when four researchers got their Masters degree on October 2005 and returned back to Kabul University. Nowadays, the partnerships and ties between the Kabul University's faculties with other American, European, and Japanese universities are increasing and the Kabul University gradually regaining its luster, but the position of TUAT will remain unique as the first initiator of collaborations with Kabul University after its devastation.

I believe that this kind of collaborations between overseas universities will realize the goal of education for sustainable development that will create a more sustainable future in terms of environmental integrity, economic viability, and a just society for present and future generations. Moreover, maintaining these collaborations will improve mutual understanding in between foreign countries and information of networks based on personal relationships. Lastly we hope and believe the collaboration between TUAT and Kabul University will be of great help to the friendship between the people of Afghanistan and Japan, and will illuminate the road to the peace and harmony.

随想1 輸入食品の農薬汚染から 2 地球と命と科学

藤本 修身 (農化院S46)

随想1 「輸入食品の農薬汚染」から

日本の食糧供給は「輸入」を原則としており、このため残留基準の対象となる農薬はかつて350品目であったところ、今日では外国で使われる農薬を含めて800品目に膨れ上がった。ちなみに、厚生労働大臣指定の合成系の食品添加物がおよそ350品目であるから、食品中に意図的に加えられたり加わる可能性のある化学物質は1000品目に達するものと見込まれる。

そもそも我が国の食品衛生分析では、残留が予見される農薬を分析対象としている。予見できない農薬まで分析対象とする手法は、捜査・鑑識であって、保健所などがルーチンで実施する行政処分・行政サービスにはなじまない。仮にも、このような検査体制に捜査・鑑識性を上乗せする

としたら、食糧輸入は壁にぶつかるのではないかと危惧される。ちょうど建築確認を厳しくしたことによって住宅建設が落ち込んでしまった昨今の事例を見ればよくわかる。これによって、食糧自給率を40%として、約7千万人分の食糧を輸入に頼っているわけだから、たちまち需給のバランスが崩れてしまう。

問題は、最近の輸入加工食品の農薬汚染である。食品衛生法、農薬取締法、薬事法など関係法令の効力が国外に及ばないにもかかわらず、日本人は国産と外国産に対する信頼性を同じステージに置きたがる。これまでも、汚染されたワインや肉製品を輸入した実績があるものの、扱ひ量が少ないか際立った健康被害はなく社会問題化しなかった。

しかしながら、日本の食卓を牛耳っている中国産加工食品による健康被害が発生したことによって、農薬汚染が一気に社会問題となった。しかしながら、7千万人分の食糧は備蓄の領域をはるかに超えるもので、中国を中心とする外国産の輸入に頼らざるを得ない。

その上で、第一に外国産のリスクを国産並みに下げたいなら、圧倒的な税金投入若しくは事業者負担による国内検査体制を確立することであり、この場合、コストは商品に反映させなければならない。第二に現状の品揃えを維持したいなら、消費者は自己責任によって外国産の健康に対するハイリスクを受け入れる必要があり、このためには、加工品といえども原材料から製品までの生産履歴を明確にして消費者の選択の自由を奪ってはならない。第三に外国産食糧の動向に一喜一憂したくないなら、自給率を高めたい。

私は緊急的には第二の対策、恒久的には第三の対策が重要と思っている。

私の住む地域は広島県の中央、三つの大学と世界で半導体シェアを二分しているメーカーや有力電機メーカー、自動車関連産業のほか官民の研究団地などが立地し、全国的にも恵まれた地域であるにもかかわらず、食糧生産に関して10年後には担い手のいない予備的限界集落地域の様相を呈している。およそこの傾向は全国的と思われ、車は急には止まれないように、今後とも自給率は落ち込むことはあっても急に引き上げることはできないだろう。

従属栄養系の動物である人間には、生物系有機物によるエネルギーが必要で、備蓄可能な鉱物系の石油や石炭エネルギーと同列に議論するわけにはいかない。小出しのできない食糧を年間1900万トンほど廃棄物としている日本では、100年あまりかけて築いた学校インフラを廃校にして地域コミュニティの拠り所を喪失させ、100年あまりかけて築いた貯金インフラをつぶして、じいちゃんの蓄えを機関投資家の市場に放り込む流れは止められず、担い手の基盤はますます弱まっている。これらとの相乗で地域の高齢化が猛スピードで進行する状況下、食糧生産の担い手が続々誕生するとはとても思えない。

私たちの農工大学一般教養の経済学教授は「マッカーサーは、日本は4等（4島）国になったと言った」と笑わせた。振り返ってみれば、4等国の方がよほど活気に満ちていたと思う。この頃の米自給率は、人口8千万人に対して生産高6千万石であるからひとり年間1石の米消費として、およそ75%の自給率である。今日の米作技術なら増産が見込

めるので、シンプルな食卓を承知すれば圧倒的に4等国の方が自給率を向上させることができる。

さて、全国に拡大した限界集落地域や予備地域の命運は、食糧自給率1%の東京都、2%の大阪府、3%の神奈川県を中心とする一握りの国土に住む圧倒的人口集団の方々が握っているものと確信している。そこで伺いたい。やはり、4等国より経済大国の方が良いですか。

随想2 地球と命と科学

人々は、生かされていることに感謝しながら、元気に寿命を全うしようとする。一方で、自然の力を上回る医学の力で生かされている姿は何とも痛ましい。

私には96歳で往生した祖母がいた。祖母は90歳ごろまで私の子供であるひ孫をおぶってくれたし、その後も小学校から帰ったひ孫たちの面倒を見てくれた。たまに老衰症状がでて、かかりつけ医に往診を頼むことがあった。

かかりつけ医は、「大先生」とか「若先生」と呼ばれる時代を生き抜いた老医師で、いったん往診を頼むと、仮に6時間後であっても、夜中だろうが明け方だろうが必ず来てくれた。そして診察のあと枕もとで、気持ち良さそうにたばこをくゆらしたものだが、ある時、祖母の一言を私は忘れることができない。「先生、一服盛ってくれちゃあないでしょうかのー」……。この先生を最後に、いわゆる「よき時代」の医師は私たちの地域から絶滅してしまったが、先生の付け加えた「そんなこたあーできゃあせんでー」……。これも忘れられない。

老医師はいつでもどこでも、たった1本の静脈注射に10分以上かけたが、おかげで元気を取り戻した住民は少なくないだろう。その老医師が脳梗塞を患った昭和61年、病を押して往診してくださり、その2~3時間後に祖母は往生したが、健康で生き抜いた祖母は生き長らえたのではなく、授かった命を淡々と自然にお返ししたものと思っている。

有名なニュースキャスターの言葉が耳にこびりついて離れない。「命は地球より重い」……。彼は、命と地球という比べることのできない事象を事例に、感情論で死刑批判を電波で展開した。「命無くして地球を認識できない」という観念の世界を、全国にまき散らし、命こそ至上と言っていたが、「地球無くして命はない」という客観性からみれば、地球こそ至上なのである。彼は、地球をおち壊しても命を守る気なのだろうか。

川の水は絶えることはないが、そこを流れる過去の水は現在の水ではない。でも中性、融点0℃、沸点100℃、無味無臭、無色透明など科学的データを必要とすることもなく、私たちは川水を水と認識できる。私は、老医師と祖母の生き様から、命には淡々と接する気持ちが必要ではないかと思っている。祖母は寝込んで、何度も立ち上がり死ぬまで社会の一員であり続けた。そしていつこの水も同じ水と認識されるように、祖母の命も、過去現在を問わずすべての命と同じものと認識できる。人類は、やがて命を科学の俎上にあげるだろうが、自然に逆らわない淡々とした気持ちで命に接することを忘れてはならない。そして、あえて地球と命の重さを比べるとしたら、地球に比べ命は甚だちっけなもので、地球の方が圧倒的に重いことを理解し

ておくべきである。それが科学の基本であり、命に淡々と清々しく向き合う第一歩である。

フライフィッシングと私

白銀 雄 (林学S41)

「はじめに」

私が始めてフライフィッシングについて知ったのは、夏分30才位の頃だったと思う。

それまでは群馬県庁に就職して山間地の勤務の間に溪流釣を教わり夢中になって毎日曜日に奥利根、尾瀬の近く溪流に入りこみ岩魚釣りを楽しんでた。しかしこの釣りは川虫やみみず等を使って釣る餌釣りであった。ある日、奥日光の湯川へ釣りに出かけた時年齢50才位の人品卑しからぬ紳士が私に話しかけて来た。その人は短い竿をもち、これをむちのようにしなやかに振り廻して白い釣糸を優雅に水面にしずかに振りこんでいた。その紳士は私にこう云った。「見て下さい。あそこにこの毛鉤をうちこみ鱒を釣って見せます。」そして優雅なしぐさでいとも簡単に釣って見せた。そして帰途話をしてわかったことは、その紳士は外務省勤務をしていて、アメリカで勤務した折、ワイオミング州のイエローストン川でフライフィッシングを楽しんでいたということであった。私はそのスマートさ、ハイカラさにすっかり夢中になって餌づりをやめ、フライフィッシングを始めることにした。

1970年初頭では日本でフライフィッシングをしている人は少なく、フライに使う竿やリール、釣り糸等もまだ珍しく、また釣り方、キャスト（毛鉤を魚のいる水面に静かに落してやること）の仕方等の技術の取得はアメリカの本を取り寄せてマスターするしかなかった。また道具もアメリカやイギリス製しかなく高価なものであった。

「フライフィッシングの楽しみ」

フライフィッシングの楽しみは溪流を釣り歩くことで山歩き、高山植物ウォッチング、バードウォッチング、岩石地質ウォッチングそして山菜とり、茸とり、そして手に入れた山女魚、岩魚によるうれしい夕食、とくにきりりと冷した白ワインと岩魚の芳醇な饗宴は何ものにも替えがたい。



そして漁期が終って厳冬期での岩魚の燻製づくりと、楽しみは一年中廻る。

「フライフィッシングの危険性、怖さ」

楽しみだけでないのは世の常である。まず野生動物との出会い。近頃は野生でない方が怖い。山奥集落の近くでは野生化した犬（捨てられたもの）が2匹組んで徘徊している。人間なんか怖がらない。どこまでもひたひたと後について来ると本当に怖い。又猿の群も怖い。近頃遭遇するのはアライグマ。人に牙をたててむかってくる。このアライグマも人かペットとして育てて捨てたものだろう。この他にまむし、あぶ、ひるもいる。しかし何と云っても怖いものは熊との出遭いである。私は熊とは1997年6月、2005年6月、2005年7月、2006年9月と4度出会っている。とくに1997年に遭遇した熊は大きく、熊との距離も10m以内だった。お互いにじっとみつめあってFREEZEという言葉の通りである。少しでも動けば飛び掛ってくる気配。私の頭の中では全速力でいままでの熊に関する知識を総動員して、大きな声を出すことが一番有効であるという結論を出し、これ以上出ない程の声を出したら、何分か（何秒か）じっと私を睨んでいたが、ふりかえって森に消えてくれた。

しかし得てしてこういう渓は岩魚は多い。土地の人も熊の巣があることを知っているのだから近づかないからである。その日大漁だったことはいうまでもない。

「想い出の溪、印象の溪」

私の住む群馬県内で利根川地帯の宝川上流吾妻川源流の白砂川上流、新潟と長野の県境の秋山郷の溪、秋田県の神室山水系、山形県の月山水系、北海道の阿寒に近い釧路川源流、数えればきりが無い程うかんでくる。そこはどの溪流も人家から離れたところで清澄このうえない冷たい水が流れ、危険性も少ない溪だ。このような溪流はその地に何度も通って始めて見つかるものである。

「66才からの溪流フライフィッシング」

おおい66才になった。フライフィッシングは身体が動くかざりは続けたい。私の一年はフライフィッシングを軸にまわる。3月1日から9月30日までの漁期を毎週1日か2日出かけられるように毎朝のウォーキング（昨年まではジョギングだったが）、早起きして毛鉤づくり、シーズンオフのウォーキングはもちろん、スキーによる脚力の保持（今シーズンは7週連続でやった。）、また登山、畑作等で身体を動

かすこと。また釣果の料理や燻製づくりと一年はフライフィッシングを軸にまわる。

フライフィッシングと出会ったことでいつまでも自然と謙虚に対峙し、自然を汚さず、傷めずに楽しんでいければと思っている。

いまはもう心は溪^{たに}に飛んでいる。

2008年3月19日記

趣味のオートバイ

泉水 夏樹 (機械院H2)

私は1988年に工学部機械工学科を卒業後、本学大学院に進学し、1990年に現在勤務する日本精工株式会社に就職しました。現在は生産技術センターのグループマネジャーという立場で、NSKベアリングの生産性向上に関わる技術開発を担当しています。

さて今回、同窓会より寄稿の話を頂いた時には、在学時代に農工大の学生のなかでもあまり良い子ではなかった私ですが、諸先輩方を前に一体何の話をすれば良いのだろうと、随分戸惑いました。仕事はとても厳しく、日々戦いの中にある身としては、現況を語るにはまだ時期が早いと思いましたが、今回は学生時代からずっと続けている、趣味のオートバイについて書きたいと思います。

私にとってオートバイは、16歳のときから26年間ずっと関わり続けてきた、とても思い入れの深い工業製品です。現在は月に一度のペースで、栃木県にあるツインリンクもてぎというレーシングコースに自分のマシンを持ち込み、スポーツ走行(練習)を1時間行うという楽しみ方をしています。最大の魅力は何といっても、300 km/hに迫るスピードで直線路を飛ばし、低速で曲がるヘアピンカーブを絶妙のバランスで通過して、S字カーブを早いリズムで切り返して走り抜けるなど、オートバイを自在に操るスポーツの快感が体を芯まで気持ち良くさせてくれるところです。また、ひとつひとつの走りを分析し、次はこう走ろうという計画を立ててトライしていくと、一周を走るタイムがだんだん縮まってきて、ライディング技術の向上を確認できることも、分かりやすい楽しみの一つです。

そして現地で頻繁に顔を合わせる人達との談義もまた格別です。ライダーというと一般に粗野なイメージもあるかもしれませんが、ここはとても礼儀正しい人達が互いに助け合いながら趣味を楽しんでいる、そんなすばらしい場所です。大学時代に一緒にレースを始めた機械工学科の吉尾君も、何度かもてぎ通いに付き合ってくれています。

これ程素晴らしく楽しい乗り物なのに、しかしオートバイには危険が付きまとい、事故は必ず起こります。また公道の場合には、社会的、道義的な責任もあります。私自身、10代、20代の時に家族を始め皆様に大変ご迷惑とご心配を掛けてきたこともあり、どうしたらずっと楽しく乗れるの

だろうかと、考えながらオートバイと付き合ってきました。その結果この十数年は公道を走ることなく、競技用のコースだけが楽しみの場となって来ました。家庭があって仕事の責任がある立場として、自分で納得の出来る、より安全な形で長く続けていきたいと思っています。目標は60歳で膝すり(オートバイを大きく傾けてカーブを曲がる時に膝を路面にこすりつけながら走る走法)がまだ出来るように、怪我をせず体力と気力を持ち続けることです。がんばりますよ。

私の場合、仕事により押し潰されそうな重圧の中で、ほんの数時間、何か別のものに集中して一切仕事のことを頭から追い払うという意味でも、自分の趣味が人生の中で大きな役割を持ってきています。これが続けられるのも、いま隣のテーブルでお茶を飲んでいる妻の理解があるからこそであり、とても感謝しています。(先日、結婚15周年で指輪をプレゼントしました。)

諸先輩方を始めとする同窓会の皆様、大学関係者の皆様、また在学生の方々、最近の景気の減速を受けて、日々大変ご苦労されていることと存じます。最近は弊社でも農工大出身者が増えて、OB会も活発になってきています。私たちは、NSKのビジョンである『トータル・クオリティーにおいて業界No.1の企業になる』をモットーに皆様のお役に立てるよう、日々頑張っています。今後ともよろしくお願ひ致します。

それでは最後になりますが、皆様のご健康とご活躍を祈念して、本稿の締めとさせていただきます。有難うございました。

バンコク滞在の2年を振り返って(その1)

竹原 孝一 (獣畜S24)

始めに

国際協力事業団(JICA)の専門家として、新設のタイ国立家畜衛生生産研究所技術協力のプロジェクトチームに参加し、ウイルス病の技術指導のため、1987年1月より1989年1月までの2年間、タイ国に滞在する機会を得ました。特にここ1~2年、タイ国の発展は目覚ましく、その殆どは中央に集中されており、それを目のあたりに見えました。本誌では、研究所の概要に触れたのち、滞在期間中に見聞したことを中心にタイ国の一部を紹介したいと思います。私たちが日本を発ったのは、厳冬の1月20日でした。数時間後にバンコクのドンムアン空港に降り立った時には、外気が生暖かく、日本との温度差に驚かされました。私たちの一行はウイルス、病理、寄生虫、生化学、細菌の各専門家5名でした。空港では私達より一足先に着任していたチームリーダーとコーディネーター、タイ国政府役人の出迎えを受けました。未だ、宿舎が決まっていなかったので、研究所近くの、ホテルに一時落ち着くことになりましたが、ホテルの庭にはブーゲンビリアなど綺麗な花が咲き乱れており、タイ国が初めての私には一瞬、お伽の国に来たとい

う感じでした。このホテルには20日間滞在し、この間に土日の休日にアパートを探して移り、2年間にわたるバンコクの生活が始まりました。

タイ国立家畜衛生生産研究所 (NAHPI) とその任務

当研究所は、日本国の無償資金援助により、1986年10月に約25億円の事業費をかけて設立されました。場所はバンコク市北部に位置する、国立カセサート農業大学に隣接しています。この近くには、他に政府の農業関係の機関も散在しており閑静なところです。しかし10分も歩けば賑やかな市街が続いています。研究所の用地面積34,000㎡に、床面積8,200㎡の鉄筋4階建て、クリーム色のスマートな建物は、群を抜いて立派に映りました。開所式にはタイ国王のシリントン王女がご臨席して、1987年1月5日盛大に行われ、その模様は写真として研究所玄関ロビーに展示されています。

私どもプロジェクトチームが、現地に着する前に、すでにタイ側職員は、研究所に入り、活動を開始していました。しかし、研究所にとって最も大事な水の清浄化が上手く行っておらず、その方面の仕事は進行していない状況でした。私どものプロジェクトはスタートが遅れ、チーム派遣が数ヶ月遅延していました。通常なら器具類が設置される前に現地に居て、器具類の点検や使用説明を聞くのが当然と思われたが、それが出来なかったため、後になってこれに関する多くのトラブルが、納入業者との間に生じたのは当然でした。

私どもが着任したときは、水の問題で種々検討していましたが好転せず、私どもが協力してなんとか使える水が採れるまでに、数ヶ月も要しました。

タイ国の水が想像以上の悪さには驚きました。当研究所は日本の家畜衛生研究所に相当するため、小規模だがウイルス、細菌、病理、寄生虫、生化学、疫学、血清免疫の7研究室があり、それぞれの研究室には研究員が数名、他に補助員が4、5名配属されていました。

研究所の任務は、家畜衛生に関する研究に止まらず政府地方機関スタッフの訓練、診断液の製造とその配布、病獣の診断です。

研究員について

研究員は各室とも女性が多く、私の所属するウイルス研究室では、室長以下7名が全て女性でした。彼女らはタイ国のいわゆる一流大学であるチュラロンコンやカセサートの獣医学部を卒業したエリートであり、大半の人がアメリカ、ドイツ、フランスなどに留学経験をもっていて英語を話せました。政府機関にこれだけ女性が進出しているのは、男性に比し女性が優秀だからだろうと思っていたのですが、そうばかりとは言えず、民間会社の方が国家公務員より給与が良いので、一家を支える男性は民間指向が強いのだということが判りました。タイ国全般に言えることですが、夫婦共働きが多く、研究員も同様です。彼らは家庭にはメイドを1～3名雇っており、自分が炊事など家庭の用事をするのは、稀のようです。勤務時間は8.30am～4.30pmですが、残業など時間外に仕事をする研究員は極めて稀でしたが、ウイルス室の室長は何時も5時以降まで仕事をしていました。動物実験などは不得意で、かつ観察などは他人任せのことが多く、中には注射、採血まで他人任せの研究

員もいるのには驚きました。

獣医学会の様子

タイの獣医学会は年1回秋に開催されますが、私の滞在中2度(15回、16回、バンコクで行われ、大体の様子を知ることが出来ました。会場は何れもホテルでした。

講演は全てタイ語、図表はタイ語と英語が半々でした。参加者は400人ほどでした(会員数は1,040名ほど)。座長(2名)は、タイでは単なる進行係という感じで、大学を卒業して1～2年の会員も座長をしているのには驚きました。何れの演題に対しても、盛り上がった討論は無く、聞いている限りでは、現在どんな病気が重要課題となっているのか判断するのは困難でした。同一課題について研究している研究者が少ない関係だろうと思われま

タイ国王と国民

通常の家では、タイ国王と王妃のカラー写真が、大きい額縁に入れて、最も人目に付くところに飾られてあります。それと並んで、大学卒業生の居る家庭なら、国王から卒業証書を受領している写真も飾られてあります。これらの写真は、玄関に入るだけで目に留まるので、この家庭には大卒者が幾人いるかを知ることが出来ます。

卒業式当日は広い式場で卒業生全員が一人一人、国王から卒業証書を直接手渡されます。これは大変な作業で、国王お一人では間に合わず、王子、王女もそれぞれ大学別に担当されます。国王は種々な慈善事業や開発事業をされており、王室と国民の関係は、いやが上にも緊密となり尊敬となって表現されることとなります。

国王の悪口を言うタイ人にはまずお目にかかりません。第9代のプミポン現国王は、現王朝200余年に在位された国王の中で最長を記録し、それをお祝いして1988年7月には、盛大な祝賀行事が行われました。

バンコク市民の生活

衣装：タイに来て間もないある日、研究室の女性から、Dr.は毎日シャツを着替えないのですかと聞かれ、一瞬返事に窮しました。事実、私は日本では平気で2日位は同じものを着る生活をしてきたから、質問の意味を咄嗟に理解できかねたのです。彼女が言うには、タイでは暑くて汗をかくことが多いから、衣類は毎日着替えるのです。私は今まで日本では、他人の衣類など全く気にしませんでした。次の日から注意して見るようになりました。そうすると、確かに皆が毎日違った衣装を着ていることが判りました。男性はワイシャツだから色違いくらいでしか取り替えたかわからないが、女性の場合は一目瞭然です。以後私は毎日衣類を取り替えることにしました。タイ人は清潔好きで、日に朝夕の2回シャワーを浴びます。浴槽でお湯に浸かることをしないので、風呂のある家庭は少ないようです。衣類もタイでは日本より遥かに安く、靴同様に大量に外国に輸出されています。

乗り物：600万都市に膨らんだバンコクの交通事情は極めて深刻です。水に浮かんだ都市と言われるほどで、1mも掘ると地下水が出てきます。市民の足はバスを主体に自動車やオートバイとなりますが、一般市民には高値の花です。市民の足はバスに集中します。市内を走る市営バスは、冷房付きのバスは別としてドアを閉めずに走ります。ドアが

付いていないバスも多く見かけます。このほか小、中型トラックを改造した私営バスがありますが、何れも定員に制限が無いので、朝夕のラッシュ時には鈴なりの状態で走っているのをよく目にします。オートバイもタクシーとして活躍しており、2～3人は普通で、時には4～5人の一家全員が1台で走っている姿も見られます。

ルンピニー公園とジョギング：市の中央にあるこの公園は、バンコクで最も大きく、市民の憩いの場となっています。広さは日比谷公園の約2倍あり、中央の池ではボートを楽しめます。私のアパートから車で5分ほどの距離にあり、休日の朝などはよくジョギングに出かけました。一周2.4kmのジョギングコースは子供から老若男女で、列の切れ目の無いほどでした。バンコクには日本人が1万人以上いると聞いているので、日本人も走っているかと探したのですが、遂に見かけませんでした。殆どがゴルフに行くようです。

住宅事情：タイ国民の貧富の差は、住宅に最もよく現れているように思われます。同じバンコク市内にも、潰れたようなバラックもあれば、広い敷地にお城のように立派な豪邸もあります。中流以上の家庭ではメイドを雇っています。タイでは結婚すると、男子が女性の家庭に入ることが多いようで、よく同一敷地内に軒を連ねて、2～3家族が3～4人のメイドを使って住んでいます。運転手、食事、育児、掃除係りがいたりして、日本の家庭よりゆとりが有るように思われました。かつての日本でも、中流以上なら女中を雇える時代があったのですが、貧富の差の無くなった今では望むべくもありません。外国人はアパートに住むのが普通ですが、その主な理由は安全性と交通の便にあります。そのアパートの多くがスタンビット通りに集中しています。7～15階建てが多く、門は厳重な鉄の扉で入り口にはガードマンが終日監視しています。最近では、治安は極めて良くなっており夜の一人歩きも心配ありません。

アパートの水道水が時々褐色に濁るのには閉口しました。洗濯も風呂にも入れないほどひどいことも屡々ありました。市の水道は完備していますが飲料水にはならず、タイ人でも直接飲むことはしません。市販されている瓶詰めの飲料水（商品名ポラリス）を飲んでいますが、一般家庭でクーラーを持っている人は未だ少ないようで、専ら扇風機を使っています。テレビの普及率は高いのですが、電話の低いのには驚きました。中流以上が主で30%ほどです。

総てがお坊さんで始まる：1998年1月6日は研究所の創立1周年で、その記念式典を講堂で行うと言うので出席しました。私は日本でのそれを想像して、研究所長が1年を顧みでの祝辞が述べられることと期待していました。ところが、式の開始と同時に姿を現したのは、黄衣を纏った9名のお坊さんで、中央の壇上に勢揃いして、なにやらわからないお経を唱えだし、研究員の面々は椅子に正座して拝聴すること1時間、あっけにとられていた私どもの耳に入ってきたのは、式はこれで終了しましたとのアナウンスでした。結局、お坊さん以外の人からの祝辞は一切無しでした。

タイ国は仏教の国で、国民の95%が仏教徒で、残りの5%はイスラム教やキリスト教徒と言われています。タイを旅して驚くことは、寂れた農村でも、周囲の粗末な農家と対照的な立派なお寺の多いことです。生活に余裕の無い人た

ちでも、お布施をしておき、タイ人の仏教に対する信仰心の深さに感心します。正月元旦には、早朝から町の広場に自宅や街で買ってきた捧げ物を手にして集まり、広場に何列にも並んだ台上に置き、お坊さんの説教を聞きます。その後、待機していたお坊さん達が台上のお布施を集めに廻るのを待ちます。お坊さんは釜のような容器を持って廻り、その中に人々は祈りを捧げながら恭しく収めます。容器は忽ち一杯になり、それらはお坊さんに付いて来た子供達の大きな袋に集められます。タイ人の新年はこうしてスタートします。また人々は毎朝家の前でお坊さんを待ち、お布施をします。お布施をする時は履き物を脱いで裸足になりお坊さんの前に跪きます。

結婚式もお坊さんが主役です。式は女性の自宅で行われ、お坊さんが9人来ました。お坊さんの数は何時も奇数とされ、9人が最高ようです。お坊さんから全員に聖水がかけられます。葬儀は総てお寺で行われ、数日続きます。最終日には、故人の業績なり履歴を小冊子に纏め、参列者各人に贈るのも日本では体験出来ないことでした。（続く）

備考：本文は若干変更されているが、財団法人・日本生物科学研究所が発行している「日生研たより」に平成元年から2年にかけて掲載されたものです。

ブラジルの同窓

市川 忠雄（獣医S30）

川村先生との奇遇：

私が筑波大学奉職中に「ラテンアメリカ研究」という特別研究プロジェクトができて「ブラジルの畜産事情調査」のため1ヶ月間ばかり渡伯した。1981年11月のことである。出発するに当たり、当時農林省からJAICAに出向していた板橋 勲さん（農 S22）などに色々とお世話になった。

私たち昭和30年卒のクラスでは20名中なんと1割に相当する2名（井料、藤巻両君）が卒後間もなくブラジルに渡っていて、現在も活躍中である。

ニューヨーク乗換えでリオ・デ・ジャネイロに着いたのが朝だった。藤巻君に奇跡的に遭遇した。川村先生はブラジル旅行中で、前日まで滞在したサンパウロを井料君に見送られて発って、間もなく到着するということだった。私も一緒に到着ロビーで川村先生を出迎えた。その日は、先生をリオ・デ・ジャネイロの名所に案内することになっているとのこと、これ幸い、私もこれに便乗させてもらって、初めての南米、それも魅惑一杯の都市を案内人つきで堪能した。

ニブラ・ビルと藤巻君：

2週間ほどしてリオ・デ・ジャネイロ空港に戻ってきた。藤巻君の住むNova Friburgoへ長距離バスで行った。Nova Friburgoはリオ・デ・ジャネイロ州でも高地にあって比較的涼しく、藤巻君の言葉を借りれば「日本の軽井沢」に相当するとか、静かな清潔なたたずまいだった。ドイツ系の移民が多い町だそうだ。

1年前に建てたばかりの6階建てニブラ・ビルの上部を住居に当て、彼と家族が住んでいた。3階から下は彼が社長をする「ニブラ農業機械販売会社」だった。

“ニブラとは日本とブラジルという意味か”と尋ねたら、“なるほどそう解釈したか・・・、実は自分の出身県の「新潟」と「ブラジル」のつもりだ”との返事だった。

そこでお世話になっている間に彼から、渡伯以来の血の滲むような苦勞の連続の話聞いた。移民船でブラジルに到着した直後のこと。農場の労働がきつかったこと。農場を離れてしばらく、ドイツ系ブラジル人獣医師の助手をしていて大変に信任を得たこと。顧客にも人気が出てきたけれど、日本の獣医師免許は通用しないで悲哀を感じたこと。そして最後には、主として日本の農業機械を販売する自らの会社を立ち上げて成功した話などなど・・・、感動して聞いた彼の半生だった。

井料君との1週間：

サンパウロ空港には井料君が出迎えてくれた。やはり27年振りの再会である。正直に言って、最初は“確かに井料君かな？”といった違和感があった。浅黒く逞しい顔つきになっていた。でも、10分も話していると昔の井料君が蘇ってきた。寮にはあまり居ない彼だったがけれど、駒場寮3の3で同室だった夏休みに珍しく彼が居て、ニコニコしながら天井裏からメロンを取り出してご馳走してくれたのを覚えている。無論、夜間農場実習の成果品である。

彼は、私のスケジュールを聞くとなんと1週間ほど同行してくれた。サンパウロ市内で動物病院を経営していて結構多忙と聞いていたので、そんなに長く病院を留守にしているのかと尋ねると、ブラジル人の獣医師を数人雇っていて彼等に任せてあるから大丈夫、とのことだった。

小野田牧場：

小野田元少尉の牧場にも行く予定と言ったら、そこまでも井料君は一緒に来てくれた。小野田牧場は南マット・グロソ州にあったから、飛行機で数時間一緒に移動した（勿論ブラジル国内の移動はほとんど飛行機しかないが・・・）。

小野田牧場を訪問すると、彼は掘っ建て小屋のようなところに青年と2人で生活していた。牧柵の傍らで彼等と話していたときのことである。一天にわかにかき曇り一陣の風が吹き出した。すると、牧野の彼方から地響きのような音と一緒に砂煙がやってきた。それは、こちら目指して突進してくる牛の集団だった。この地方は乾燥地帯だが、雨季に入り一度降り出すと豪雨になって低地ではとたんに水に浸かってしまい牛が溺れ死ぬことも珍しくないという。牛たちは本能的にそれを知っていて、大雨が降りそうになると高い場所を求めて疾走するのだという。自然環境の激変に、この国の牛たちも巧みに適応していることが分かった。

牛の疾病：

ブラジルは口蹄疫、炭疽、狂犬病、ブルセラといった悪性伝染病の常在地であり、そのほか内部寄生虫や一匹ビッシュと呼ばれる牛バエ（Bicho Berne）の蔓延が発育不良や皮革の品質低下の原因となっている。

とくに口蹄疫はその被害が大きいことから、政府はかなりの力を入れてその撲滅をはかっていた。リオ・デ・ジャネ

イロにはアメリカの全面的援助によってパンアメリカン口蹄疫センターが設けられ、ワクチン製造や診断を行っている。

しかしながら、国土が広大なことや牧場経営主の衛生観念が低いなどの理由から、年3回の実施が義務づけられている予防接種もほとんど行われていない。

ほとんどが粗放な自然牧野への放牧のため疾病牛の発見が困難なこと、さらにUrubuと呼ばれるハゲタカの一匹は口蹄疫など伝染病で倒れた牛を空から発見すると、まだ生きていうちから食べ始めるといわれ、この鳥も伝播に一役買っている。

伝染病の撲滅は無理なので、ブラジルは家畜疾病と共存しながら畜産の振興を図ろうとする意見も聞かれるお国柄であった。

ブラジルの日系人：

サンパウロ市滞在中に、市内や近郊にお住まいの同窓の方々が十数人集まって歓迎会を開いて下さったのには感激した。それも、ほんの何日前に川村先生を迎えて同窓会をしたばかりとのこと。痛く恐縮してお礼を言うと、こんな機会を利用して集まる名目ができて嬉しいのですよとか、日本から来た人と話すのが楽しいのですよ、とか有難い言葉だった。この同窓会には数人の女性が混じっていた。奥様ではなくて、繊維学部出身だそうだ。

そこで伺った話。日系人が集まると、必ずと言っていいくらいに「ふるさと」の歌が出るとか。それで、二世、三世の日系人はこの歌を日本の国歌だと思っている人が多いとか。なるほど「兎追いしあ山、小鮎釣りしあ川」「水は清し故郷」などの歌詞は、そのメロディーとともに同胞の琴線をたしかにゆさぶらずにはおかないものがあるのだ。ブラジル各地を廻った段階で、それが十分に理解できた。この国では、流れる川はみんな黄色い濁流ばかりだった。

私が中学校の環境教育でやりたいこと

福澤 徳穂（植防S55）

私は今、横浜市の中学校理科の教師をしています。思えば環境問題に関心あって農工大学に入学し、さまざまな講義を受けました。そして「これからを担う子供たちとともに環境問題を考えよう」と教師になって20余年。生徒指導や学級経営に日々の心を奪われ、忙殺される毎日でした。

そして、昨年度、横浜市立芹が谷中学校に勤務することとなり、私は長年待ち望んでいたようなものに出会ったのです。それは「学校林」。

雑木林をもととするこの学校林は、しかしながら現況の教育課程ではその活用がままならず、昆虫に造詣が深かったであろう前々任者の緻密な観察記録が無造作にほこりをかぶって置かれているだけです。それでも、何らかの形で環境教育に活用する道はないかと模索中です。

折しも本年度、港南区の教育研究会理科部会の授業研究発表の機会があり、理科の総合的な体験的学習という主題で、学校林を活用した授業を試みました。横浜市は平成17年に「横浜市環境教育基本方針」を策定し、それに基づいて、

河川・樹林地・公園・動物園・水再生センター等の環境関連施設の目的や役割、大気・騒音・水質・地球温暖化防止などの環境施策など、環境創造局の紹介を通して「出前講座」を実施しています。区の研究発表会では、この制度によって紹介いただいたNPO法人よこはま里山研究所の代表を務める吉武美保子氏を外部講師として呼びし、授業をお願いしました。横浜市からの報酬等詳細は不明ですが、ご厚意で研究授業後の研修会にもご出席いただき、貴重な示唆をいただきました。

私が夢見ているのは「都会に森を」

現実には学校林があることで毎年の草刈りと3年毎の剪定はなくてはならず、その費用は甚大なようです。また、空気中の二酸化炭素濃度の上昇と都会のヒートアイランド現象は看過できない情勢にあります。

都会の土地は有効活用がなされなければならないという負荷がかかっています。「有効」とは「経済効果」という意味らしく、残念ながら二酸化炭素を排出し、都会を熱するものの建造が勝っています。二酸化炭素を吸収する光合成をする森を作ることが「有効活用」とならないか。それが今の私の夢なのです。

学校の周りの空き地に森をつくる。毎年1学年が、「総合」の時間を活用して、下草狩りなどを行う。ツバキなんてどうなのでしょう。常緑で1年中光合成をするでしょう。剪定した枝は木材チップに。葉や花は、近くの食堂に協力してもらった生ゴミとともに堆肥にし、お礼肥にする。実はバイオ燃料にできないのでしょうか。

中学校というところは1学年でおおよそ150名。継続的な学習活動をしていくためにはこの人数がどう活動するかを考えなければなりません。また安全に対する配慮も不可欠です。

また、バイオ燃料や木材チップの製造は、ひとつの中学校だけではできないでしょう。

しかし、もし実現すれば、生徒の学習活動が直接社会に還元できる、この上ないキャリア教育ではないでしょうか。これが今の私の夢なのです。

横浜市は平成16年度から「市民による里山育成事業」というを行っています。主に残された「市民の森」などでの観察や保全を市民団体が行っていく仕組みです。私の夢がまったくかけ離れたものではないような思いなのです。

今勤める横浜市立芹が谷中学校の学校林は、もとの雑木林で木々が大きく、中学生ではなかなか手に負えないところがあります。それでも夢の第一歩のつもりで、何かできることはないかを、日々模索しています。

わたしの長野五輪招致

西田 和彦（農学S36）

「ザ・シティ・オブ・ナガノ！」IOC（国際オリンピック委員会）のサマランチ会長が1998年の冬季五輪の開催地は長野であると宣言した瞬間でした。会場のパーミンガム（イギリス）で私たち招致関係者は喜びで涙を流し、抱き合っ

たものです。興奮が次第に冷めていく中で、わたしはこれですべてが終わったのだという安堵感、そして大きな虚脱感に襲われていました。

東京農工大学を卒業後、郷里に帰り長野県職員に。農業試験場経営部に勤務。県下の農村地帯をまわり実情を学ぶ中で、これといった研究テーマを見い出せず怠惰な日々を過ごしていました。このままでいいだろうか・・・思い悩み、行政（県庁）へ転出、企画部・商工部などを渡り歩きました。この間貿易振興で香港に3年間駐在したこともあり。80年代になって国際化が叫ばれ、県も国際室を設置、その初代室長を仰せつかりました。折りしも本県は冬のオリンピックに名乗りをあげ、国内競争に勝利し、いよいよ国際舞台に躍り出ようとしている時でした。89年8月、東京に五輪招致の拠点事務所が設置され、そこの国際渉外部長を拝命。東京都内の1LDKのアパートで単身赴任の生活を始めました。仕事はIOC委員のもつ1票を長野へ入れていただくための作戦であり、そのための行動をとることでした。

まず最初に取り組んだのは当時92人いたIOC委員の顔を覚え、合わせて家族構成・趣味・好きな食べ物などの情報を収集することでした。

IOC委員にはじめて接触したのは赴任直後、プエルトリコのサンファンで開かれたIOC総会でした。降り注ぐ太陽の下、海水浴に興じる委員たちが浜辺でくつろいでいます。まず「NAGANO」という言葉を覚えてもらわなくては・・・。

ワイシャツにネクタイ、汗まみれになって英文のパンフレットを受け取って貰いました。いま思えば田舎者の愚直な行動だったと恥ずかしい気がします、当時は夢中でした。

開催地が決まるまでの3年近い東京での生活、ある時は彼らを日本に呼んで長野への投票を懇願、競技予定地の視察案内などです。成田空港への送迎、ホテルのチェックイン、長野への同行などその回数は数えきれません。

またIOC委員をその国に訪問して、会ってもらうことも重要な任務となり、世界各国へおみやげを携えて知事（招致委員長）などに随行することも大きな仕事でした。

招致合戦は激化していきます。「入国審査で手間取ってはだめですよ。ライバル都市はフリーパスで通しているようです」アドバイスをしてくれる人もいて税関などにかかけあい、入国手続きに便宜を図ることもしてきました。「空港からパトカーで先導してもらえないか」といった国賓級の対応を求められたこともあり。また。

招致合戦は金メダルしかありません。ここまできては負けられないという焦燥感、増長とも思えるIOC委員の要求、招致にあたる人たちの間の確執にさいなまれます。

そんな時、きまってわたしの足は母校のある府中に向かいます。ケヤキ並木の下を歩くとなぜか心が癒されるのです。校門の前に立つと、60年安保闘争当時のことが頭をよぎります。あの年の6月15日、わたしは国会正門前でシュ

プレヒコールのスクラムの輪にいました。仲間の輪のなかにいた東大生樺美智子さんが犠牲となったのです。体の震えが止まりませんでした。

奇しくもあの安保闘争から31年目の1991年の6月15日、長野は冬季五輪の開催を勝ち取ることに成功した日となりました。6月15日、この日はわたしにとってはいつまでも忘れられない日となっています。

赤とんぼ遠き日の指立ててみる 和彦

回り道の人生

畑島 剛 (養実S23)

科学製品の研究開発などにおいて、東京農工大の実績がマスコミなどで高く評価されるのを知って、大変喜んでいきます。

在職中に上京した際、2回ほど母校の小金井校舎を訪ねたことがありました。駅から学校までの通りと、校舎の様子は在校した60年昔の学校の面影とはすっかり変わってしまいました。しかし、辺りの武蔵野の風情は変わらず、若い日の思い出が甦ってきます。

こんな私が「農工通信」に寄稿するほどの実績は持ち合せませんし、硬質の文章が書ける道理もありますが、せめて回り道ばかりの過去の思い出でも述べてみます。

戦後無い無いづくしの学生生活を終えて、郷里の佐賀へ帰りましたが、当時はまだ終戦の暗い影が強く残っていて、世相は落ち着きがなく、県の財政難もどこか現状によく似たところがあって、一応決定的だったはずの蚕糸課への就職も駄目になり、やむをえず隣町にある新制中学校で5年間教鞭をとることになりました。これが回り道のはじまりでした。

担当教科は理科と国語でしたが、そればかりか、最年少教員というハンデーが邪魔して、野球のボールなど一度も握ったことのない素人が、課外スポーツの野球部監督を命ぜられたのには閉口しました。

また毎年行なわれる学芸会のだしものに、民話や古典などを脚色したり、オリジナルな脚本など書いて演出を行なうなど、私の常識の範疇にはないものも、若げのいたりで恥知らずに繰り返してきました。

当時は交通の便も悪く、背後の山から吹き下ろす風や、冷たい雪のなかを、課外のスポーツ指導に疲れた体で、郊外の悪路を自転車を踏んでおそく帰りながら、まるで若い心のつぶやきを聴いているような気分でした。

そのうちに県の財政が好転でもしたのか、先輩の口利きで蚕業試験場へ勤務し、そこで5年ほど在職してつぎに希望した本庁蚕糸係へ転勤となりました。だが、当時は県内の蚕糸業もまったく停滞気味で、これを維持振興するため中山間地帯を駆けまわっては、桑園の造成に精進しました。

それでも全国的な蚕糸業の停滞が影を落とし、県内の蚕糸が消滅すると、蚕糸係の名も消え、私自身は突然農業土木関係の課に配置替えされました。これが第2の回り道で

す。

新しく始めようとする干拓地の造成にともなう近隣漁業者への補償やその後の対策、また干拓完成後の入植者選定、造成土地の配分など、思いもよらぬ任務を受け持たされることになりました。この時も途中から米の減反政策が打ち出され、決まっていた入植者の辞退も相次いで、選定も方向変換せざるを得なくなり、大変苦勞をさせられました。

一応この任務を無事に完了すると、つぎには同じ農林部ではあっても、これも専門知識はまったくない林務課へ異動させられ、当時所有権問題などでうさかった入会林野管理組合結成の業務にたずさわることとなりました。これが第3の回り道です。

入会林野という山野の名称さえ知らなかった私は、前任者からいろいろと知識を教わりましたが、離村した人の放棄承認を得るため国内を回るのは大変でした。でも人の一生はいつも不慮の出来事の積み重ねだと考えたら、煩雑と疎んずることはないようです。

そしてどうにか県を退職した私は、つぎの回り道にあたる測量会社へ招かれることになりました。Kという有名な会社ですが、私の役目はもっぱら営業と指名入札への参加です。これまで入札立会の立場にいた人間が百八十度違った入札に参加する側の席に座ってみると、どこか不思議な気分でした。

こんな回り道ばかりの世界で生活してきた私に、唯一心のゆとりをもたらしてくれたのは、50年あまり小説などの創作に取り組めたことです。教員時代から今日まで、その間には、弁論賞、県文学賞、九州文学賞などを受賞したり、小説集を出したりもできました。これが私の一番大きな回り道でした。

ツルゲーネフというロシアの有名な文豪の言葉のなかに、「疲れた人は、しばし路傍の草に腰をおろして、道行く人を眺めるがよい、人はそう遠くへは行くまい」とありますが、これと相通じる心境が、私にこんな余裕を与えてくれたのでしょうか。

すべての公職を辞めたいまは、2つの同人誌に相変わらず小説やエッセイなど発表するかたわら、10年間も県文学賞の審査(兼九州芸術祭文学賞審査委員)にあたり、ほかに県文化年鑑編集委員や著名な小説家を多数育ててきた同人誌の編集委員など、まだ責任の重い日々を送りながら、つぎにくる回り道の世界など考えています。

卒業1年後の近況

谷川 敦子 (地生院H19)

修士課程を卒業し、あっという間に1年が経ちました。私は現在、大学で学んだ生態学の分野の知識を活かして、埼玉県自然学習センターに勤務しております。センターのある北本自然観察公園の管理やイベント、展示の企画と運営などが主な仕事です。来園者は、幼稚園児からお年寄りの方々まで幅広く、たくさんの人達に出会える職場です。自然や生きもののこと、生態系のしくみ、環境問題などについてお話し

するために、学部1年生のときに受けた授業をがんばって思い出したり、調べなおしたり、新たな本を読んでみたり…。日々勉強の毎日です。大学にいたときには当たり前のように使っていた、“外来種”や“生物多様性”といった専門的な言葉を、世間でも目にする機会が増えました。言葉は知っていても、その背景にある考え方まではまだまだ浸透していないのが現状だと思います。社会に出て、自分が学んできた分野を見つめなおすことで、大学で生態学や環境保全の最先端の考えを学んでいたのだということを再確認しました。恵まれた環境で学べたことを誇りにし、少しでも社会に還元できたらと思います。

仕事が休みのときの楽しみは、大学におじゃますることです。特に用事がなくても、ついふらりと遊びに行ってしまう。6年間過ごした大学と府中の町は、私にとってホッとできる場所。正門から本館までのケヤキが並ぶ道を通ると、すっかり大学生に戻ったような気分になり、安心感でいっぱいになります。たくさんの先輩方がたびたび大学を訪れて下さるわけが、分かるような気がします。特に4年間お世話になった研究室はもうひとつの我が家のように、変わらず笑顔であたたかく迎えてくださる先生方や在校生のみなさんについて甘えて長居してしまいます。またその会話のやりとりで、みなさんの研究を垣間みられることも、大変勉強になります。

研究室をはじめとして、大学の先輩方の自然・生態系の分野での活躍がとても嬉しく、心強いです。大学のときに作り上げていったいろいろな人達との関わりが、これまで以上に私を支えてくれていると感じます。また新しく研究室に加わる仲間たちにお会いするのが楽しみです。これからもまた大学にたびたびおじゃますることと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

合成繊維と松山

鈴木 東義 (工化S39)

帝人に入社して東京から松山へ新入社員教育を受けにやって来た時の第一印象は、美しい夾竹桃の桃紅色と明るい空の青さであった。高度成長時代に入り、帝人松山事業所ではポリエステル繊維の生産設備の増設が繰り返され、重信川を隔てて松山市に隣接する松前町の東レ愛媛工場ではポリエステル短繊維とアクリル繊維の生産が始まっていた。この松山の地で会社生活の大半を送り、高機能ポリエステル繊維の研究開発を続けることになろうとは当時夢にも思っていなかった。2007年の世界の繊維生産量は6770万トンで、そのうち化学繊維は4070万トン、天然繊維は2700万トンである。化学繊維の中で合成繊維は3760万トンで、その内訳はポリエステルが3080万トン、ナイロンが380万トン、アクリルが240万トンであり、ポリエステル繊維が圧倒的に大きなシェアを占めるに至っている。

合成繊維の進化の歴史をたどると、①合繊固有のイージーケア性を基に目覚ましい発展を遂げた「合成繊維の黎明期」、②天然繊維の巧妙精緻な構造や機能を手本に、シルク、ウールがもつ優れた風合・外観などの感性や綿がもつ吸水・吸

湿性を追究した「天然繊維模倣の時代」、③シルクを超えたふくらみや桃の産毛タッチなど、合成繊維独自の高感性・質感を追究した「“新合繊”時代」を経て、近年では、④「快適で健康かつ安全で環境に配慮した生活」への社会的ニーズの高まりを背景に、Quality of Life(生活の質)、安全、省エネ・省資源、環境・リサイクルなどをキーワードとして「市場密着型の高機能素材の時代」を迎えている。この間に開発された数多くの開発素材には、その一つひとつに個々の発明者の夢と情熱とセレンディビティを含む開発ドラマと技術的ブレークスルーがあり、そして多くのケースで自然界の生物の構造や機能がアイデアの宝庫となっている。サブミクロンの凹凸表面構造をもつ蛾の角膜がカモフラージュのため光を反射しない機能、樹木の毛細管吸水機能、柞蚕絹、サンドシルク、天然皮革・スエード、蓮の葉・里芋の葉の凹凸構造(ろう質)が水玉を弾く機能、ウールの黒の深みなどを自然界の生物の構造・機能に学んだ合成繊維として例示することができる。

この間、筆者は一貫してポリマー改質による高機能ポリエステル繊維の研究開発に取り組み、多孔吸水性ポリエステル繊維「ウエルキィ®」(繊維学会技術賞受賞)、鮮明・深色ポリエステル繊維「シルフィル®」、半練絹調、柞蚕調ポリエステル繊維「シルドーム®」、表面フィブリル化ポリエステル繊維「ズアーズ®」、高強力カチオン染料可染性ポリエステル繊維「ヴィキシー®」などを誕生させ、世に送り出すことができた。この中、多孔吸水性ポリエステル繊維「ウエルキィ®」は、繊維表面から中空部まで貫通した連通微細孔を多数有し、毛細管現象によって優れた吸水性を呈する多孔中空断面繊維であり、スポーツ、インナー衣料における吸汗速乾素材の草分けとなった。

このような多年に亘るパフォーマンスが、「独創性に富む高機能ポリエステル繊維を次々と開発し、繊維科学技術の発展に貢献した」として評価され、平成17年度の繊維学会功績賞という荣誉ある賞を頂くことができたのは望外のことであった。定年退職後の現在も研究開発に携わり、チャレンジを続けている(業務委託契約)。

現在、東レ愛媛工場は、東レが世界一のシェアを誇る、アクリル長繊維を1,000℃以上の高温で炭化して作る炭素繊維「トレカ」の主力生産工場に変身し、複合材料研究所を擁する。また、帝人の松山事業所はポリエステルの中核事業所として、世界で初めて開発したケミカルリサイクル技術を基に海外を含むアパレルメーカーなど約75社と共同で完全循環型リサイクルシステムを進める一方で、最先端技術によるナノテクノロジーを活用した超極細の繊維「ナノファイバー」の量産化に踏み出そうとしている。

このように城下町・松山では、今、新しい時代に対応した合成繊維の力強い挑戦が進められている。



左からウエルキィ®, シルフィル®, シルドーム®の電子顕微鏡写真

谷津田におけるほ場整備

橋本 雅永子 (農工H9)

1. はじめに

千葉県は温暖な気候で早場米の産地である。しかし、見渡す限り水田が広がっているかというところ、そういう場所は利根川沿いの沖積平野か九十九里沿岸地域に限られていて、大概は丘陵の谷底に熊手のように入り組んだ形の田んぼで、谷津田と呼ばれる。

県職員になって3箇所目の職場で、その谷津田で、生態系の専門家と工事方法の検討をしながら生態系配慮型のほ場整備(区画整理)を担当することになった。

2. 工事による生物への影響

農家がほ場整備を行うのは何故か。1点目は農作業のしやすさ・安全性の確保、2点目は工事費の負担減のための経済性の確保、3点目は草刈・水路掃除等の維持管理面での負担減である。

しかし、そうした従来の整備方法は、生き物にとって棲みにくい環境を作ることとなる。

水路内の落差・分断により魚類の移動を阻害し、コンクリートの均一断面化により、水路内の深みを利用する魚や、早瀬を利用するゲンジボタルの幼虫などへ影響を与える。水温調査では、土水路に比べコンクリート水路が水温の日較差が大きく、生物が棲みにくい環境と思われた。

また、水田と周辺の林地の間にU字溝を1本入れるだけでも、両地域を移動して生活する種に影響を与え、暗渠排水を設置し乾田化すると、冬場の水溜りの減少によるサンショウウオ等の早春の産卵場所を奪うことが懸念された。

3. 配慮対策工事

谷津田の奥まで3面コンクリート張り水路が必要なのか、とずっと疑問があった。斜面で表面が平滑な護岸をしまうと、鉄砲水が増え下流に洪水を引き起こすのではないか。ならば粗度係数の高い材料で水路を護岸し、全体的に流速を落としてやるほうが良い。

結果、工事の対策の一つとして、ブロックマットという不織布に握りこぶし大のコンクリートブロックが貼ってあるシートを護岸に用いて流速を落とし、台形断面にマットを貼り付け、水田と林の横断方向の連続性を確保することとした。また、気化熱による水路表面の温度低下も期待された。

その他、岩がでるところでは素掘りの土水路とし、深いところと浅いところを作るため、わざと凸凹に掘る方法など前任者が計画・実施済みも含め、数種の方法を試してみた。

4. モニタリング

それぞれの工種に対する結果は、複合要因がありすぎて因果関係ははっきり取れなかった。前述のブロックマットも単体ではよく分からない。ただ、部分的に土水路を残したことについては、地域に多くいたドジョウ3種やハヤ、ゲンジボタルの生息場として機能していることが、事業期間中の調査やその後の生き物調査で効果があったと感じられた。

5. 生き物に配慮する意義

地元はゲンジボタルの保存は望んでいたが、その他の生物については、「なぜ配慮しなければならないか」というところで、いつも折り合いがつかなかった。農家の費用負担を考えれば当然のことではある。

生物多様性、それを支えているのは地形・地質・水分条件の多様性である。設計の際はその無機環境条件をどのように整えるかが中心だった。それらに配慮することは、持続可能な生産基盤条件や、ひいては人の生活環境を良好に保つことにつながる。このあたりを、うまく伝えていければと思う。



松阪牛はなぜ高級ブランドになったのか

吉田 譲 (獣医S45)

皆さん、三重県といえば何を思い浮かべますか。

「伊勢神宮」「伊勢志摩の景観」「松阪牛」「鈴鹿サーキット」主にはこんなところでしょうか。なかでも「松阪牛」は全国に誇れるブランドとして確立しており、われわれ畜産関係の仕事に携わる者にとってその振興は重要な課題の一つです。

ところで皆さんどうして「松阪牛」が高級ブランドとして定着したのかご存じですか。これには明治の文明開化の時代に遡り説明する必要があります。

文明開化で東京において牛鍋などで牛肉の消費が大幅に

伸展した時、定期的に松阪地方から多数の和牛を東京に送り込んだことに始まります。

では、何故、松阪から送ったのか。もちろん当時の和牛は役牛としての利用でしたが、紀伊半島一帯からその使役を終えた老齢牛が松阪地方に集められていました。これは骨などを肥料として利用するため江戸時代に船便で九州等に送られていたことを示す資料があります。そして紀伊半島一帯は耕土が浅いため役牛としては雌牛で十分だったのです。

松阪地域に江戸時代から雌牛が集まっていたのです。その牛の多くは但馬地方で生産された雌牛だったのです。だから松阪牛は雌牛なのです。

明治になりその牛を定期的に東京へ送り込んだ人がいたのです。鉄道も自動車もない時代にどうして牛を東京まで送ったと思いますか。そうです、歩いてです。松阪から東京まで。そう、東海道を歩いて、あの大井川を渡り、箱根峠を越えて。こう言うと、えっ?、うそ!、牛は歩けるの、何日かかるの、皆さんそう言います。でも東京まで歩いたんです。本当です。今では信じられませんね。

ここでもう一つのポイントです。東海道を歩くと言えば当時伊勢神宮にお参りをする人がたくさん東海道を歩いていました。この人たちが松阪から来る牛の集団に往きに2回、帰りに1回は出くわすことになるです。当時日本の人口が数千万人の中で数百万人の人が目にするわけです。数十頭の牛の集団を目の当たりにして、牛が行く先々で評判にならないわけがありません。宣伝しなくてもすごい宣伝になっていたのです。ですから当時は松阪牛のことを上方から来る牛と言うことで「上牛（かみうし）」と呼んでいました。名称で言えば「上牛」はその後「伊勢牛」となり、昭和になり伊勢市が誕生してから本来の生産地である「松阪牛」となりました。

一つ言えるのは東京に送り込んだ人が山路徳三郎さんという獣医さんであったというのは私も獣医師にはうれしい話ではありませんか。まあ、家畜商でもあった山路翁はよく考えるとブランド化に一生懸命というわけではなく、松阪に集まっていた牛を需要が伸展した東京に送り込んだだけなのかもしれません。送り込んだだけと言っても道中の多数の牛の休憩所や餌の確保など大変だったことでしょう。しかしこれがブランド化確立のきっかけになったということは間違いありません。

ブランド化の基本は「定時・定量・定質」です。当時の松阪牛関係者のいろいろな活動をみるとたぶんあまり意識はしていなかったと思われかもしれませんが見事にこれに当てはまります。江戸時代から松阪地方に集まっていた雌の役牛を月2～3回定期的に、数十頭東京に歩いて送った。これが道中の多くの伊勢神宮参拝者の目にとまった、ということです。

ですから当時は役牛上がりで長距離歩いた和牛ですから肉が固くて食べにくいからすき焼きのような薄切りの肉となったとのことでした。

松阪牛が高級肉ブランドとなったのは昭和に入ってからのことです。しかし、明治時代の先駆者のこのような活動がなかったならこのことはなかったかもしれません。

昭和になり毎年11月末には共進会が開催されますから、世界一値段の高い肉牛を拝むだけでも値打ちがありますから是非見に来てください。

伊勢神宮は今「式年遷宮」の行事がたくさん行われています。これは20年に一度「社」を建て替える行事で賑やかで厳かなものです。興味のある方は式年遷宮の公式サイトで確認し是非見に来てください。「赤福」も改心し販売を再開しましたので、一生に一度は伊勢神宮参拝といえますし、式年遷宮はこれを逃すと再び20年後となりますのでそれまで存命かどうかわかりませんから。皆さん急いで来てください。

山形牛

河野 訥（獣医S45）

松阪牛や神戸牛、近江牛、前沢牛など全国には多くの銘柄牛と呼ばれる黒毛和牛肉牛があり、それぞれが美味しく高級な和牛肉牛として、私たちの食を楽しませてくれます。

私が住む山形県にも「米沢牛」があり、全国の皆様にも知られていることと思います。

山形には、もう一つ総称「山形牛」という銘柄があります。

実は、「米沢牛」も総称「山形牛」の一部なのです。

一般の消費者の方には「米沢牛」はよく知られていると思いますが、残念ながら「山形牛」についてはあまり知られていません。

そこで今回は、食肉業界で肉質（特に脂質）が全国的にも高く評価され、国内産地間競争の中での確固たる銘柄を確立している総称「山形牛」について紹介させていただきたいと思います。

「山形牛」の史実については、江戸時代に県内の置賜地域において、南部地方（岩手県）より「上り牛」と称し、二～三歳の和牛を導入し、農耕等を目的に飼養されていました。明治初期、藩校興譲館（現在の米沢興譲館高校）の外国語教師として招かれた英国人チャールズ・ヘンリー・ダラス氏が、任期を終えて横浜に帰る際にお土産として米沢牛一頭を持ち帰り、それを試食した居留地の外国人たちは、その美味しさに感嘆、賛嘆……

たちまち人々に伝えられ「米沢牛」の名が知れるようになって



たといわれています。

その後、肉牛の生産も逐次県内全域に普及し、肥育頭数も年々増加して、関西圏や首都圏への販路が拡大する中、県内の飯豊・西川・天童・東根・尾花沢地方などに地区銘柄牛が次々と作出されたことから、県内産和牛の品質・規格を統一する必要が生じて昭和37年に「米沢牛」を含んだ県内産肥育和牛を総称「山形牛」と銘命することになりました。(山形肉牛協会)

年々、県内の飼養頭数も増え、平成5年には約29,000頭までになったのですが、平成13年9月に日本で初めて牛海綿状脳症(BSE)の発生があり、一時は私どものみならず日本中の畜産関係者や消費者の皆さんがパニックに陥りました。しかし、関係機関の皆さんのご尽力や生産者の努力により、安全な飼料の給与(生産)や牛個体識別制度による牛トレーサビリティ(流通)が確立され、更に、平成18年5月に施行された「ポジティブリスト制度」に基づいて動物用医薬品の残留がない安心・安全な牛肉を消費者に提供することが出来るようになりました。

また、先般のアメリカ産牛肉の輸入禁止により国産牛肉を食べていただく機会が増し、その美味しさと食の安全性を広く消費者の皆さんに理解していただけたこともあって、今では山形県においても牛肉の生産現場に活気が戻りました。

平成18年度の山形県における和牛肉牛飼養頭数は約26,000頭、と畜頭数は約14,200頭でした。

枝肉の格付けA5等級(いわゆるサシの基準、A~C、1~5段階がありA5が最高)は、全国では27.9%に対して「山形牛」は39.7%でした。いかに「山形牛」が高い品質であるかご理解いただけることと思います。

また、先に「山形牛」は肉質、特に脂質が高く評価されていると紹介しましたが、それには肉牛の健康管理や飼養管理・技術さらに遺伝的な要素などいろいろな要素が絡み合っているとされています。

そのために、私たち現場を担当する獣医師も、生産者と共に肉牛個々の健康管理と群の飼養環境の整備に努め、消費者の方々喜んでいただける肉牛を作り、お届けしたいと日々研鑽しています。

まだ山形牛をご賞味で無い方は、是非一度味わってみてください。

過去のモノは不要か？

門屋 一臣(農学S33)

写真1は伊予鉄道三津駅の初夏の夕方です。ちょうど下り列車が着き、通勤客が降りてきて、のどかな一日の終わりを感じさせてくれます。駅前に多く止められている自転車は高校生が乗ってきたのでしょうか、若い人が駅を利用する町の活気を感じさせてくれます。三津駅は、愛媛県の県庁所在地松山市を走る伊予鉄道高浜線の中心駅である松山市駅から約6kmのところにあります。都会の駅ほど乗降客は多くありませんので、駅員は一人だけで、昼間は閑散と



写真1 伊予鉄道三津駅(平成17年6月12日撮影)



写真2 JR四国キハ58(平成17年12月6日撮影)

しています。乗り換えの路線がある訳ではなく、自動券売機は2台、改札口の通路は2本と、こじんまりしています。しかし、大変風格のある駅舎です。横幅は10m以上、奥行きは5mくらい、高さも5mくらいあるでしょう。向かって右半分は使用されていませんし、屋根は高く作っていますが、平屋建てです。眺めていると、ずいぶんかっこいい駅に見えてきます。全体的に洋風なデザインがシャレしています。なんと言っても歴史を感じさせてくれます。それもそのはず、日本で3番目の私鉄である伊予鉄道の最初の路線は、明治21年この駅とともに始まったのです。小説坊っちゃんにも登場する伊予鉄道は、松山の港であるこの三津と松山の中心部を結ぶために作られました。本州から来た人は三津で船から鉄道に乗り換え松山の街を目指しました。そして、廻船などで大変栄えていました。

写真の駅舎は、昭和6年頃に電化と同時に建設されたと言われていますが、当時の繁栄をよく示しています。駅舎は、船から上陸してきた人たちを迎えるような方向に建ており、「ようこそ松山へ」という心意気を感じ取ることができます。しかし、このような由緒ある駅舎ですが、駅前広場の配置変更のため平成20年度中には、撤去される予定です。

写真2はキハ58というディーゼルカーです。撮影場所はJR高松駅です。私が小学生から高校生時代、本屋さんで鉄道雑誌を立ち読みするのが、いい時間つぶしでした。その頃、四国国鉄の主役はディーゼルカーでした。昭和63年頃に瀬戸大橋の開通とともに初めて電化区間ができるまで、四国は電化率0という土地でした。その頃、関西地方に住み電

車しか見たことがなかった私は、ディーゼルカーの乗り心地に憧れていました。四国では、特急も急行もディーゼルカーです。郵便車は四国だけに存在する形式のディーゼルカーがあったほどです。写真のキハ58は、昭和30年代半ばに急行用車両として開発され、平成になり急行が特急に格上げされ運転されなくなると、鈍行列車として使用されました。40年以上に渡って、時には主役として、時には脇役として四国の野山を駆け巡ってきました。写真の列車は、高松発今治行きの鈍行列車です。運転区間全てが電化されているにもかかわらず、ディーゼルカーで運行というところが『さすが四国』とうなってしまう。

しかし、残念ながら平成20年3月15日のダイヤ改正でキハ58は運用されなくなっていました。

私は、自転車レースが好きでたまにイタリアやフランスのレースをテレビで見ます。首都からはなれた地域では、200年以上も建物や農地の様子が変わっていないんじゃないかと思うほど伝統的な風景が続きます。それに比べて日本人は、古いものを残さない傾向が強いように思われます。昔ながらの黒い瓦の町並みはほとんど失われてしまっています。これからは、地球温暖化防止や末永く子孫が繁栄するために、大量生産大量消費から有限な資源をできるだけ長く使っていく時代になります。全ての古いものを格好悪く思わないでください。古いデザインの服が格好よく見えたり、古い家具や雑貨がアンティークとして扱われる場合もあります。電化製品だってすぐに捨ててしまわず、直して使うことがあってもいいでしょう。『いいものを長く使う』そんな気持ちを日本人が持ち始めてもいい頃ではないでしょうか。しかも、その持ち物が自分の過去を語ってくれていると、とてもおしゃれに感じます。農学部や工学部出身の私たちがそんな気持ちを持って仕事や生活をし、先輩たちの肯定をしてみませんか。同窓生が暮らしやすくなるかもしれません。モノを未来へ伝えることが役目の博物館学芸員として13年近く働いた者が感じるこれからの過去です。

支部の同窓会

松丸 勝二（農学S37）

本県の支部の同窓会の会員は、おおむね

- ① 県内に就職しているまたはしていた人で県内に在住している人。（以下定住者という。）
- ② 転勤で現在は県内に在住している人
- ③ 転勤で県内に在住し、退職後もそのまま在住している人
- ④ 勤務先は東京など県外であるがまたはあったが、県内に移住してきた人
- ⑤ 県内に在住しているが、勤務先は東京など県外であるかまたはあった人

などに大別される。

本県には、日立製作所を中心とする企業群、東海村、大洗町、那珂市を中心に立地している原子力産業、鹿島臨海

工業地帯に加え、国の大部分の試験研究機関が集積し、関連する民間の試験研究施設や事業所を加えると約300を数え、1万7千人の研究者を擁し、今や世界的な科学技術の拠点となっている筑波研究学園都市が建設された。この中には、国の農林関係の試験研究機関が集積している農林団地があり、その周辺部には、関係する団体や民間企業の試験研究施設などがある。

また、本県が東京に近いことに加え、1985年、つくばでの国際科学技術博覧会開催で、道路交通網の整備などが促進されたことにより、民間企業の県内工業団地などへの進出が増加した。

さらに、東京およびその周辺部より県内の地価が安い、交通の便が良くなったなどから県南部などへの移住が多くなっている。

2005年には秋葉原駅からつくば駅間を最短45分で結ぶ高速鉄道「つくばエクスプレス」が開通し、沿線の県内駅周辺にマンションや住宅団地が建設されるなどにより人口の集積が進んでいる。

この様な状況から、転勤や移住などにより数多くの同窓生が県内に在住するようになった。また、これからも増加が予測される。

しかし、②③④⑤（以下転勤者等という。）の人達へ支部の同窓会開催の通知を出しているが、出席は皆無に近い程少なく、定住者の人達が中心となり開催しているのが実情である。

転勤者等の人達は、「多忙で、茨城を知りたいとか楽しみたいという余裕がない。」「どうせ茨城に居るのは、2～3年で他所へ行くのであるから、または勤務は他県であるなどで茨城には余り関心がない。」などの理由から支部の同窓会には出席しないのではないかと推察される。



木版画 恩田 秋夫

しかし、定住者の人達は、県内のどこにいい場所があるか、どこへ行ったら、どのような体験が出来るか、どこへ行ったら、どのような情報が得られるかなど少なくとも転勤等の人達より茨城に関する情報量は多い。

支部の同窓会は、2年に1回で、しかも休日の土曜日から日曜日の昼食時間をはさんで、会員相互の交流と親睦を深めることを目的に開催しているので、転勤者等の人達が出席出来ない時間帯ではないと思っている。

転勤者等の人達には、茨城に在住する折角の機会と思って、是非出席して頂き、定住者の人達と親睦を深めて頂くと同時に茨城に関するいろいろな情報を得ることにより茨城についての思いを強めて頂きたいと願っている。

一方、定住者の人達にしても、全国的に幅広く活躍している転勤者等の人達から新しい情報が得られなどにより支部の同窓会に出席する楽しみがふえるはずである。

この様に、転勤者等の人達が出席することによって相互に情報を分かち合うことが出来、また親睦の輪が広がり、支部の同窓会はさらに充実した会になってくるのではないかと考えている。

転勤者等の皆様には、是非支部の同窓会に御出席をお願いするとともに、これから県内に転勤か移住等で在住するようなことになった同窓生には、下記に御一報頂ければ幸いです。

- ・支部連絡員 鈴木 要至
茨城県農林水産部 園芸流通課 TEL 029-301-3945
- ・支部長 松丸 勝二
茨城県笠間市旭町80-33 TEL 0296-77-4546

緑と花と彫刻の博物館の紹介

武永 順次 (元教員)

農学部FSセンターを退職し山口の郷里に帰郷してはや7年が過ぎました。その後、宇部市の常盤公園に『緑と花と彫刻の博物館』（通称、ときわミュージアム）で植物担当の副館長として新分野で緑と彫刻との融合性を市民の目線に苦慮しています。

同公園は山口宇部空港に隣接して総面積が200haのうち常盤湖100haは農業用水として江戸時代に築堤され今日に至り、市民の憩いの公園として湖畔の遊歩道は約7kmのうちウッドロードが設けられ多数の方が散策されています。また、都市公園として『日本都市公園100選』・『さくらの名所100選』・『美しい日本の歩きたくなる道500選』に選ばれるなど風光明媚な淡水湖と森に野鳥と渡り鳥が約1,500羽前後が飛来し、ペリカンの『カッタ君』は全国的に知られています。

『緑と花と彫刻の博物館』の発祥と変遷は旧サボテンセンターが基となり平成3年9月27日の19号台風で同施設が崩壊しました。後に、公園のシンボリックな施設として熱帯植物館にラン室、サボテン室、熱帯植物室に花木、果樹、観葉植物及びヤシ類を展示した総合的な施設として平成7年

4月1日に開館しました。また、同館に植物友の会を設け植物に関する情報と技術及び苗の交換などを目的とした支援の組織があります。改組により表記の『緑と花の彫刻館』は山口県の認定により平成19年9月に開館しました。

当館の目的と行事の概要は各植物の展示と種の保存に努め、植物の特性を説明する掲示並びに新植物の探索と収集の保存及び栽培技術の開発と普及に努め、植物に関する講習会と講演会及び相談会を設け、新聞とテレビ取材への対応など情報の提供と電話の問い合わせなどのサービスに対処しています。

館内のバイオテクノロジーは各植物の増殖と新技術の開発に努め、一般からバイテクの体験コーナーは成人と小中学生を対象に体験学習会を設け参加者を募り盛況の状況です。

特に、熱帯植物の特徴は花と果実の形状及び色素は変化に富み、表面から多様な芳香物質の揮散は人々の視覚、嗅覚、味覚、触覚及び聴覚など五感への感性が高揚し心身が癒される現象が見られる。また、果実は健康に有益な栄養成分を多く含み、ポリフェノール成分は活性酸素を抑制する抗酸化作用で注目されています。

以上、植物物体に含まれる有益な機能性と抗菌物質等を究明するため共同研究を開始しています。

市内の楠町教善寺に自生する山茶花は大学に在職中『サザンカの品種分化に関する史的考察』（1974年）の研究報告で樹齢が約450年と推定し、わが国で三番目に古い株と認定した（箱田直紀、武永順次、松本正雄）。以降、広島県庄原市月貞寺のサザンカ（推定樹齢1000年）と埼玉県深谷市郷原のサザンカ（推定樹齢600年）の二株が枯れ、現存する教善寺のサザンカがわが国で最も古い樹であることが推定される。

現在、宇部市の天然記念樹を山口県の天然記念樹に推薦するため教育委員会の文化振興課で審査手続きを進めている状況です。郷里のサザンカが文化的な価値と遺伝資源の保存と活用にも携われることに感謝しています。

地域に根ざした『緑と花と彫刻の博物館』は、生物の先端的なテクノロジーの展開と多様な植物が成長する過程の観察と体験できるフィールドワークが求められている。



退職者のご挨拶

応用生物科学科

安部 浩

本学にて新任教務職員として就任し、この3月で定年退職を向えた。転職することもなく38年余り、農薬科学の研究と教育一筋に打ち込めたのも、研究室スタッフ、大学院生、学部生、さらに共同研究に携わった学内外、国内外の人々の協力のお陰である。研究室は、植物防疫学科設立当初の農薬製造化学（佐藤六郎教授）から、農薬化学（内山正昭教授）、そして生物制御化学と名称変更を辿りながら、平成2年に第3代教授となった。

教授になって18年間、研究室は学生および共同研究員を加えると、常に20～30名の所帯となり、設立当初に比べ非常に恵まれた研究教育体制ができ、学生が互いに切磋琢磨しあえる環境が生まれた。それが良い研究と教育の実績に繋がったと思う。

研究教育成果のみならず、この38年の間に言い尽くせぬ沢山の成果が人間関係で生まれた。人間的触れあいが育んだ農工大の素晴らしい伝統である。情報化時代にあって社会環境が変化しても、良き伝統を減ずることなく本学が発展することを心より祈念するとともに、人生の大半を過ごす機会をいただいた東京農工大学に心から感謝を申しあげる。

地域生態システム学科

渡邊 兼五

このたび、約38年間の教員生活を終えて定年退職することになりました。

私が昭和45年1月に九州大学大学院の博士課程を中退して、東京農工大学に赴任した当時は、学園紛争の嵐の真っ只中で大学は疲弊した環境に喘いでおりました。そのような、研究・教育設備も不十分な状況の中にありながら、大過なく、一応の成果を上げることが出来たのは、偏に先輩ならびに同僚教員のご支援と、優秀な学生諸君とともに研鑽を積んだお陰と感謝しております。

最後になりましたが、東京農工大学のますますのご発展を祈念致しまして、退職のご挨拶とさせていただきます。

地域生態システム学科

里深 文彦

早いもので、あっという間に、この4年間が通り過ぎたような気がします。

ヨーロッパでの長い研究者生活にピリオドをうち、長い学究生活のしめくくりを、ここ農工大学でやらせていただいたことは、この上ない喜びでした。

又、この時期は、大学が法人化され、未曾有の経験を味わった節目にあたり、“よき大学時代”と“激動の大学変革”が、走馬灯の如く、私の目に映っています。

今後は農工大にとって安定した、時代が到来することを望んでいます。

環境資源科学科

久野 勝治

私が勤務したのは農学部蚕糸生物学科の桑葉生理生態学研究室でした。初めて、木本植物のクワの栽培学や生理学の教育・研究に携わりました。その種類は何百種もあり、一通り理解するには数年を要しました。幸い、本学には約百種類の品種が揃っていて大変役にたちました。まだ、緑のどかな圃場の中に桑園はあり、色々な植物を観察するのは職務を越えて密かな楽しみでした。その後、2回の改組を経て環境科学の教育・研究に携わるようになり、ドクターコースの学生に加え、新たにスタッフに渡邊泉氏を迎え、年々その内容は充実していく最中定年を迎えるに至りましたことは大変幸いなことと感じております。これも、先輩諸先生を初め、多くの方々に支えて頂いたおかげであり、心より感謝の意を表します。また、東京農工大学同窓会にはブラジルで開催されましたアース・サミットに参加する際に多大のご援助を頂きました。改めて感謝の意を表します。

環境資源科学科

瀬戸 昌之（植防院 S44）

植物防疫学科で学生時代を過ごし、環境保護学科で教員時代を始め、現在に至りました。教育・研究は環境科学とりわけ環境微生物学が中心でした。無い無いづくしの研究室時代が長かったが、手作りの装置や工夫で乗りこえてきました。これができたのも熱意のある学生諸君が常に参加してくれたからです。彼らの成果は学術誌、単行本の発行、そして社会への応用をつうじて世に問うてきました。

今後は、循環型社会へ向けた科学技術の成果を、専門外の人々にもわかりやすく説きながら、出版や講演を展開してゆきます。また、すでに手がけている環境関連の諸団体

との連携を強め、卒業生を含めて全国的なネットワークを構築してゆきます。

長い間、ありがとうございました。

生物システム応用科学府

堀尾 正靱

1982年7月、まだ草深い農工大小金井キャンパスの工学部(資源応用化学科)助教授として名古屋大学から赴任しました。もともと、父母は荻窪の八幡社で結婚式を挙げており、私にとっては懐かしい場所でした。その後、資源応用化学科、物質生物工学科、生物システム応用科学研究科など、小金井キャンパスを舞台とした異分野連携や再編の中で、たくさんの刺激をいただきながら、石炭利用技術、流動層、各種反応プロセス、離散粒子モデル、バイオマス、生存科学COEなど、多様な研究をしました。大学運営では、正門ゲートの設置、標語「MORE SENSE」策定の学長諮問委員会、全学改組のための部局化WGの取纏めと2度にわたる文部科学省説明などが忘れられません。その間、月見の会、自然環境研究会(15年ほど前はよくアミガサダケが出ました)、小金井蛙新聞社など、学生諸君ともいろいろな企画をしました。BASE設立時に、若手の彫刻家本間広基さんの「手のひら」を選んで本館前に設置し、さらに宮田清蔵先生、小畑秀文先生と資金を出し合って、同君の「今、あの頃、いつも」をBASE本館南側入口前に設置したのも、楽しい思い出です。

電気電子工学科

高橋 雄造

1980年1月から本学に奉職し、それまでの中央大学と通算して大学教員生活37年になります。何ごとも学生のため、公明正大を心がけて勤務してまいりました。長いあいだ御指導・御鞭撻を下された方々に、ここにお礼申し上げます。学会誌論文や著書など70本近く書きましたし、好きな研究ができました。前任校から移ってあまりのちがいに驚愕したのが、心を引き締めることになりました。前任校の恵まれた条件では、小生の研究は形成されなかつたにちがひありません。中央大学と東京農工大学の両大学に感謝しなければなりません。サポートして下さった事務の方々にもお礼申し上げます。

農工大での28年に思い残すことがないわけではありません。学科(電気電子工学科)に農工大OBの優れた先生がほとんどいないのが残念です。愛校心のあるOBと小生ら"助っ人"とでは学生から見た影響力がちがうはずで、OB教員は絶対に必要です。愛校心と同窓会組織は世界の一流大学の条件であると言われる。日本の有力国立大学はこの意味ではダメで、私立大学のほうがずっと上です。我が農工大はまあまあでしょうか。識見、研究とも優れた人材を学生・OBから発掘し育てて我が学科の教員とすべく相当に努力

しましたが、結果は出ていません。学生が愛校心を持たず、農工大での何年間かをどこの大学でもよくってただ通過すればよい一過性の時としてあとで何も思わないとしたら、良い職場だったと退職時に教員が満足してはいられません。この点、悔いがあります。

機械システム工学科

望月 貞成

東京農工大学には35年10ヶ月お世話になりました。長いようですが過ぎ去ってみるとあっという間でした。その間いろいろございましたが、今振り返ってそれを一言で総括するならば、「充実した楽しい年月であった」といえます。これも、先輩および同僚の教職員ならびに学生諸君のおかげと心より御礼申し上げる次第です。

その間、東京農工大学は目覚ましい発展を遂げました。例えば機械工学科は、着任当時わずか4講座(教授、助教授、助手および技官各1名で1講座を構成)でしたが、その後、講座増や生産機械工学科、機械システム工学科の新設を経て、現在それらが統合された機械システム工学専攻においては、学科会議の構成員は36名を数えるにいたっています。

少子化に伴い最近の大学は拡大どころかむしろ縮小の方向にすらあるようですが、東京農工大学は小規模ながらその質的内容には非常に高いものがあります。その特徴を活かし今後ますます発展することを祈念してやみません。

機械システム工学科

吉田 豊明

私は農工大が法人化され、大学院基軸大学となった平成16年4月に赴任しましたので、4年という短い期間のご奉公でした。それまでは航空宇宙技術研究所(現JAXA総合技術研究本部)に勤務していましたので、大学においては講義と学生の研究指導が大変新鮮で、責任の重さを感じつつ、充実した生活を過ごさせていただきました。

機械システム工学科の教員の皆様は、学科規模が大きいかかわらず、全体がよい雰囲気でもとまっています、研究・教育に切磋琢磨しているという感じ、その一員であることを誇りに思っていました。平成18年度、学科長/専攻長を仰せつかったのは私にとって大変重い役であり、緊張と興奮の1年でした。なんとか役目を果たせたのは、関係の教職員、学生諸君のご理解とご協力があつたからこそであります。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

近年、農工大は研究力において国内有数の大学に発展し、注目されていることは喜ばしい限りです。学生のキャンパスライフを充実させる教育環境もよくなっていますが、なお一層の整備が望まれると思います。同窓会創立50周年、大学創基140年を目前にし、産学交流会館の建設が計画されていますが、その実現を大いに期待しています。

退職するにあたり、農工大の皆様へ深く感謝を申し上げますと共に農工大の今後益々の発展を祈ります。

情報工学科

南塚 隆夫

振り向けば 道朦朧に 花かすむ

今春の桜は温暖化のせいで、入学式ではなく卒業式の頃に満開となりましたが、私もその頃に30年間勤務した農工大を定年退職で去ることとなりました。府中キャンパスの旧一般教育部(現学生部)事務棟南側に植わっている記念樹のそばにある立札に、

送らるる 身に軽々と 春衣 (福本日陽)

の句を見つけて、私も一句ものしてみました。とても福本先生のようにはいきません(出来栄も実体も)。

私は1978年にさる私立の女子大学の文学部英文学科から転任してきましたが、まさかここで定年を迎えることになろうとは、着任当時思ってもいませんでした。私の専門はアメリカ文学で、在職30年の半分以上は一般教育部で英語を教えてきました。国の方針で国立大学の教養部廃止以後は、工学部情報コミュニケーション工学科に所属して、教養英語のほかに文化・コミュニケーション方面の教育にも携わってきました。私の学生時代、イギリスの原子物理学者兼小説家でもあったC.P.スノーがケンブリッジ大学で行った「二つの文化」(1959)という講演が一時期内外で話題をまき、「文科」と「理科」の融合が叫ばれた時代でもありました。それから半世紀後の今日、先端科学に見るように学問はますます細分化し、クローン生物、臓器移植、そしてまた万能細胞等々、特に医学方面での科学と「倫理」が喫緊の問題になり、またもや文科と理科の融合が再認識され、各方面でその試行が始められています。農工大でもまことにささやかながら、学科改組で「情報コミュニケーション」工学科を創設し、その一端の実験をスタートしましたが、残念ながら10年足らずで新学科はあえなく頓挫してしまいました。文科と理科の融合が口で言うほど生易しいものでないことを、私は身をもって体験させてもらったと思っています。

文系の世界では「無用の用」ということをよくいいます。文学のようなものを大学で「研究」して何になるの？と、よく人から尋ねられ、また自問しても来ました。でも「無用の用」とは、リベラルアーツ(教養)教育の根底をなす精神ではないか、と最近痛感するようになりました。今日学んだことが明日すぐに目に見えるような形で「役に立」たなくても、それは何かの形でその人の後の精神形成と判断・行動の根底となって甦るものなのだ、と信じたいものです。世の中、なんでも即刻または短期的に目に見えて目覚ましい効果と結果を期待され、市場原理主義が横行しつつある今日、これが実学をモットーとする本学で理系の世界に身を置いてきて得た私の確信になりつつあります。

これからは農工大の希望に満ちた輝かしい新たなる発展を、学外から期待を込めて静かに見守らせていただきます。

応用分子化学科

鈴木 健之

本学に奉職して30年、あと数日で定年退職となる。ここに至るまで実に多くの教職員と学生の助けを得た。お世話になった方々に深く感謝する。専門は材料科学、特にセラミックスの合成である。酸化物融体のガラス化と急冷帯の特性、イオンビームスパッタ装置の作製と超薄膜の堆積、液中および液面上プラズマの発生と材料合成への応用などで暗中模索ながらも楽しく過ごすことができた。目標とは程遠い成果で終わった学生には、指導力不足で済まないことをしたと思っているが、予想外の展開で大きな成果を収めた学生もいるので帳消しにしてもらいた。今でこそ冷暖房完備の新1号館にいますが、50代の半ばまでは工業化学科棟で、冬の実験室を厚着で過ごし、夏は蚊に食われつつ暑さに耐えていた。自作装置で一杯だった鈴木研究室もすでに解体され更地になり、次世代の住人を待っている。これからは、各地に散らばる卒業生・修了生と共に、農工大の発展を見守っていこう。

物理システム工学科

岡田 利男

私は、学科の創設2年目から御世話になっている者として、退職に当たって一言ごあいさつさせていただきます。

学科創設の趣旨として「最近の科学技術の発展はきわめて急激である。このような技術革新の時代において、技術者研究者に必要なことは、既存の技術の単なる修得ではなく、むしろ常に科学技術の進歩に適合できる能力、独創性および広い視野を持つことである。このために、本学においては、工学系学問の根底としてもっとも重要な数学的、物理的素養とその工学的応用能力の育成とを主眼とした教育をおこなう場として「応用物理学科」を新設し、上記の社会的要請にこたえんとするものである。」と謳われています。学科名は創設当初の「応用物理学科」から「電子情報工学科」に改組され、現在では物理システム工学科となっています。本学科は当初から教員養成に力を入れ、高校の教師になった卒業生は過去35年間の間に約80名になっています。これまでに卒業生の高校の教師からは、推薦入学の際に優秀な学生の推薦をしていただき、卒業生と大学との良い関係を保っています。また、企業への就職に関しては、創設の趣旨である“工学的応用能力”を備えた学生へのニーズが高く、高い就職率を保っています。

これからもこの応用物理系学科の果たす役割は大きく、今後ともさらに本学科が発展することを期待しています。

平成19年度 同窓会学生援助事業報告

1. 学会発表 (251件)

農学部・農学部・連合農学研究科 (前期): 14件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	高島 正義	獣医学科	6年	コウジ酸のラット肝発がんプロモーションに対するアスコルビン酸の修飾作用	日本獣医学会
2	松本 明	獣医学科	6年	ジサイクラニルムのマウス肝発がんプロモーション作用によるラカンカ抽出物の修飾作用	日本獣医学会 日本毒性病理学会
3	安野 弘修	獣医学科	6年	ピペロニルプロトキサイド (PBO) のラット肝発がんプロモーション作用に対する羅漢果抽出物の修飾作用の解明	日本獣医学会
4	小島 拓磨	生物生産	M1	メロン幼植物体において水ストレス処理により誘導されるβ-アミラーゼ活性の解析	日本育種学会
5	鈴木 智子	生物生産	M2	RNAiによるアサガオでのアントシアニン合成酵素遺伝子の発現抑制	日本育種学会
6	伊藤 嘉奈子	応用生命化学	M2	三次元培養皮膚モデルの表皮構築ならびに基底膜構造形成におけるマトリックス分解酵素阻害剤の影響	第39回日本結核細菌学会学術大会 第54回マトリックス研究会大会 合同学術集会
7	杉本 真美	応用生命化学	M2	テネイシンCおよびX II型コラーゲン遺伝子発現に及ぼす張力負荷と細胞環境の影響	第39回日本結核細菌学会学術大会 第54回マトリックス研究会大会 合同学術集会
8	松本 直樹	応用生命化学	M2	シクロ/マルチデキストリン結合タンパク質と各種シクロデキストリン等との複合体の結晶構造解析	日本応用糖質科学会平成19年度大会
9	矢代 浩之	応用生命化学	M2	インプラナーゼの基質結合部位近傍に存在する糖鎖の役割の解明	日本応用糖質科学会平成19年度大会
10	川那部 亮	生物制御科学	M1	Diterpene Cyclase in the Liverwort and Moss	第19回国際植物生長物質会議
11	稲見 圭悟	生物制御科学	M2	トマトの植物体・根圏土壌から分離される <i>Fusarium oxysporum</i> の分子系統解析	第6回フザリウム研究会
12	勝又 卓己	生物制御科学	M2	<i>Arabidopsis</i> Cyp85a2 Catalyzes the Synthesis of 2-Deoxy-7-Oxalactone Type Brassinosteroids	第19回国際植物生長物質会議
13	菅井 佳宣	生物制御科学	M2	Enzymatic synthesis and 2D 13C-NMR analysis of fully 13C-labeled prenyl diphosphates	第19回国際植物生長物質会議
14	正木 俊平	生物生産	D3	イネ種子中のRNA結合タンパク質の生化学的解析	日本育種学会

(後期): 63件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	長部 茂幸	生物生産	4年	新潟県中部の沖積平野における水田の土壌特性値の変化	国際環境問題シンポジウム
2	名木 稔	生物生産	4年	ドメイン置換解析による <i>Candida albicans</i> ABCタンパク質基質認識メカニズムの解明	日本分子生物学会
3	坂本 真希	応用生物	4年	カイコガの免疫系に關するセリンプロテアーゼの探索	昆虫病理研究会
4	原島 裕子	応用生物	4年	受容体に高親和性を有したCry毒素変異体の進化分子工学的的手法による選抜	昆虫病理研究会
5	秋山 葉	地域生態システム	4年	都市近郊における外来種ナガミハナゲシの分布拡大と土地利用の関係	日本生態学会
6	市村 慶太	地域生態システム	4年	シオジで発生したてんぐ巣症状について	樹木医学会
7	桑田 なつみ	地域生態システム	4年	腐朽処理に樹木保存剤は有効か	樹木医学会
8	中島 亜美	地域生態システム	4年	標高によるミズナラ堅果成熟のフェノロジーのちがい	日本生態学会
9	野田 江里	地域生態システム	4年	西興部村における狩猟者育成事業が大学生の狩猟観に及ぼす影響	野生生物保護学会
10	馬場 花梨	地域生態システム	4年	トンガ王国におけるマングローブ林育成の現状と課題	日本森林学会
11	松山 奈央	地域生態システム	4年	千葉県におけるニホンリスの生息分布変化とその要因	日本生態学会
12	宮代 雅之	地域生態システム	4年	自転車走行中の障害物回避行動に関する実験的研究	日本人類行動学第42回大会
13	三好 貴之	地域生態システム	4年	森林小流域での渓流水質に影響を及ぼす諸要因の寄与度-1991年と2007年の調査より-	日本森林学会
14	深野 祐也	地域生態システム	4年	モンシロチョウの交尾拒否を引き起こす生体アミン	日本応用動物昆虫学会
15	渡辺 賢太	地域生態システム	4年	ナミテントウ斑紋型間の温度環境の違いによる適応度の比較	日本応用動物昆虫学会
16	橋本 絢乃	獣医	5年	チクシトゲアリ多産創設巣における女王蜂の餌交換行動	応用動物昆虫学会
17	雨貝 陽介	獣医	6年	イヌ肥満細胞腫における腫瘍化抑制標的分子の検討	日本獣医学会
18	石山 大	獣医	6年	サトウキビ抽出物 (Sugar Cane Extract) が Cyclophosphamide 接種マウスの免疫機能に及ぼす影響	日本獣医学会
19	伊藤 匡広	獣医	6年	ウマにおける血中プロラクチン濃度の周年変化	日本獣医学会
20	本山 聖子	獣医	6年	ネコにおけるフルオロキノロンのCYP1A1におよぼす影響	日本獣医学会
21	山本 ゆき	獣医	6年	雌ゾウのホルチン分泌パターンに関する研究	野生動物医学会
22	李 謙一	獣医	6年	Multiplex PCR法によるSalmonellaの生物型別	日本獣医学会
23	篠崎 良仁	生物生産科学	M1	葉の老化関連転写因子NAPの遺伝子ホモログは老化誘導期のアサガオ花弁で発現量が著しく増加する	日本育種学会
24	中村 嘉孝	生物生産科学	M1	Spatial Distribution of Soil Nutrients in Irrigated Paddy Fields of University Farm in Tokyo	第8回東東南アジア土壌科学連合国際会議
25	吉川 美穂	生物生産科学	M1	Influence of Anaerobically Digested Slurry Application on Ion Content in Percolating Water of Paddy Soil	第8回東東南アジア土壌科学連合国際会議
26	青海	生物生産科学	M2	シバ草地における牧草中成分含有率とルーメン内容液性状の関係	日本草地学会
27	安達 悠	応用生命化学	M1	Analysis of the mechanism for regulating T cell activation or unresponsiveness	日本免疫学会
28	小賀田 拓也	応用生命化学	M1	タバコNtERF3遺伝子の一過剰発現による植物過敏細胞死の誘導	日本分子生物学会
29	田村 一二	応用生命化学	M1	放線菌 <i>Corynebacterium glutamicum</i> 由来アリアリダーゼの発現系の構築と性質の解析	日本農芸化学会
30	松本 雄治	応用生命化学	M1	<i>Aspergillus niger</i> 由来プロセシングα-グルコシダーゼIの発現系構築	日本農芸化学会
31	綾野 里美	応用生命化学	M2	タンパク質工学的的手法を用いた糖鎖結合型バイオハイブリッドの創出によるβ-ラクトグロブリン (BLG) の機能改変	日本農芸化学会
32	オヨン	応用生命化学	M2	可食性バイオハイブリッド創出による乳タンパク質の機能改変	日本農芸化学会
33	鳴原 裕子	応用生命化学	M2	Influence of affinity between antigen and BCR on IgE class switching	日本免疫学会
34	小口 孝裕	自然環境保全学	M1	ヒノキ細根の密度による呼吸活性の違い	日本森林学会
35	笠原 綾	自然環境保全学	M1	コナラ二次林における長期的な落葉採取は地力に影響するのか?	日本森林学会
36	ル シャオチャン	自然環境保全学	M1	中国カルスト地域での生態的に安定した原生林の植生と土壌	日本森林学会
37	鈴木 晴美	自然環境保全学	M1	多摩川中流域の農業用水路における水生植物の分布と生育環境	植生学会
38	佐々木 龍一	自然環境保全学	M2	ヤシャブシおよびハノキ苗の窒素固定能と光合成	日本森林学会
39	山崎 智彦	自然環境保全学	M2	広域避難場所における樹木の防火力評価手法の検討-東京都中野区を例として-	日本自然災害学会
40	浦山 俊一	生物制御科学	M1	RNA干渉関連遺伝子ノックダウン株におけるイネ内在性2本鎖RNAの解析	日本植物生理学会
41	金屋 明宏	生物制御科学	M1	過剰発現植物を用いたシロイヌナズナDRBファミリー二本鎖RNA結合タンパク質の機能解析	日本植物生理学会
42	川那部 亮	生物制御科学	M1	苔類ツツソイゴケにおけるジテルペン環化酵素	植物化学調節学会
43	丸田 五月	生物制御科学	M1	T-DNA挿入変異体を用いたシロイヌナズナのタンパク質脱リン酸化酵素タイプ2C(APC4)の機能解析	日本植物生理学会

44	勝又 卓己	生物制御科学	M2	<i>Pichia pastoris</i> によるブラシノステロイドを中心とした植物ホルモン生成 P450 酵素類の機能解析	植物化学調節学会
45	菅井 佳宜	生物制御科学	M2	酢酸を出発原料としたゲラニルゲラニルニリン酸の酵素的合成	植物化学調節学会
46	戸金 悠	生物制御科学	M2	Neuronal Cell Death in <i>Drosophila</i> Optic Lobe Cells That Failed to Get Retinal Innervation	20th European <i>Drosophila</i> Research Conference
47	富澤 悟	生物制御科学	M2	形質転換カラスを用いた塩生植物アイスプラントのタンパク質脱リン酸化酵素の機能解析	日本植物生理学会
48	鹿島 裕之	農業環境工学	M1	水素発酵に用いる嫌気性マイクロフローの優占手法の検討	廃棄物学会
49	久住 朝子	物質循環環境科学	M1	Autotrophic sulfur oxidation and phylogenetic characteristics of bacteria isolated from deteriorated stone in Angkor site, Cambodia	日本微生物生態学会
50	Adeeba Hussein	物質循環環境科学	M2	A newly isolated thiocyanate degrading enzyme of mixotrophic bacterium strain TH1201	日本農芸化学会
51	那須 三恵	物質循環環境科学	M2	土壤細菌 <i>Mycobacterium</i> sp.TH1401 株の硫化カルボニル分解とその酵素	日本農芸化学会
52	金子 真	連農 生物生産	D2	異なる草高で維持したシバ放牧草地の植生の推移	日本草地学会
53	金海蘭	連農 環境資源共生	D1	薬品添加による紙の低密度化と空隙構造の変化	日本木材学会
54	小坂井 千夏	連農 環境資源共生	D1	アクティビティセンサーによるツキノワグマの行動解析	日本哺乳類学会
55	若原 妙子	連農 環境資源共生	D1	マレーシア・ランピルヒルズ国立公園における降雨流出特性	日本森林学会
56	加藤 広海	連農 資源・環境	D2	Carbonyl sulfide (COS)-degrading activity and phylogenetic identity of the bacterium I isolate from the MPN for counting COS-degrading microbes in soils	日本微生物生態学会
57	田野	連農 資源・環境	D2	長江上流のカルスト地域における森林土壌系での窒素動態	日本森林学会
58	小池 伸介	連農 資源・環境	D3	山梨県御坂山地におけるツキノワグマの食性とその長期的な変動	日本哺乳類学会
59	橋 昌利	連農 生物学	D3	Property and Phase Diagram of Ringing Gel in Oil/Water/Surfactant System	Asian Thermophysical Properties Conf
60	谷田部 然治	連農 生物学	D3	Onion Formation Process of Oil/Water/Surfactant System Under Shear Flow	Asian Thermophysical Properties Conf
61	宮下 佳奈	国際環境農学	M2	哺乳動物細胞を用いたサポウイルス様粒子の発現	日本ウイルス学会
62	山本 真民	国際環境農学	M2	サポウイルス粒子形成機構の解析	日本ウイルス学会
63	Dariouh ALIDOUST	連農 生物生産	D3	Distribution of a few kinds of heavy metals in the rhizosphere soils of <i>Crotalaria juncea</i>	日本土壌肥料学会

②工学部・工学府（前期）：45件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	内川 明日香	生命工学	M1	変異導入によるリパーゼのフォールディングに与える影響	日本生物工学会 2007 年大会
2	熊谷 文範	生命工学	M1	Zinc finger 蛋白質 Sp2 を用いた <i>Legionella pneumophila</i> strain Philadelphia1 特異的な PCR 産物の検出法	第 34 回核酸化学シンポジウム
3	清水 仁美	生命工学	M1	小型化電極を用いた直接電子移動型グルコースセンサーの構築	2007 年電気化学会秋季大会
4	葉梨 拓哉	生命工学	M1	無隔壁型酵素燃料電池の開発	2007 年電気化学会春季大会
5	森田 陽	生命工学	M1	PQQGDH 活性を指標にした Aptameric enzyme subunit による標的分子検出系の構築	第 5 回国際核酸化学シンポジウム
6	山下 有紀	生命工学	M1	FAD グルコース脱水素酵素の基質特異性の改良	日本生物工学会 2007 年大会
7	亀屋 美穂	生命工学	M2	フルクトサミンリン酸化酵素を用いる糖化蛋白質検出法の開発	日本生物工学会 2007 年大会
8	金 志勲	生命工学	M2	ピロロキニンキノン (PQQ) による α シヌクレイン細胞毒性の低減	蛋白質学会
9	小林 雅樹	生命工学	M2	ピロロキニンキノンおよびその誘導体によるアミロイド線維形成タンパク質の線維化抑制	日本生物工学会 2007 年大会
10	庄司 清文	生命工学	M2	TAT 経路を用いる FAD 酵素分泌生産用組み換えベクターの開発	日本生物工学会 2007 年大会
11	高瀬 まどか	生命工学	M2	PQQGDH 阻害活性を持つ DNA アプタマーの探検及びその応用	第 5 回国際核酸化学シンポジウム
12	中山 大輔	生命工学	M2	燃料電池型ワイヤレスグルコースセンサーを用いた生体内連続グルコース測定	第 46 回日本生体医工学会
13	長谷川 聖	生命工学	M2	アプタマープロベティングによる VEGF165 に対する DNA アプタマーの探索および特性検討とその応用	第 5 回国際化学シンポジウム
14	赤松 俊介	応用化学	M1	ラセミ化合物を作る系の異性化反応速度の定量的な解析	分離技術会年会 2007
15	天池 岳大	応用化学	M1	グリシンの溶液媒介転移に対するマイクロ波の影響	分離技術会年会 2007
16	岡 央路	応用化学	M1	ジアルールアミドホスフィン配位子を有する新規鉄錯体の合成	日本化学会第 87 春季年会
17	熊澤 宏枝	応用化学	M1	含窒素基を連結ユニットとするカルバゾンポリマーの合成と有機 EL 素子への応用	高分子学会
18	湯ノ口 智恵	応用化学	M1	遷移金属錯体を用いた炭素-水素結活性化による精密高分子反応	第 56 回高分子学会年次大会
19	吉澤 省吾	応用化学	M1	メカノケミカル法によるグリシンの多形転移に関する速度論的検討	*ポスター発表学生賞* 分離技術会年会 2007
20	餘外 拓哉	応用化学	M1	超臨界急速膨脹法を用いた有機物微粒子の連続製造操作	分離技術会年会 2007
21	大竹 達也	応用化学	M2	N-ヘテロサイクリックカルベンのトリエチルボラン付加体を用いたイリジウムカルベン錯体の合成	日本化学会第 87 春季年会
22	鈴木 ひかり	応用化学	M2	Ab initio calculation of decomposition GaN(0001)and(000-1)Surfaces	The 15th Int.Conf.on Crystal Growth
23	彈塚 康平	応用化学	M2	メカノケミカル法による固溶体の作成	分離技術会年会 2007
24	中島 大輔	応用化学	M2	嵩高い脂環基によって側鎖修飾した機能性スチレン系共重合体の合成及び光学特性	第 56 回高分子学会年次大会
25	橋本 直司	応用化学	M2	Copolymerization of Methacrylate and Olefins Via Clay Catalyst	5th International workshop on Heterogeneous Z-N Catalysts
26	加藤 波里	機械システム工学	M1	分光偏光変調器を用いた複屈折・施光同時計測法	Optical Society of America
27	森谷 知寛	機械システム工学	M1	アレイ型超音波センサによる金型内樹脂状態の可視化に関する研究	プラスチック成形加工学会
28	磯部 英司	機械システム工学	M2	仰臥位姿勢における褥瘡好発部位の応力解析	日本機械学会
29	佐野 貴広	機械システム工学	M2	百色スペーサ干渉法と HSV 色空間を利用したすきま測定 (色相・すきま校正手法の開発)	(財)日本トライボロジー学会
30	芝宮 孝	機械システム工学	M2	百色干渉輝度値を用いた無潤滑往復動下の真実接触部解析	(財)日本トライボロジー学会
31	金箱 翼	電気電子工学	M1	高密度指向性表示を行う時分割表示モジュールの基礎実験	映像情報メディア学会
32	今井 悠介	電気電子工学	M2	複数のデプス情報を用いたカメラアレイによる指向性画像の生成	映像情報メディア学会
33	荻野 拓海	電気電子工学	M2	Nanoscale Patterning of Si Surface Using SPM Scratching	Int.Conf.on Nano Sci. & Tech.
34	萱嶋 祥	電気電子工学	M2	Wide-Range Control of Tunnel Resistance on Metallic Nanogaps Using Migration	Int.Conf.on Nano Sci. & Tech.
35	菊田 健悟	電気電子工学	M2	SVGA 解像度 128 指向性ディスプレイの画質改善とインタラクティブ表示	3次元画像コンファレンス 2007
36	坂本 祥	電気電子工学	M2	湾曲スクリーンを用いた立体表示の研究	映像情報メディア学会
37	藤岡 正樹	電気電子工学	M2	モバイル用 30 指向性ディスプレイへの空間ポインティングの導入	3次元画像コンファレンス 2007
38	阿部 公一	生命工学	D1	In silico panning 法によるノイラミネダーゼ阻害剤の探索	日本蛋白質科学会
39	大澤 祐子	生命工学	D1	Development of simple and rapid detection method of pathogenic bacteria using Zn finger protein	Biodetection technology 2007
40	小笠原 大輔	生命工学	D2	Aptamer を用いた新規 Bound/Free 分離法の開発とその応用	日本生物工学医会
41	小林 夏季	生命工学	D2	α シヌクレイン部分ペプチド-PQQ 複合体による α シヌクレイン線維形成阻害	日本生物工学会 2007 年大会
42	吉田 亘	生命工学	D2	Aptameric enzyme subunit を用いたイムノグロブリン E の検出法の開発	生物工学会
43	藤井 望	応用化学	D1	機能性ポリマレート主鎖近傍にキラリティーを有するポリメチレン型液晶	高分子学会
44	薛 伯勇	応用化学	D2	Synthesis and Radical Scavenging Ability of New Polymers from Sterically Hindered Phenol Functionalized Norbornene Monomers via ROMP	5th International workshop on Heterogeneous Z-N Catalysts
45	西村 信也	電子情報工学	D1	Tapping Mode SPM Local Oxidation Nanolithography with Sub-10 nm Resolution	Int.Conf.on Nano Sci. & Tech.

(後期): 92件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	富成 司	生命工学	4年	ナリンジンが骨代謝に与える影響	日本生化学会
2	小峯 秀幸	応用分子化学	4年	カチオン性ロジウム/BINAP系錯体触媒を用いた[2+2+2]付加環化反応によるジベンゾフラン誘導体の合成	日本化学会第88春季年会
3	高橋 義博	応用分子化学	4年	カチオン性ロジウム/BINAP系錯体触媒を用いた[2+2+2]付加環化反応による軸不斉N-アリールピリドンの合成	日本化学会第88春季年会
4	田中 理絵	応用分子化学	4年	カチオン性ロジウム/BINAP系錯体触媒によるアシルホスホネートを用いた[2+2+2]及び[4+2]付加環化反応	日本化学会第88春季年会
5	木内 智	機械システム工学	4年	摩擦攪拌形パニシングによる表面改質(第3報)・改質層の特性に及ぼす加工条件の影響	精密工学会
6	坂田 昌哉	機械システム工学	4年	昆虫の生体組織を用いた微小生命機械システムの創製	第25回日本ロボット学会
7	田辺 実葉	機械システム工学	4年	光弾性変調器を用いた反射型の偏光計によるナノ構造評価	精密工学会
8	小迫 健太郎	電気電子工学	4年	HDD立体表示の理想撮影条件と垂直画像歪みの評価	立体映像技術・情報ディスプレイ合同研究会
9	高橋 晶子	電気電子工学	4年	熱電対による太陽電池モジュールの温度測定方法	日本太陽エネルギー学会
10	前田 修平	電気電子工学	4年	シリコン基板におけるa-Si:H膜のパッシベーション効果(2)	応用物理学会
11	遠藤 司	情報コミュニケーション工学	4年	SVMを用いた時変複素音声分析による曲調解析	電気学会 産業計測制御研究会
12	鈴木 聡	情報コミュニケーション工学	4年	画像による質感解析手法の検討	電気学会 産業計測制御研究会
13	富田 洋平	情報コミュニケーション工学	4年	Analyzing the effects of Animal Assisted Therapy by the EEG	MJISAT2007
14	中村 泰行	情報コミュニケーション工学	4年	ハチ目の性決定システムを取り入れた遺伝的アルゴリズムの提案	電子情報通信学会
15	畑山 康治	情報コミュニケーション工学	4年	EMDとGAを用いた音声圧縮	信号処理シンポジウム
16	山中 景介	電子情報工学	4年	太陽電池日射障害における半影の影響	日本太陽・風力エネルギー学会
17	上田 紗織	生命工学	M1	Synthesis and Properties of Polyimide Gels containing Alkyl Sulfonate type Ionic Liquids	2nd Int. Congress on Ionic Liquids
18	大石 章二	生命工学	M1	MagSN i Per法を用いた嫌氣的脱塩素化に関わる <i>Dehalococcoides</i> 属細菌の定量分析	日本生化学会
19	奥村 将直	生命工学	M1	がん細胞の増殖に対する活性型ビタミンD3の抑制効果と作用機序の解析	日本生化学会
20	河野 雄樹	生命工学	M1	Chiral Stability of Ionic Liquids derived from Amino Acids	2nd Int. Congress on Ionic Liquids
21	牛頭 峰一	生命工学	M1	OPRM1 遺伝子多型(A118G)の Allele specific な遺伝子発現量解析技術の開発	日本生化学会
22	小林 愛	生命工学	M1	ヒアルロン酸による骨細胞に対する生物活性の検討	日本生化学会
23	山東 佑輔	生命工学	M1	癌の骨転移と骨破壊に対するEP4アンタゴニストの効果	日本生化学会
24	辻 優希	生命工学	M1	Improved ionic conductivity of multivalent anion-based proton conductive ionic liquids by mixing with low viscous ionic liquids	2nd Int. Congress on Ionic Liquids
25	林 賢作	生命工学	M1	室温でセルロースを溶解する高極性イオン液体・多糖類の溶解に要求されるカチオン構造	高分子学会
26	増田 莉恵	生命工学	M1	蛍光プローブを用いたGroup II型シャペロニンのhelical protrusionの動的解析	日本生化学会
27	萬 麻衣子	生命工学	M1	μ -opioid 受容体OPRM1の酵母による発現	日本生化学会
28	牛奥 修三	生命工学	M2	低温適応化シャペロニンの機能解析	日本生化学会
29	金子 綾子	生命工学	M2	Direct electrochemistry of amicyanin derived from <i>Parcoccus denitrificans</i> immobilized on a electrode via a phenylglyoxal derivative	13th Int.Conf.on Biological Inorganic Chemistry
30	芝岸 紗緒莉	生命工学	M2	ボラン-アミン錯体を用いた高分子電解質の作製とその伝導特性	繊維学会
31	杉浦 博英	生命工学	M2	揮発性有機塩素化合物の嫌氣的バイオレメディエーションに関わる微生物コンソーシア解析技術の開発	日本生化学会
32	中村 智子	生命工学	M2	マウス由来 eugenol 受容体の酵母における発現	日本生物工学会
33	濱壽 淳志	生命工学	M2	Effect of methyl groups onto N,N-position on the ionic conductivity and phase transition behavior of 2-heptadecylimidazolium salts	2nd Int. Congress on Ionic Liquids
34	本山 悠輔	生命工学	M2	An Ethanol/Dioxygen Biofuel Cell Using Hydrophobic Ionic Liquid as Electrolyte	2nd Int. Congress on Ionic Liquids
35	渡辺 武志	生命工学	M2	Thermally stable proton conductive organic-inorganic glassy electrolyte based on Bronsted acidic ionic liquid and siloxane glass	2nd Int. Congress on Ionic Liquids
36	阿部 哲也	生命工学	D1	分裂酵母 <i>Schizosaccharomyces pombe</i> 由来 SpHsp16.0 における N 末端の役割	日本生化学会
37	鍵本 純子	生命工学	D1	Physico-chemical Properties of Novel Ionic Liquids Composed of Amino Acid and Phosphonium Cations	2nd Int. Congress on Ionic Liquids
38	神前 太郎	生命工学	D1	グループII型シャペロニンのサブユニット間協同性におけるATPaseの役割	日本生化学会
39	村田 賢一	生命工学	D1	アスコルビン酸オキシダーゼの直接電子移動反応とそのバイオ燃料電池への応用	電気化学会
40	玉田 政宏	生命工学	D3	イオン液体中でのポリイミド及びポリイミドゲルの合成と機能化	高分子討論会
41	深谷 幸信	生命工学	D3	生体高分子溶解能に特化したイオン液体の機能設計	繊維学会
42	大竹 陽介	応用化学	M1	カチオン性ロジウム/BINAP系錯体触媒を用いた1,6-エンインと電子不足ケトンの不斉[2+2+2]付加環化反応	日本化学会第88春季年会
43	尾端 春香	応用化学	M1	1,8-位連結したポリカルバゾールの合成と連結基の違いによる共役長変化	高分子学会
44	柴田 祐	応用化学	M1	カチオン性ロジウム/BINAP系錯体触媒を用いたアルケンとアルキンの高選択的共二量体反応及び共三量体反応	日本化学会第88春季年会
45	原 裕美	応用化学	M1	カチオン性ロジウム/BINAP系錯体触媒を用いた[2+2+2]付加環化反応によるペルフルオロアルキル芳香族化合物の合成	日本化学会
46	北條 大樹	応用化学	M1	カチオン性ロジウム/錯体触媒を用いた2-アルキルベンズアルデヒドとカルボニル化合物の不斉[4+2]付加環化反応	日本化学会第88春季年会
47	堀 智子	応用化学	M1	カチオン性ロジウム/BINAP系錯体触媒を用いた[2+2+2]付加環化反応による面不斉パラシクロフアンの合成	日本化学会第88春季年会
48	尾坂 拓也	応用化学	M2	カチオン性ロジウム/BINAP系錯体触媒を用いた連続[2+2+2]付加環化反応によるホスホール骨格を有する光学活性[7]及び[9]ヘリセン誘導体の合成	第37回構造有機化学討論会
49	上沢 朗義	応用化学	M2	カチオン性ロジウム/錯体触媒を用いた不斉[2+2+2]付加環化反応による光学活性[7]ヘリセン誘導体の合成	第92回有機合成シンポジウム
50	桑原 秀典	応用化学	M2	三成分系固液平衡を利用した有機ナノ粒子の連続製造法	化学工学会
51	寒河江 裕美	応用化学	M2	Enantioselective Synthesis of Planar-Chiral Metacyclophanes through Cationic Rh(I)/Modified-BINAP-Catalyzed[2+2+2]Cycloadditions	OMCOS14
52	新谷 昌之	応用化学	M2	メカノケミカル法による臭素系難燃剤の無害化	化学工学会
53	須田 健資	応用化学	M2	カチオン性ロジウム/BINAP系錯体触媒を用いた[2+2+2]付加環化反応による軸不斉ベンズアミドの合成	第37回構造有機討論会
54	田口 美岐	応用化学	M2	非溶媒添加晶析での変調操作が多形および粒径分布に及ぼす影響	化学工学会
55	飛永 朋亮	応用化学	M2	Normal Freezing を利用した晶析分離判定装置の開発	化学工学会
56	山根 庸平	応用化学	M2	懸濁条件が有機結晶粒子群の成長速度に与える影響とその評価	化学工学会
57	伊藤 彰彦	応用化学	D3	優先晶析法の純度低下機構に対する種晶の面の影響	化学工学会
58	佐久間 唯	機械システム工学	M1	Design and Evaluation of Insect Cell Sheet Using Thermoresponsive Polymer-grafted Surface for Nano Mechano-Bionic Interface	IEEE-NEMS 2008
59	中條 充	機械システム工学	M1	液晶位相変調器を用いたミューラー行列ポラリメータ	Optics & Photonics Japan
60	榎本 信	機械システム工学	M1	微細加工したIPMCによる細胞刺激システムに関する研究	計測自動制御学会SI2007
61	堀口 裕史	機械システム工学	M1	心筋細胞を駆動源とする自律機械システムへの応用に関する研究-心筋細胞を用いたマイクロ駆動源の開発-	第25回日本ロボット学会
62	皆川 勇一	機械システム工学	M1	ロボット嗅覚用小型SPRセンサの研究	電気学会
63	梓澤 直人	機械システム工学	M2	低密度多孔質材の圧縮変形のひずみ速度依存性の変態を考慮した構成式による評価	日本機械学会
64	石坂 友自	機械システム工学	M2	Bio-Actuated Power Generator using Heart muscle cells on a PDMS Membrane	Transducers' 07
65	桑垣内 智仁	機械システム工学	M2	Surface profile detection for nano-structures by Mueller matrix	Photonics Asia 2007
66	鈴木 翔	機械システム工学	M2	Muscle Cell-Driven Tube Shaped Bioactuator Stimulated by Arch-type Muscle Cell Stretching System	IEEE Int. Conf on ROBOT 2007
67	橋本 真幸	機械システム工学	M2	筋細胞によるバイオアクチュエータの性能向上に向けたマルチパターン培養筋細胞刺激システムの開発	第25回日本ロボット学会
68	小林 富美男	機械システム工学	D1	液晶格子投影モアレ三次元計測の開発-周波数変調による三次元測定-	精密工学会

69	秋山 佳丈	機械システム工学	D3	独立駆動デバイスを旨とした自律拍動する背脈管由来細胞の培養	日本比較生理生化学会
70	ABDULLAH UZUM	電気電子工学	M1	QUALITY IMPROVEMENT OF MULTICRYSTALLINE SILICON WAFERS BY BORON-GETTERING	太陽光発電国際会議
71	小熊 信	電気電子工学	M1	超大画面三次元表示用三次元ピクセルモジュールの改良	3次元画像コンファレンス2007
72	鈴木 真美	電気電子工学	M1	An Analysis on PV Resource in Residential Areas by Means of Aerial Photo Images	22nd EUPVSEC
73	鈴木 祐司	電気電子工学	M1	DEPOSITION AND EVALUATION OF PASSIVATION FILMS FOR Si SOLAR CELLS BY RPECVD METHOD	太陽光発電国際会議
74	SUPAJARIYAWICHAI PIYASAK	電気電子工学	M1	HIGH QUALITY P-TYPE ASiH THIN FILM FOR HETEROJUNCTION SOLAR CELL PREPARED BY PEMOTE PECVD	太陽光発電国際会議
75	東方田 敏彰	電気電子工学	M1	The simulated power conditioner for PV systems by electronic devices for the ultra scaled-down network simulator	22nd EUPVSEC
76	林 勇樹	電気電子工学	M1	ホログラム表示のためのSLMの水平・垂直解像度変換	日本光学会
77	山下 直子	電気電子工学	M1	An Environmental Potential of PV Systems in Japan by Utilizing the Ecological Foot-print	太陽光発電国際会議
78	浅見 陽	電気電子工学	M2	ナノ結晶シリコン超音波源のデジタル駆動技術の開発	応用物理学会
79	川内 和樹	電気電子工学	M2	Effect of Annealing Temperature on ASiH Films for Heterojunction Solar Cells	太陽光発電国際会議
80	坂口 智典	電気電子工学	M2	フレキシブル固定エレクトロクロミック素子の高速応答化	応用物理学会
81	佐藤 正崇	電気電子工学	M2	ナノシリコン弾道電子励起固体面発光素子の特性	応用物理学会
82	柴田 崇之	電気電子工学	M2	ナノ結晶シリコン発光素子動作時の音波発生	応用物理学会
83	竹内 良太	電気電子工学	M2	水素ラジカルを利用したシリコンナノワイヤーの作製と評価	応用物理学会 秋季
84	浜野 祐貴	電気電子工学	M2	PV Resources Analysis in World Six Deserts with Detecting Seasonal Differences Among Satellite Images	太陽光発電国際会議
85	宮本 和典	電気電子工学	M2	PV用パワーコンディショナの単独運転検出機能に与える誘導電動機再生エネルギーの影響に関する一考察	電気学会
86	山本 聖	電気電子工学	M2	リニアスライダへのロバスト制御の適用	自動制御連合講演会
87	渡辺 優一	電子情報工学	M2	Research on Three-dimensional Coordinates Acquisition for Shadow Estimation in Photo-voltaic System	PVSEC-17
88	松本 理	電子情報工学	D1	塗布熱分解法によるLa ₂ xRExCuO ₄ 薄膜の作製(4)	応用物理学会 秋季
89	太田 敢行	電子情報工学	D2	ナノシリコン弾道電子エミッタの水溶液中動作	応用物理学会 秋季
90	全 珉星	電子情報工学	D2	Synthesis of the Au-Catalyzed Silicon Nanowires by Hydrogen Radical-assisted Deposition Method	The10thAsia Pacific Physics Conference
91	川崎 憲広	電子情報工学	D3	集中連系型太陽光発電システムの変動特性の評価	電気学会
92	李 庚垂	電子情報工学	D3	Case Study of Distribution-Unified Power Flow Controller (D-UPFC) in the Clustered PV System	Int.Conf.on Power Electronics 07

③生物システム応用科学府 (BASE) (前期) : 11件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	阿部 洋輔	生物システム応用科学	M1	ナノダイヤモンド/高分子複合材料に関する研究	第55回高分子討論会
2	正岡 隼一	生物システム応用科学	M1	多機能性ポリチオフェングラフト共重合体の合成と評価	第55回高分子討論会
3	今成 実季	生物システム応用科学	M1	種品無添加系回分冷却晶析の未飽和と操作を利用した粒径分布の改善	化学工学会第39回秋季大会
4	伊藤 健司	生物システム応用科学	M1	非溶媒添加晶析法での結晶形態に対する操作過飽和度の影響	分離技術会
5	丹羽 将之	生物システム応用科学	M1	カイコガ幼虫で発現する味覚受容体の探索および機能解析	日本蚕糸学会
6	坂口 孝太	生物システム応用科学	M2	電荷輸送性ブロック共重合体の合成および有機EL素子への応用	第56回高分子学会年次大会
7	杉本亜希子	生物システム応用科学	M2	新規配位子を有する燐光発光ドーパントの合成及び評価	第55回高分子討論会
8	村田 達哉	生物システム応用科学	M2	チオキサンテン誘導体高分子をベースとしたホログラム材料の研究	繊維学会2007
9	中野 仁美	生物システム応用科学	D3	Gene expression profile for cell wall feruloyl arabinoxylan biosynthesis in a rice mutant F ukei71(d50; <i>Oryza sativa</i>).	XI thCell Wall Meeting
10	藤岡 正洋	生物システム応用科学	D3	ポリ(4-ブチルトリフェニルアミン)-ポリ(エチレンオキサライド)ブロックポリマーの合成と性質	第56回高分子学会年次大会
11	沈 婕	生物システム応用科学	D3	Synthesis and Characterization of Polythiophene Derivatives with Polystyrene Side Chains	第55回高分子学会年次大会

(後期) : 24件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	岩下 龍司	生物システム応用科学	M1	LSI積層における樹脂・金属バンパ切削過程のFEM解析	精密工学会秋季大会
2	沖 隼	生物システム応用科学	M1	鉄道の利便性の可視化	画像電子学会
3	小幡 史明	生物システム応用科学	M1	Binding region of insecticidal protein CryIaA from <i>Bacillus thuringiensis</i> for a receptor in <i>B.mori</i>	Asia-Pacific Congress of Sericulture and Insect Biotechnology
4	木村 隼人	生物システム応用科学	M1	The Sound Emphasis Using the Double Structured ICA	MJISAT2007
5	小谷 拓也	生物システム応用科学	M1	フェージディスプレイ法を用いたB t R175高親和性を有したCry毒素変異体の選抜	BT研究会
6	阪本 紘嗣	生物システム応用科学	M1	Image Classification Method Using Evolutionary Image Segmentation	MJISAT2007
7	深田 陽介	生物システム応用科学	M1	The Extraction of the Coloration Pattern for Personal Room Design	MJISAT2007
8	福田 理明	生物システム応用科学	M1	パッチ分割切削方における曲面への規則的表面模様形成・任意の三角形パッチ群への適応	精密工学会秋季大会
9	村上 純子	生物システム応用科学	M1	The Proposal of the EEG Characteristic Extraction Method by Using the FCM	MJISAT2007
10	横松 恵理子	生物システム応用科学	M1	An Individual Preference Detection System Using the EEG	MJISAT2007
11	吉澤 靖貴	生物システム応用科学	M1	カイコガ幼虫の味覚受容体の同定と機能解析	日本蚕糸学会
12	金子 悟士	生物システム応用科学	M2	Mathematical Model of Linear Motor Stage with Non-Linear Friction Characteristics	The4th Int. Conf. on Leading Edge Manufacturing in 21st Century
13	下村 充	生物システム応用科学	M2	ケーシショナル切削のFEM解析	精密工学会秋季大会
14	澁川 友恵	生物システム応用科学	M2	Non-Photorealistic Human Image Rendering for a Visual Communication Tool	画像電子学会
15	鈴木 旭	生物システム応用科学	M2	カイコガ幼虫におけるノジュール形成機構の解析	日本分子生物学会
16	高橋 和也	生物システム応用科学	M2	ロータリエンコーダを用いたサーボ傾斜角度計の開発	精密工学会秋季大会
17	谷山 裕紀	生物システム応用科学	M2	ウォームギヤ駆動CNC回転テーブルの数学モデル	精密工学会秋季大会
18	中島 宏	生物システム応用科学	M2	複合加工旋盤におけるロータリ工具の加工特性	精密工学会秋季大会
19	村田 名美枝	生物システム応用科学	M2	時空間画像処理による魚の動作可視化と行動解析	情報処理学会
20	森本 智夏	生物システム応用科学	M2	フェージディスプレイ法を用いたB t R175高親和性を有したCry毒素変異体の選抜	日本分子生物学会
21	佐藤 敬子	生物システム応用科学	D1	Judgment of Human Characteristics based on Color Impression	MJISAT2007
22	深井 寛修	生物システム応用科学	D1	経験的モード分解を用いた見た目年齢推定	電子情報通信学会
23	唐 于龍	生物システム応用科学	D2	ファインポーリングにおけるシリンドライナの温度分布と熱変形の予測	精密工学会秋季大会
24	渡部 秀文	生物システム応用科学	D2	Stability analysis and visualization of hierarchical clustering by adding a temporary element	画像電子学会

④技術経営研究科 (MOT) (後期) : 1件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	山中 直機	擁護リスクマネジメント	M1	パニロイドレセプターリガンドの骨への作用	日本生化学会

⑤ 連合獣医学研究科 (後期) : 1件

	氏名	学科名	学年	発表題目	学会名
1	Syed Sher Shah	連合獣医学	D4	Characterization of cytochrome P450-mediated drug metabolism in cats	日本獣医学会

2. 優秀卒業論文 (5件)

	氏名	学科名	学年	卒論題目	備考
1	雨貝 陽介	獣医学科	6年	Investigation of target molecules to inhibit tumorigenesis in dog mast cell tumors	
2	末廣 多恵子	化学システム工学	4年	廃PVC適正処理を含む廃棄物・バイオマスエネルギー利用システムの開発	
3	安田 幸治	地域生態システム学科	4年	地拵えから主伐に至るまでの環境負荷物質インベントリ	
4	井山 佳代子	生物生産学科	4年	ブルーベリーの着果量の違いが新梢および果実の成長に及ぼす影響 - 樹内と結果枝内に注目して -	1名分を援助
5	岡村 祐里子	生物生産学科	4年	リグニン分解微生物の代謝機能を用いた植物バイオマスからの機能性物質生産	
6	高橋 彩佳	生物生産学科	4年	アブシシン酸およびジベレリン生合成阻害剤処理がキンギョソウ老化花卉におけるプログラム細胞死に及ぼす影響	
7	木内 智	機械システム工	4年	摩擦攪拌形パニシングにおける油剤添加成分の加工面への影響とその評価	

3. コンテスト・コンクール等出場、入賞 (5件)

	氏名	学科名	学年	コンクール・コンテスト名	入賞等
1	東京農工大学 黒川研 A 代表山中 景介 (他5名)	電子情報工学	4年	やまなしエコエネルギーコンテスト ソーラーカー部門コンテスト	デザイン賞
2	東京農工大学 代表 川崎 憲広 (他2名)	電子情報工学	D3	やまなしエコエネルギーコンテスト ソーラーカー部門コンテスト	無
3	Bugrasche 代表金井 達 (他4名)	電子情報工学	D1	米国計算機学会 国際大学対抗プログラミングコンテストアジア地区予選東京大会 ACM International Collegiate Programming Contest	無
4	深野 祐也	地域生態システム	4年	明治大学ベンチャービジネスアイデアコンテスト	奨励賞
5	戸金 悠	生物制御科学	M2	ハート昆虫研究奨励基金 - 神経疾患の進行を食い止めるのはなぜ難しいのか? - 連鎖的に起こる神経細胞死のメカニズムをショウジョウバエの視覚システムを用いて解析した	ハート大賞

4. 課外活動

- (1) 学園祭 2件 農学部 / 工学部 (学園祭実行委員会)
- (2) サークル活動 20件 軟式庭球部 / サッカー部 / 写真部 / 水泳部 / E-Mission (自主ゼミ) / ジャグリングサークル@ジャグ / 耕地の会 / 野生動物研究会 / ラグビー部 / ボクシング部 / 歌研究会 / 硬式庭球部 / 硬式野球部 / 吹奏楽団 / アメリカンフットボール部 / 弓道部 / ピアノ部 / バドミントン部 / ごみダイエットNOKO / エレクトーンサークル /
- (3) サークルリーダーズトレーニング研修会 1件

同窓会役員等
体制

会 長 畑中 孝晴 (農S31) (平成19・20年度)	経 理 部 長 多羅尾光徳 (環保H3)
副会長 (平成19・20年度)	副 部 長 斎藤美佳子 (工化H1)
藤 卷 宏 (農 S36)	事 業 部 長 淵野雄二郎 (農 S43)
西 出 照雄 (製糸S41)	副 部 長 岡山 隆之 (林産S49) 企画担当
草 野 洋一 (養蚕S47)	募 金 担 当 部 長 松岡 正邦 (化工S43)
壁 矢 久良 (織工S35)	名 簿 担 当 部 長 並木美太郎 (数情S59)
安 藤 哲 (植防S47)	副 部 長 大里 耕司 (農工S52)
町 山 紀郎 (工化S39)	広 報 部 長 佐藤 敬一 (林産S56)
久 米 賢次 (農化S47)	副 部 長 滝山 博志 (化工S62) HP担当
遠 藤 幸一 (工化S46)	副 部 長 及川 洋征 (林 H2) HP担当
新 仏 利伸 (機械S46)	副 部 長 大川泰一郎 (農 S62) 会報担当
利 伸 亨 (電気S55)	副 部 長 夏 恒 (機シス博H7) 会報担当
宇 野 亨 (電気S55)	
大 野 直次 (応物S47)	
大 野 直次 (応物S47)	
岩 澤 京子 (数情S56)	
岩 澤 京子 (数情S56)	
渡 邊 俊夫 (獣医S49)	
渡 邊 俊夫 (獣医S49)	
宮 本 讓 (獣畜S22)	
宮 本 讓 (獣畜S22)	
常 務 理 事 (平成20・21年度)	監 事 壁 矢 久良 (織工S35)
理 事 長 亀山 秀雄 (化工S48)	深 水 智明 (織工S38)
副 理 事 長 高橋 幸資 (農化S45)	坂 野 好幸 (農化S40)
総 務 部 長 堀 三計 (機械S52)	
副 部 長 渡 辺 元 (獣医S54) 会務担当	
副 部 長 渡 邊 敏行 (材シスS61) 総会担当	事 務 局 長 山 田 昭一
副 部 長 大 谷 幸利 (機シスS62) 支部担当	

部会・支部 だより

製糸部会女子部



日 時 平成19年10月25日～26日
 開催場所 KKRホテル東京、有楽町蚕糸会館
 参加者数 8名
 議事内容 今後の女子部の活動について、
 会計決算報告他
 講演・討論等 小此木女子部長が代表を務める
 多摩シルク721研究会の
 第6回東京シルク展に参加。

農芸化学・応用生命化学部会



日 時 平成19年11月17日
 開催場所 農学部2号館11号教室
 派遣理事名 高橋幸資総務部長
 参加者数 100名
 議事内容 会計報告、監査報告、
 部会会則の改定、顧問等の紹介、
 学科・専攻の現状
 講演・討論等 懇親会

横浜会



日 時 平成19年5月31日
 開催場所 横浜中華街「華正楼」
 派遣理事名 なし
 参加者数 11名
 議事内容 第44回通常総会報告、会計・監査報告
 講演・討論等 会員の近況報告、懇親会、同窓会名簿の発行について

新潟県支部



日 時 平成19年6月1日
 開催場所 新潟市 クオリスビル
 派遣理事名 堀三計経理部長
 参加者数 22名
 議事内容 前支部長へのセレモニー、
 第44回通常総会報告
 講演・討論等 大学の近況報告・懇親会

宮城県支部



日 時 平成19年7月7日
 開催場所 KKRホテル仙台
 派遣理事名 渡辺元総務副部長
 参加者数 26名
 議事内容 平成18年度収支決算、
 平成19年度収支予算について、
 宮城県支部会則の改正、役員改選
 講演・討論等 渡辺先生の研究について、懇親会

福島県支部



日 時 平成19年7月7日
 開催場所 福島グリーンパレス
 派遣理事名 高橋幸資総務部長
 参加者数 32名
 議事内容 平成18年度事業報告・会計報告 平成19年度事業計画・役員改選
 講演・討論等 同窓会活動を活発にするための
 方策・大学に期待する事など・懇親会

山梨県支部



日 時 平成19年7月28日
 開催場所 甲府市「ベルクラシック甲府」
 派遣理事名 岡山隆之事業副部長
 参加者数 47名
 議事内容 会計報告、役員改選
 講演・討論等 大学の近況報告・懇親会

岡山県支部



日 時 平成19年8月25日
 開催場所 ピュアリティまきび
 派遣理事名 高橋幸資総務部長
 参加者数 16名
 議事内容 平成18年度事業報告、
 会計報告、役員改選
 講演・討論等 大学の近況報告、
 会員の活動報告と学生時
 代の思い出等

山口県支部



日 時 平成19年7月22日
 開催場所 柳井市「柳井グランドホテル」
 派遣理事名 桑原利彦広報部長
 参加者数 12名
 議事内容 柳井白壁の町並み見学、第44回通常総会報告、
 平成18年度事業・決算報告、平成19年度事業・予算計画、
 平成20年度支部総会の持ち方について
 講演・討論等 「大学の近況報告」、「塑性加工について」

島根県支部



日 時 平成19年8月26日
 開催場所 松江市ホテル宍道湖
 参加者数 7名
 議事内容 前支部長の本部感謝状披露、
 本部総会報告、会員名簿の件、
 役員改選

三重県支部



日 時 平成19年9月9日
 開催場所 津市「新玉亭」
 派遣理事名 大谷幸利総務副部長
 参加者数 11名
 議事内容 本部総会報告、役員改選・会員名簿発行方法等
 講演・討論等 大学の近況報告

神奈川県支部



日 時 平成19年9月22日
 開催場所 かながわ労働プラザ9F レストラン味彩
 派遣理事名 多羅尾光徳経理副部長
 参加者数 24名
 議事内容 平成18年度決算・監査報告、平成19年度予算案
 講演・討論等 大学の近況報告と懇親会

秋田県支部



日 時 平成19年10月20日
 開催場所 秋田市ニューたけや
 派遣理事名 堀三計経理部長
 参加者数 18名
 議事内容 会計報告、事務報告、懇親会
 講演・討論等 大学の近況報告、堀先生の研究について

茨城県支部



日 時 平成19年10月21日
 開催場所 水戸市 三の丸ホテル
 派遣理事名 大谷幸利総務副部長
 参加者数 45名
 議事内容 平成17年～平成18年度事業経過・経費収支決算、支部役員の改選、顧問の推挙
 講演・討論等 大学同窓会と母校の近況、工学部の研究成果

徳島県支部



日 時 平成19年10月27日
 開催場所 徳島市伊月町「笹乃庄」
 派遣理事名 なし
 参加者数 7名
 議事内容 収支報告、情報交換
 講演・討論等 懇親会

長野県支部



日 時 平成19年10月21日
 開催場所 村川信濃路
 派遣理事名 高橋幸資総務部長
 参加者数 42名
 議事内容 規約の改正について、平成17.18年度収支決算報告、平成19年度収支予算案の承認、役員の改選
 講演・討論等 講演「同窓会のあり方について」、
 「長野県オリジナル果樹品種の開発」、
 「ワインを核とした地域振興の可能性」

宮崎県支部



日 時 平成19年11月17日
 開催場所 天然温泉 極楽湯
 派遣理事名 なし
 参加者数 20名
 議事内容 平成18年度実績・収支決算
 平成19年度事業計画
 ・収支予算役員改選
 講演・討論等 会員の近況報告

兵庫県支部



日 時 平成19年11月25日
 開催場所 兵庫県民会館
 派遣理事名 なし
 参加者数 15名
 議事内容 平成18年度会計報告、事務局からのお知らせ
 講演・討論等 出席者の近況報告

山形県支部



日 時 平成19年12月2日
 開催場所 山形国際ホテル
 派遣理事名 久保隆文事業副部長
 参加者数 26名
 議事内容 役員改選
 講演・討論等 大学の近況報告・本部の活動等

富山県支部



日 時 平成20年3月8日
 開催場所 懐石「松や」本店
 派遣理事名 なし
 参加者数 13名
 議事内容 平成19年度会計報告、同窓会本部総会の概要報告
 講演・討論等 懇親会

埼玉県支部



日 時 平成19年12月8日
 開催場所 さいたま市「バイオランドホテル」
 派遣理事名 渡邊敏行総務副部長
 参加者数 27名
 議事内容 平成18年度事業報告・決算報告
 平成19年度事業計画・予算案
 役員改選
 講演・討論等 議事内容について、原案通り可決された。

北海道支部



日 時 平成19年12月8日
 開催場所 KKRホテル札幌
 派遣理事名 淵野雄二郎事業部長
 参加者数 23名
 議事内容 事業報告、会計報告、監査報告、
 講演・討論等 母校の現状、ミニ講演会
 (北海道大学長谷川周一教授)

静岡県支部

日 時 平成20年3月9日
 開催場所 静岡市クーボール会館
 派遣理事名 生原喜久雄理事長
 参加者数 50名
 議事内容 平成19年度事業報告、平成20年度事業計画、平成20年度役員について
 講演・討論等 「界面活性剤のお話」
 (清水欽次 S49林産学科卒)、懇親会

高知県支部



日 時 平成20年5月10日
 開催場所 高知グリーン会館
 派遣理事名 高橋幸資総務部長
 参加者数 12名
 議事内容 支部規約、役員の承認
 講演・討論等 大学の近況、参加者の近況

クラス会 だより

かいこ会

日 時 平成19年5月14～15日
開催場所 鷗外荘水月軒
ク ラ ス S19年9月養蚕・栽桑・製糸学科卒
参加者数 8名
実地事項 近況報告・親睦



工化40年卒クラス会

日 時 平成19年7月21日
開催場所 明治記念館
ク ラ ス S40工業化学科卒
参加者数 30名
実地事項 情報交換・親睦



S34養蚕学科

日 時 平成19年10月3日～4日
開催場所 別府温泉 つるみ荘
ク ラ ス S34養蚕学科卒
参加者数 11名
実地事項 情報交換・親睦



S31農学科・農芸化学科合同

日 時 平成19年10月13日
開催場所 銀座クラブ「凧」
ク ラ ス S31農学科・農芸化学科卒
参加者数 下田先生・農学科4名
・農芸化学科7名
実地事項 情報・近況交換・親睦



S29獣医学科

日 時 平成19年10月23日
～25日
開催場所 城崎温泉 城崎荘
ク ラ ス S29獣医学科卒
参加者数 5名
実地事項 近況交換・親睦



36農化会



日 時 平成19年5月18日
開催場所 後楽園 涵徳亭
ク ラ ス S36農芸化学科卒
参加者数 12名
実地事項 小林節子先生を囲んで情報
交換・親睦

38Fクラス会



日 時 平成19年10月10日～11日
開催場所 長崎市 やすらぎ伊王島
ク ラ ス S38年林学科卒
参加者数 23名
実地事項 親睦

S32養蚕学科



日 時 平成19年10月24日～
25日
開催場所 虎ノ門パストラルホテル
ク ラ ス S32養蚕学科卒
参加者数 12名
実地事項 卒後50年記念の集い

ラグビー部シニアOB会

- 日時 平成19年10月25日～27日
- 開催場所 八戸市と八甲田・奥入瀬・十和田湖
- クラス ラグビー部シニアOB会
- 参加者数 10名(同伴5名)
- 実地事項 親睦

**武蔵野38人会**

- 日時 平成19年11月5日～6日
- 開催場所 南青山会館
- クラス S26製糸学科卒
- 参加者数 19名
- 実地事項 親睦

**S23蚕業実科**

- 日時 平成19年11月5日～6日
- 開催場所 熱海 トーカ熱海
- クラス S23蚕業実科卒
- 参加者数 9名
- 実地事項 情報交換・親睦

**S39農業生産工学科**

- 日時 平成19年11月9日
- 開催場所 熱海温泉JFE健康保険組合保養所
- クラス S39農業生産工学科卒
- 参加者数 9名
- 実地事項 近況交換・親睦

**多摩留会**

- 日時 平成19年11月7日～8日
- 開催場所 箱根湯本 富士屋ホテル
- クラス S31獣医学科卒
- 参加者数 12名
- 実地事項 情報交換・親睦

**三々五々会**

- 日時 平成19年11月14日
- 開催場所 銀座マキシム・ド・パリ
- クラス S35繊維学部4科卒
- 参加者数 27名
- 実地事項 近況交換・親睦

**S39農学部卒業同期会**

- 日時 平成20年5月31日
- 開催場所 東京農工大学50周年記念ホール
- クラス S39農学部卒
- 参加者数 42名
- 実地事項 近況交換・親睦

**つきみ会**

- 日時 平成19年11月17日～18日
- 開催場所 京都市嵐山「花のいえ」
- クラス S52農業生産工学科卒
- 参加者数 13名
- 実地事項 卒業30周年の集い

**38Fクラス会**

- 日時 平成20年3月20日～21日
- 開催場所 佐野市公園荘・唐沢山演習林
- クラス S38年林学科卒
- 参加者数 19名
- 実地事項 親睦・山櫻植栽



掲 示 板

このたびの岩手・宮城内陸地震、中国・四川省大地震による被災者の皆様には心よりお見舞い申し上げます。

ギナンジャール・カルタサスマタ氏（工化S40）が春の叙勲で旭日大綬章を受章

春の叙勲で、本学卒業生のGinanjar Kartasasmita（ギナンジャール・カルタサスマタ）氏（67、工業化学科S40年卒）が旭日大綬章を受章しました。日本・インドネシア両国間の友好親善及び経済緊密化に寄与した功績が称えられての受章です。日本はこれまでに海外の多くの国に経済協力をしてきていますが、対インドネシアの協力が最も大きく、またインドネシアにとっても日本は最大の支援国です。

氏は、本学を卒業後インドネシアに帰国し、海外技術協力庁二国間関係局長（1972-1976）、国内産品活用推進庁副大臣（1983-）、投資庁長官（1985-）、鉱業エネルギー大臣（1988-）、国家開発企画庁長官（1993-）、経済・金融・産業担当調整大臣（1998-）を歴任し、その間、日本の経済協力分野を中心として、両国間の架け橋の役割を果たしてきました。現在、インドネシア共和国地方代表議会（日本の参議院に相当）議長を務める傍ら、インドネシア日本友好協会会長を務めています。2005年3月には、本学の名誉博士号を授与されました。

2008年は、日本とインドネシアが外交関係を樹立してから50周年にあたり、「日本インドネシア友好年」として、様々な記念行事が計画されています。8月25日・26日に本学小金井キャンパスにおいて、「インドネシア・日本友好フォーラム」（インドネシア大使館・在日インドネシア留学生協会共催、<http://ti2008.ppi-jepang.org>）が開催され、25日にはギナンジャール氏にゲストスピーカーとして講演いただく予定です。

本学卒業生 国枝 栄さん調教の「マツリダゴッホ号」が第52回有馬記念で優勝

12月23日（日）、中山競馬場で行われた本年最後のG1レース ※ 第52回有馬記念において、9番人気のマツリダゴッホ号（蛭名正義騎手）が2分33秒6のタイムで優勝しました。

マツリダゴッホ号の調教師は本学農学部獣医学科 昭和53年卒業生の国枝 栄さん（美浦TC所属）で、国枝さんが調教された馬がG1レースを制したのは、NHKマイルカップ（ピンクカメオ号）に続き本年2度目になります。

国枝さんは本学卒業後、美浦・山崎きゆう舎の調教助手となり、1989年に調教師免許を取得、これまでの20年近いキャリアの中でブラックホーク号が1999年のスプリンターズステークス、2001年の安田記念を制覇（共にG1レース）するなど、着実に実績を重ねてこられました。

今年は、G1レース2勝を含む重賞6勝、通算41勝をあげ「東京競馬記者クラブ賞」にも選出されており、この度の快挙に、国枝さんは「馬が好きでこの仕事につき、このたび有馬記念に自己の管理馬マツリダゴッホ号が優勝できたことを大変うれしくまた名誉に思います。これからも馬とともに元気に仕事に励んでいきたいと思っています。」とコメントしておられます。

国枝さんの今後一層のご活躍が期待されます。



<左：国枝氏（ご本人より提供）>

※ G1レースとは、競馬の重賞レースの格付けの中で最高レベルのレースのことです。
レースの格によってG1、G2、G3と3種類あります。

大久保利泰氏（大久保利通公の曾孫）農学府をご訪問

平成19年12月13日（木）に、大久保利通公の曾孫にあたります大久保利泰氏が農学府を訪問されました。

当日は、笹尾副学長・有馬農学府長・生原同窓会理事長のほか数名の先生方が同席し、「大久保家所蔵の貴重品の紹介」・「大久保利通公の顕彰碑の由来」等の情報交換を行った後、顕彰碑を見学されました



左から3人目が大久保利泰氏

慶弔

慶 事 お祝い申し上げます

平成18年春の叙勲

松丸 勝二（農学S37）瑞宝双光章

平成19年秋の叙勲

山口 正信（糸専S23）旭日単光章

奥富 清（生物S23）瑞宝中綬章

水口 衛（獣医S29）瑞宝小綬章

関口 政雄（養蚕S30）瑞宝双光章

平成20年春の叙勲

Ginanjari Kartasasmita（工化S40）旭日大綬章

戸塚 昭（農化S34）瑞宝小綬章

古澤 實（製糸S30）瑞宝小綬章

弔 事 ご冥福をお祈り申し上げます

川口 正英（農実S14）元神奈川県支部長

明星 静（農学S18）元千葉県支部長

中山 二郎（獣畜S20）元茨城県副支部長

萬燈 未達（農学S16）元島根県支部長

布施 康正（獣医S20）新潟県支部長

恩田 秋夫（紡織S22）木版画家

お知らせ

（故）高島藤順元教授の菩提寺

乗萬寺 東京都世田谷区北烏山5-7-1

同窓会会員名簿の発行延期の決定

去る5月24日（土）開催の第45回通常総会において同窓会会員名簿の発行延期が決定されました（詳細は通常総会議事録参照）。

同窓各位にご迷惑がかからないよう、従来どおりの代替サービスを提供いたします。



農工大女性キャリア支援・開発センターでは 卒業生のブラッシュアップ・キャリアアップを応援します！

女性キャリア支援・開発センターの事業内容紹介

キャリアパス支援

女子学生や若手研究員の研究者へのチャレンジを支援します。

- ①農工大メンター制度
(学生相談システム)
- ②活躍する女性研究者の
キャリアガイダンス

出産・育児・介護支援

女性教員・研究員が、育児・介護を行いながら、勉学や研究を継続できる環境を整えます。

- ①学内研究サポートシステム
- ②産休中の研究支援ポスト配置
- ③ベビーシッタークーポン、介護クーポンの導入

エンパワーメント環境整備

理系女性をめぐる研究環境を整備します。

- ①講演会・シンポジウムの実施
- ②学内保育所の誘致 in 小金井
キャンパス (平成20年度開所予定)

卒業生
向け！

母校に戻ろうキャンペーン in 農工大

卒業生が大学に戻り、勉学・研究することを応援します。

- ①卒業生ブラッシュアップのための研究生・科目等履修生受入れ促進 (男性も女性も利用できます)

区 分	研究生	科目等履修生
検定料	9,800円 (9,800円)	9,800円 (9,800円)
入学金	0円 (84,600円)	0円 (28,200円)
授業料	(月額) 14,800円 (29,700円)	(一単位) 7,400円 (14,800円)

※()内は本学卒業生等以外の金額

- ②女性卒業生ネットワークシステム (SNS) の構築
平成19年3月「農工大SNS」を開設 (現在登録者は443名)
ブラッシュアップ教材 (講演会の記録)、求人情報などを掲載しています。

卒業生の皆様へのお知らせ

10月19日(日)「農工女子ホームカミングデー」に参加しませんか？

女性卒業生・在校生・農工大志望の女子高校生を対象に、「農工女子ホームカミングデー」を開催します。

日程 10時～12時 「母校に戻ってきた！体験者報告会」(発表者募集中。謝金・交通費支給)
12時～17時 ホームカミングパーティー (立食形式、会費：卒業生1000円/人(予定))

* 在校生との談話会や、卒業生同士のフリートークができるお茶会を予定しています。

研究、進路、生活などについて、センパイからのメッセージを送って下さい！

お子さんの同伴可、託児サービス有り。(無料、小学生未満)

卒業生SNSの参加申込フォーム (パソコン対応) から申込をして頂くと招待となります (交通費のみ支給)。
e-mail アドレス、電話、ファックスでのお申込みも承ります (氏名、連絡先、卒業年、卒業学科・専攻をお伝え下さい)。

卒業生SNSに参加しませんか？

SNSでは、ブラッシュアップ教材、求人情報などのコンテンツを掲載しています。また、出産・育児・介護相談室 (本学出身の相談員が対応します)、再就職・キャリアアップ情報などのコミュニティを用意しており、卒業生の交流スペースとして活用できます。SNSには、女性センターから郵送したID・パスワードを使って、アクセスすることができます (パスワードを忘れた場合は、下記アドレスまでご連絡下さい)。

お問い合わせ先：東京農工大学 女性キャリア支援・開発センター

e-mail : joseispt@cc.tuat.ac.jp HPアドレス : <http://www.tuat.ac.jp/~dan-jo/center/index.html>
府中センター室 042-367-5945(Tel)/5643(Fax) 小金井センター室 042-388-7362 (Tel)/7366(Fax)

皆さん 楽しく集まりましょう

東京農工大学 同窓会東京支部

「けやきクラブ」

「けやきクラブ」は支部に関係なく、どなたも参加できます（予約なし フリー）

大正・昭和・平成それぞれ オーク

一人でも、友達連れでも



おしゃべり自由

毎月第3火曜日 6:00p.m ~ 8:00p.m. (時間きっちり)

新宿「中村屋 本店」4階

レストランバー（ラコンテ）けやきクラブ席

電話 03 - 3352 - 6164

住所 新宿区新宿 3-26-13

飲み物・食べ物 ワリカン制（大体3000円～4000円）



ビール 焼酎 日本酒 ウイスキー

ウーロン茶 ジュース

カレーうどん（美味）ピザ ソーセージ

お肉 おさかな ポテトフライ 野菜サラダ

アクセス

地下鉄丸の内線「新宿駅」または「新宿三丁目」3分 A6出口

JR 新宿駅 東口 三越の並び フルーツ高野の隣り

お問い合わせ

けやきクラブ会長 渡辺 彰 090-8051-1798

事務局 磯野 司 090-3878-5418

東京支部長 馬場 信行 03-3641-3882

東京事務局長 山本 賢 090-4729-2114

事務局だより

「住所・勤務先等の変更届のお願い」

住所、勤務先等の変更があった場合には、すみやかに変更連絡票はがき、電話、メールなどで事務局までご連絡いただきたくお願い申し上げます。事務局では転居され、郵便物が返送された会員の方に現住所等の問い合わせをしております。

また、同窓会会員名簿等に「住所・勤務先・電話番号」について非掲載を希望される方は、メール等でご連絡くださるようお願い致します。

同窓会ホームページのご案内 <http://tuat-dousoukai.jpn.org/>

同窓会HPでは内容を随時更新し、農工通信に先駆けて最新情報を掲載していますので是非ご利用下さい。また、部会・支部、クラス会便りも電子媒体でお送りいただければ、随時掲載いたしますので、当日参加できなかった方もHPでご覧いただくことが出来ます。どうぞ下記アドレスまでお送り下さい。お待ちしております。

E-mail:info@tuat-dousoukai.jpn.org

会費納入のお願い

- ★ 会費は同窓会活動の原動力です。
- ★ 正会員は同封の払込票にて次のどちらかの会費をご納入ください。
 - 終身会費は30,000円
 - 年会費は1,500円

*なお、平成20年5月24日開催の第45回通常総会にて10年前納会費の削除が承認されました。よって今年度より10年前納会費のお取り扱いはありません。詳細は通常総会・理事会開催さるの「別記3」をご参照ください。

- ★ 払込票の入っていない方は納入済です。
- ★ 過去にさかのぼって納入の必要はありません。

寄稿文 随時募集中

寄稿内容は今回と同じです。なお、文字数はA4判1ページ1800字程度を目安にさせていただくと共に、原稿については、可能な限り電子媒体でお送り下さい。詳細は事務局にお尋ね下さい。

「農工通信」への広告掲載のお願い

本会では、同窓会報「農工通信」を毎年8月下旬を目途に卒業生、現教職員、元教員等に対して、約40,000部を発行配布しております。つきましては、御社の広告を是非ともご掲載いただきたく、下記の要項にてご案内申し上げます。

記

- 1、広告ページの大きさはA4判で仕上がり寸法と掲載料金は次のとおりです。
 - ・ 1ページの場合：縦26cm×横18cm（掲載箇所を問わず 80,000円）
 - ・ 1/2 // : 縦13cm×横18cm（ // 40,000円）
 - ・ 1/4 // : 縦13cm×横9cm（ // 20,000円）
- 2、印刷はオフセット印刷で版下は御社でご準備願います。なお、版下をお持ちでない場合は、実費で作成の斡旋をいたしますので下記にお申し込みください。

- 3、掲載箇所については、本会において調整させていただきます。
- 4、お申込みは随時受け付けます。
- 5、お支払いは、振込用紙にて郵便振替でお支払いください。
- 6、申込み先・問い合わせ先

〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1
東京農工大学同窓会事務局長 山田 昭一
TEL 042(364)3328 ; FAX 042(335)3500
E-mail info@tuat-dousoukai.jpn.org

〔慶弔についてのご連絡〕

同窓会正会員の慶事および弔事の際には、会員の方々からのご連絡に基づき、同窓会から祝電あるいは弔電をお送りしてきております。

このような慶弔事のご連絡の際に、次のような事項についてあわせてご連絡ください。

1. 慶事（褒賞、叙勲等）の場合
 - ・受章者、受賞者の氏名、年齢、卒業年次、学科、住所、電話等
 - ・受章、受賞の種類（褒賞、叙勲その他の賞の種類）
 - ・受章、受賞の日時
2. 慶事（選挙の当選等）
 - ・当選者氏名 ・選挙の種類 ・就任年月日
3. 弔事の場合
 - ・逝去者の氏名、年齢、卒業年次、学科、住所、電話等
 - ・ご遺族（喪主）の氏名（逝去者との続柄）
 - ・通夜の日時、場所
 - ・告別式の日時、場所

平成20年度部会・支部活動費の申請について

平成18年度より、部会および支部の運営に必要な経費補助として「部会・支部活動費」を交付しております。このたび、平成20年度第45回通常総会・理事会において、

- ・部会活動費として基本料3万円+会員数に応じた額（基本料の1万円増額）
- ・支部活動費として基本料2万円+会員数に応じた額（基本料の1万円増額）

を交付する改正案が承認されました。

本活動費は、部会・支部から交付申請をいただくことで支給することとしています。つきましては、部会・支部連絡員の方は平成20年度活動費（予定のものでも可）の申請書に記入の上、事務局に提出してください。

なお、平成20年度から同窓会創立50周年記念事業が開始されるため、必ず総会を開催していただき常務理事の派遣依頼も併せてお願い申し上げます。

〔注意〕

本活動費は、部会・支部総会開催補助金とは異なります。総会開催補助金は別途申請ください。

クラス会等開催予定のご連絡のお願い

各期のクラス会や地区別の集まり、同好の集まりにも創立50周年記念事業の募金に関して呼びかけをしたいため幹事、代表者の方は下記内容の情報提供をお願いいたします。

- ・クラス会名 ・開催日時 ・開催場所 ・連絡先

会報へのご意見感想を是非お寄せ下さい

同窓生の方のお便りお待ちしております

地元 小金井市の商社


有限会社 高岡機工

〒184-0001 東京都小金井市関野町1-4-6

TEL: 042-383-6100 FAX: 042-384-4993

E-Mail: takaoka@basil.ocn.ne.jp

☆お気軽にお問合せ下さい

- * 試験片・実験材料 販売及び製作
- * 研究装置・機器 製作、相談
- * 素材部品・加工 相談、受請 加工機械販売
- * 装置部材・機械部品 販売
- * 各種工具販売 作業台・実験台及びスチール製品販売
- * 各種部材(ネジ・材料・配管部材)
- * 修理、アフターフォロー、各メーカー情報のフィードバック



牧場産直 価値ある本物

- * 新鮮！美味！安心！「ゴールデンポーク」「スーパーゴールデンポーク」
- * ドイツ DLG 国際食品品質競技会9年連続金メダル受賞！
「世界が認めたハム・ソーセージ、デリカ調理食品」
- * 本物の食と健康の理想郷！「ミートショップ・レストラン・地元農産物直売所・天然温泉まきばの湯・パークゴルフ場他」P1000 台完備

株式会社 **埼玉種畜牧場・サイボクム**代表取締役会長 **笹崎龍雄** (昭和15年・獣医学科卒)

TEL. 042-989-2221 (代) FAX. 042-989-7933

<http://www.saiboku.co.jp/> 〒350-1221 埼玉県日高市下大谷沢546

理化学機器

有限会社

新栄化学商事

営業品目

- ・各種ガラス・樹脂製品
- ・理化学用測定器類
- ・その他消耗器材
- ・精密機械加工
- ・板金加工

〒197-0003

東京都福生市熊川1325番地 1-21-201

Tel & Fax 042-551-3405

人と出会い、 自然と調和する。

73東陸自2貨2第293号
蓼科観光株式会社

松島運輸株式会社

取締役 松島 勝之助
社長 (昭和16年農)

相談役 野田 太
(昭和26年農)

本社 東京都杉並区松ノ木1丁目12番4号
電話 03-3313-2291(代)
FAX 03-3313-2043

本社 東京都杉並区大宮1丁目22番35号
電話 03-3316-3217
FAX 03-3317-3497

美濃戸管理事務所
長野県茅野市玉川字原山11400番
0266-74-2221(代)

多摩営業所 東京都町田市小野路町1048番1号
電話 042-736-2471

丸山管理事務所
長野県諏訪郡原村字原山1217番24
電話 0266-74-2012(代)

東京都知事許可(特16)第122771号

松島興業株式会社

代表取締役 松島 勝之助
会長 (昭和16年12月農)

本社 東京都杉並区松ノ木2丁目1番12号 MKビル
電話 03-3313-2411(代) FAX 03-3317-3497
多摩営業所 東京都町田市小野路町1048番1号
電話 042-763-2471 FAX 042-736-2427



松島興業株式会社

新触媒技術「アルマイト触媒」による

VOC排ガス触媒燃焼処理装置

アルキヤットでは優れた低温活性と熱応答性を併せ持つアルマイト触媒を採用することで、従来にはない特長を持つVOC触媒燃焼装置をご提供いたします。



化学工場 30Nm³/min



塗装工場 920Nm³/min

コンパクトで低燃費。環境に優しい処理装置

- 低燃費
- コンパクト・省スペース
- 迅速な起動・停止
- 充実した安全装置・操作性

株式会社アルキヤット

東京都小金井市中町2-24-16
TEL&FAX : 042-388-7761
E-mail : info@alcat.co.jp
http://www.alcat.co.jp



Theme “まだ削りますか!?”

弊社は転造盤の国内トップメーカーとして、社会に貢献させて頂いております

転造とは…

簡単に表現すると、読んで字の如く
転がして造る加工方法です。



特徴

ネットシェイプ成形のため、環境に易しく、
又、切削と比較して効率の良い加工方法です。



経済産業省

“2007年版

元気なモノ作り中小企業300社”
に推薦頂き、受賞いたしました。

代表取締役社長
新 仏 利 仲
(S46年 卒業生)

株式会社 ニッセー

山梨県大月市富浜町鳥沢2022

Tel : 0554-26-6012

Fax : 0554-26-6017

HP : http://www.nisseiweb.co.jp

忘年会・新年会・歓送迎会・クラス会・謝恩会
PTA会合・周年行事・結婚披露宴・御法事

CATERING Service

出張料理

パーティ・御宴会は
サンフリアで!!

お集まりにふさわしい雰囲気演出致します。
お客様のご予算に応じたお料理お飲物を調整致します。



グラス～テーブルクロス等
あらゆる備品を用意し、
セッティングからサーバー
後片付けまですべて
おまかせ下さい。

府中グリーンプラザ内
府中駅北口駅前

サンフリア

TEL&FAX (042) 368-6368

府中グリーンプラザ 会議室・和室等を御利用下さい。10名様～250名様
府中市府中町1-1-1グリーンプラザ3F

試薬 理化学機器

株式会社 三友商会

代表取締役 金森 信次

〒183-0041

東京都府中市北山町2-33-58

PHONE 042(502)1200

FAX 042(502)1300

E-MAIL sanyuu@jcom.home.ne.jp

同窓会をもっと
イキイキ活性化させる
最強のWeb/パートナー

私たちは
同窓会を
応援します

Bikita
同窓会コミュニティサイト

<http://www.bikita.jp>

プラス プラス
同窓会 ++

同窓会開催で
お困りの方

同窓会運営で
お困りの方

同窓会を成功させるために、あなたの「こまった」を解決します。

<http://www.dousou.info>

□情報化支援 □デジタルコンテンツ □販促集客支援(DM発送代行)
□編集出版 □プリントオンデマンド □印刷物全般

小野高速印刷株式会社

TEL 097(558)3444代 FAX 097(552)2301

〒870-0913 大分市松原町2丁目1-6
<http://www.ohp.co.jp> E-mail: oita@ohp.co.jp



ISO 9001
BUREAU VERITAS
Certification



MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing.

小金井キャンパス正門



MEMO

A series of horizontal dashed lines providing space for a memo or notes.

編後 集記

Editor's note

「農工通信79号」をお届けします。表紙は、毎回好評を得ています佐藤勝昭先生の水彩画で、工学部キャンパス内の生物システム応用科学府本館です。今号から「叙勲者からの寄稿」「退職者のご挨拶」を新しく掲載しました。農工通信の内容等にご意見やご提案などがありましたらお気軽に同窓会事務局までお願いいたします。投稿原稿（題目欄を除く文字数は、0.5ページで850字、1ページで1800字）、「部会・支部・クラス会だより」や「掲示板」の内容も募集しています。

亀山理事長以下の常務理事の執行体制が変わりました。今後ともご協力をお願いいたします。なお、同窓会創立50周年記念事業の募金を開始しました。皆様方のご支援を賜りますようお願いいたします。

（佐藤敬一、林産S56）

農工通信 第79号

発行日 平成20年（2008年）8月1日

発行所 東京農工大学同窓会

連絡先 〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1 東京農工大学同窓会事務局

TEL 042 (364) 3328 FAX 042 (335) 3500

e-mail info@tuat-dousokai.jp <http://tuat-dousokai.jp>

振替口座 00120-9-93147番（加入者負担）

加入者名 東京農工大学同窓会

印刷所 小野高速印刷株式会社

〒870-0913 大分県大分市松原町2-1-6

農工大 MOT

Management of Technology

学生募集

もう一度母校で
学んで
みませんか

MOT は、技術を事業化するための知識と
スキルを身につけるための大学院です。

農工大では、2005年4月に専門職大学院MOTを開設いたしました。
農工大MOTは技術リスクマネジメントに重点を置いています。



農工大MOTは、先端産業ビジネスを創出できる21世紀のスマート
マネジャーを徹底的に育成することをミッションにしています。
詳しくは、<http://www.tuat.ac.jp/%7Ermmot/> をご参照ください。

農工大MOT入試説明会

- 日 時 10月18日(土) 及び 1月10日(土)
- 場 所 田町 キャンパスイノベーションセンター